

オラリオに無敗の弁護士がいるのは間違っているだろうか

コクーン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

地上最強の弁護士こと古美門と黛の織り成すオラリオので激闘。
一風変わった2人の紡ぐ物語は果たしてどうなるのか！

目次

拝金主義の最強弁護士	1
ストーカー男を弁護せよ	17
最低男の離婚裁判！	37
豊満牛乳と強欲弁護士	64
強欲弁護士と世界扉	93
【完結】その後の世界（キャラ設定）	126

「これが詐欺じゃないと言うならば一体何だつて言うんだっ！」

オラリオ最強の守銭奴もとい弁護士ケンスケ・コミカドは現在、イケロス・ファミリアを訴えたロキ・ファミリアに所属する団員の一人を相手に裁判の真つ最中であつた。

貧乏人を相手にしないコミカドはどうでも良いとばかりに切り捨てようとした案件なのだが、相棒のマユズミが強引に持ってきた案件であり最大派閥を相手にする裁判と知り弁護士活動を引き受けたのである。

傍聴席にはロキ・ファミリアの面々が大勢座っており、オラリオにおける名物となつているコミカドの弁護を楽しみに来ている者達で溢れかえっている。

「いいですか？ 似顔絵というのは描く者の主観と腕前により出来具合が大きく左右されるものなのです！ 貴方が詐欺だ詐欺だと必死に訴えているのは承知していますが、それならばランクアップした冒険者などの似顔絵をギルドの掲示板に貼り出すのだつて詐欺でしょう？ 似顔絵はあくまで絵であり本物とは違うのだから」

「げ、限度つてもものが有るでしょうっ！ 似顔絵の女性と実際に参加した女性の容姿に差が有り過ぎだ！」

ロキ・ファミリアの団員にしてLv3の冒険者であるバルスは魂の叫びといつても過言ではないほど必死に己の心情を訴えかけるのだ。

ことの始まりは1週間前——イケロス・ファミリア主催の合コンパーティに多額のお金を支払い参加したバルスは他の男達動揺に女の子達との出会いを今か今かと楽しみに待ち望んでいたのである。

ところが、実際にやって来たのは事前に見せられていた似顔絵とは似ても似つかないミノタウロスのような女達ばかりであり中にはイシユタル・ファミリアの男殺しことフリユネ・ジャミールさえいたのである。

強制的にお持ち帰りという名の拉致をされた男達は一生もののトラウマを刻み込まれたのである。

「こんなっ！　こんな悪質な合コンが有るかっ！　断固としてイケロス・ファミリアには慰謝料5000万ヴァリスと公式の謝罪を要求する！」

バルスの悲痛な叫びを聞いている仲間達は呆れたような、そして情けないような顔でバルスを見つめている。もつとも、それとは対照に神々の多くはニヤニヤと面白いモノを見るように笑みを浮かべているのだが……。

「一体全体何が不満だというのですか？　全員見目麗しい美女ばかりで羨ましいじゃないですか。　ですよねえ、当事者であるフリユネさんもそう思いませんか？」

「ゲゲゲゲゲッ、まったくだよ強欲弁護。グリードデیفエンス　アタイの美しさを目の当たりにして頭がイカれちゃったのじゃないかあ？　ゲヘヘヘッ、また可愛がってやるさあ〜」

ヒキガエルのような醜い顔をこれ以上無いほどにニヤニヤさせながらバルスを見つめるフリユネに、思わず周囲の男達が同情するような目でバルスを見るのだった。

「ど、どこが美女だあっ！　この女が美女ならこの世の女は全員美女になるわ！　容姿や体格が似顔絵と違い過ぎるだろうがっ！　この紙には美の女神のように美しく描かれているのに現実はコレだぞ！」
「私にはソツクリに見えますがね〜。　容姿に拘り過ぎじゃありませんかあ？」

「どこがソツクリだあっ！　それに男なら美人に拘るのは当然だろう！」

有り得ないとばかりに叫ぶバルスはコミカドに食って掛かるのだが、そんな反応を予想していたのかコミカドは余裕の笑みでバルスを見つめる。

「あはははっ、確かに男ならば美人を求めるのは当然ですな。　同じファミリアの女性陣では満足できないから他の派閥の女性との交流を深めたいわけですか……その気持ちは理解できますよお？」

「はっ？　い、一体なにが言いたいんだっ！」

「なあに、私も以前そちらのファミリアの団長様と一緒に歓楽街の女の子達とお食事会に参加した事が有りますからねえ。別派閥の人々と交流を深めるのは確かに重要ですからお気持ちは理解できますよ」

その瞬間、ロキ・ファミリアの団員達は一斉に団長であるフィン・ディムナを見つめる。特にアマゾネスの少女であるティオネ・ヒリュテは野獣のような瞳でフィンを睨みつけるのだった。

「……………だんちよう?」

「ティオネっ、誤解だよ! あれは団長同士での話し合いであって娼婦の人達が来るとは聞かされてなかったんだよ。邪推は止めてくれないかな」

「あははははははっ、そうですよティオネさん。例えば娼婦の女の子達にお持ち帰りされて朝まで部屋から出てこなかったとしてもフィンさんを信じてあげるべきです」

——シーンッ!——

恐ろしい程の静寂が傍聴席を支配するのだが、ティオネの瞳からは光が消え不吉なオーラを漂わせている。さすがのフィンも不味いと感じたのか徐々に距離を取りながら後ずさりを始める。

「ティオネ、まずは落ち着きなさい。ちよつと、ボクはトイレに……………」

「うがあああああああつ、だんちよおおおおお——ッツツ!」

「おいバカゾネス落ち着け。テメェらも止めろ」

フィンに向かって襲い掛かるティオネを押さえつける団員達だが凄まじい彼女のパワーを前に傍聴席が大騒ぎになってしまふ。エルフの少女であるレフィーヤなどはあわあわと慌てながら避難し始めているのだが。

「ぐおおおおおおつ、はなせえええええつ!」

「落ち着くんじやティオネ! リヴェリアも何とか言つてやらんか

い」

「はあ、やれやれだなウチの若い連中は。　アイズとベートもガレスを手伝ってやれ」

ハイエルフの王女であるリヴェリアの言葉に第一級冒険者達が全力でティオネを押さえ始めるのだが、阿修羅となったティオネは仲間達の手を振り解き裁判所のドアを開けて愛する団長を追いかけていく。

「だんちよおおおおおおおつ、逃がさないiiiiiiiiiii
いいっ！　キシャアアアアアアツツ」

仲間達はゲツソリした様子で傍聴席を後にするティオネを見送るのだった。

「さて、気を取り直して話を続けましょうか」

「――」　お前のせいだろうがっ！　「――」

裁判官と傍聴席の者達が心の一つにした瞬間であった。

「話を戻しますがバルスさん、貴方はフリユネさんの容姿を見てどこが不満なのか具体的に説明できますか？　人の美醜というのは見る者によって感じ方が全く違うのですよ！　貴方が合コンに参加した女性陣をブサイクだと思おうが他の人達も同じようにブサイクだと思っているかは別問題なのですっ！　よって美人が参加しなかったので詐欺だという貴方の主張は断固拒否します」

「そんな、そんな馬鹿な事が有って堪^{たま}るかあっ！　エルフのようにお淑やかで上品な女が来るならば納得できるが幾らなんでも酷過ぎるだろうがっ！」

絶対に認められないとばかりに声を荒げて叫ぶバルスにコミカドは間髪入れずに反論する。

「エルフはお淑やかで上品？　それはどうでしょうねえ。　マユズミ

く、アレを見せて差し上げなさい」

「……………はい」

被告代理人席に座るマユズミはコミカドの言葉におずおずと水晶を取り出す。メモリークリスタルと呼ばれる代物であり映像や音声を記録できる魔道具なのである。

マユズミが水晶に魔力を込めると突如として水晶から光が漏れて映像が映し出される。

「え？　これって……………」

そう呟いたのはロキ・ファミリアに所属するエルフの少女レフィーヤである。彼女が驚くのも当然といえば当然の話である。そこに映し出されていたのは自分なのだから。

「これは貴方のファミリアに所属しているレフィーヤさんの映像です。裁判をするにあたって相手のファミリアを調べるのは当然ですからねえ。様々な団員の方々を調べさせて頂きました」

「これが何だっていうんだっ！」

コミカドの意図が分からず聞き返すバルスだったが、いやらしい笑みを浮かべるコミカドは何でも無いかのように口を開く。

「貴方がエルフの女性はお淑やかで上品だと言い張るので現実をお見せしようというのです。マユズミい、再生しなさい」

「はあ……………分かりました」

——ポチッ！

マユズミが水晶についているボタンを押すと水晶からは音声と映像が流し出されるのだが、その映像に周囲の者達と張本人であるレフィーヤは愕然とするのである。

——んはあああつ、サイコーですう——

——ひやああんつ、そこつ、激しすぎりゅうう——

——い、イクツ、イクイク、イクうう——

何と、映し出されたのは全裸で男の相手をするレフィーヤの姿であつた。それも一人や二人では無いのだ。

周囲には10人ほどの男が控えておりその全員が全裸なのである。

何をしているのかなど子供でも分かる光景だろう。

——あはあつ、幼い男の子はやっぱり最高ですう——

——ボウヤあ、こっちへいらつしやい——

——金で男の子を買うのって止められません！——

そのとてつもない映像にロキ・ファミリアの団員達は勿論のこと、原告のバルスでさえ絶句してしまうのだが当の本人であるレフィーヤはあんぐりと口を開いて何か言いかけている。

「な、な、なあ……何ですかこれはあああああああつ！ 何で私が男の子達とつ、こんな破廉恥なことをしてるんですかあああつ！ 一体これはどうなってるんですかつ！ って……アイズさん、誤解です、誤解ですから私をそんな汚物を見るような目で見ないでくださいっ！ 皆さんも変な目で見ないでくださいっ！」

「隠す事はありませんよレフィーヤさん。 人の性癖はそれぞれですから恥じる事は無いのです。 如何ですかバルスさん、エルフといえど誰もが貞淑で上品とは限らないのですよ？」

「なあ、嘘だ……し、信じ、られ、ん……エルフにもこんなアバズレがいるなんて……」

エルフという種族に対してある種の理想を抱いていたバルスは言葉を詰まらせてしまうのである。

「だからバルスさんっ！ これは何かの間違いですっ！ 私はこんな事してませんっ！ アイズさんも信じてくださいよっ！ こんなデタラメに決まってますっ！」

「うん……私はレフィーヤがどんな趣味を持とうと……見捨てない、から……」

「うがあああああつ、違いますううっ！ その弁護士っ、これは何ですかつ！ 何で私がこんな事をつ！」

獣の咆哮のような声を上げてコミカドを問い詰めるレフィーヤなのだが、コミカドは臆す事無く即座にレフィーヤの質問に答える。

「おやあ、お忘れですかあ？ 貴方が4日前にオラリオの学区にてお金を払って遊んだ時の映像ですよ？ たっぷり楽しんでたじゃないですかあ？」

「嘘です嘘ですうううっ！ 私はこんな事してませんっ！
これは一体誰なんですかッ！」

「どこからどう見ても貴方じゃありませんか。 声だって全く同じですよ？　ねえ、バルスさん、どんな女性だって完璧ではないのですよ。 外見、中身、財力など様々な観点から異性を評価するのが人間ですが、合コンに來た女性陣達だって必死で生きているのです。 そんな彼女達を貴方は侮辱したのですよ」

「う、うう……そんな、お、俺は……俺はただ、エルフのように貞淑で慎ましい女性との出会いを……」

コミカドの悪魔のような語りかけに意気消沈してしまったバルスはエルフに対する理想像が崩れてしまったのか床に尻餅をついてしまふ。

「貴方はエルフの女性に対して身勝手な理想を押し付けていますが、今回の合コンだって同じですよ。 貴方の身勝手な理想を押し付けて、その期待に見合う女性が居なかったから裁判をする。 つまり貴方は理想と現実の線引きが出来ていない世間知らずの甘ったれボウヤなのですっ！」

「い、いや、しかし……しかし、この似顔絵は悪意を持って騙すつもりで描かれた物じゃないか！ どう見たって別人なのに参加費を得る為に美化したのがバレバレだ！」

「その点に関して私の方から被告へ主尋問をしたいと思います。 デイックスさん、よろしいですね？」

「はい！ 自由！」

イケロス・ファミリアの団長であるデイックスが起立すると裁判官と傍聴人の視線が注がれる。 後ろのほうでエルフの少女が頭を壁に叩きつけて発狂しているがコミカドには知った事ではないようだ。

「貴方はこの似顔絵を見た人々を騙すつもりで描いたのですか？」

「いいえ。 私にとっては本人達とソックリに描いたつもりです。 どこからどう見ても瓜二つじゃないですか？ 私は絵の才能が有りますからねえ、冒険者よりも画家になったほうが良かったかもしれないですね」

いけしやあしやあと嘘をつくディックスを前にバルスの視線に殺意が籠もる。

「画家ですか……私もそう思います。では次の質問です。原告であるバルスさんは貴方を詐欺師扱いしていますが、どう思われますか？」

「一刻も早く誤解が解かれる事を祈ります。私にとっては美女ばかりですがバルスさんにとっては違ったようですね。しかし美醜というのは主観によって異なるので仕方ありません。不幸な事故ですよ」

「全くもってその通りです！ 冒険一筋でロクに女に免疫の無いイカ臭い童貞野郎にささやかな出会いをプレゼントしようとしたディックスさんの真心は伝わらなかったようですね」

「誰がイカ臭い童貞野郎だっ！ この詐欺師が調子に乗りやがって！」

あからさまに惚けるコミカドとディックスの2人を前に思わず叫んでしまうバルスだが有る意味当然だろう。フリユネ・ジャミールアンドロクトノスと男殺しに壊される寸前まで犯されそうになったのだから。

「詐欺師とは酷い言い草ですねえ。チェリーを卒業させて貰えた事に感謝せず独りよがりの勝手な価値観を喚く馬鹿がいると周囲の人々は大変です！」

「野郎ッ！ ざけやがって！」

「双方とも静粛に！」

険悪な雰囲気を感じたのか裁判官が2人を宥めようとする。

「誰が見たって参加者の女共はブサイク揃いだろうが！ 無駄な時間と費用を使って精神的苦痛を味わわされたんだから慰謝料を払うのは当然だろうっ！」

「ブサイクというのは貴方の個人的な主観であり、参加者募集のチラシにも似顔絵と多少の違いが有るかも知れませんがご了承くださいますと書いてます。きちんと注意書きを読まなかった貴方に責任が有ります」

「多少どころじゃないだろ！ 全然別物じゃないかっ！」

「はははっ、ご冗談を。どのくらいが多少なのかも人によって様々ですし、必ずしも理想の相手が現れるとは限らないのが合コンなのです。そんなに理想の相手と結婚したいのならばエルフの里にでも行つて若い娘を拉致した後、自分好みに育てる為に光源氏計画でも練りながらイカ臭い部屋で何十年でも待ち続けると良い。少しはマシになるだろう！ 犯罪者として牢獄にブチ込まれなければね！」

「被告代理人！」

「失礼、表現が不適切でした」

普通の弁護士ならば間違いなく匙を投げるだろう案件をここまで有利に立ち回るコミカドの手腕は流石といえるだろう。依頼したディックス本人も驚いているようだ。

「皆さん、バルスさんが意味不明な意見を喚いておりますが、ディックスさんが悪意を持って参加費を騙し取ったという具体的な証拠は何一つ無いのです。どんなに怪しくとも、どんなに憎くとも一切の私情を排して人を裁くのが裁判であり司法なのです。無論、公正大な裁判所におかれましては徹底して法と証拠に基づいて判決を下される事でしょう。そしてその場合どちらが正しいのかは明白です」「デタラメだ！ コイツは只の詐欺師だ！ 誰が見たって詐欺じやないか！」

「原告は静粛に！」

「もし何か矛盾点や不審な点が有るならば遠慮せず言うてくださいバルスさん。ディックスさんが悪意を持って騙したという証拠が有るならばの話ですがね」

「ぐっ……………くうううっ……………あ、あり、ません」

「ふっふっふ。 裁判長、以上です」

「主文、原告の主張と請求をいずれも棄却とする」

「嘘だあつ！ こんなのおかしいっ！」

「勝てると思ったか馬鹿があああつ！ 100億万年早いわあああつ」

！ 一度朝鮮半島に出向いて北の將軍様と一緒にトンスルを飲み交わしてくると良い、少しはマシになるだろう。 S P の連中に射殺されなければねええ！」

こうして本日も見事な勝利を飾るコミカドであつた。



「先生、こんなやり方してるとその内刺されますよ。　はあ、元の世界でも酷かったけどこの世界に来てから更に悪化してしまったわ」

「それにしても神様がいるなんて私には思いもしませんでしたよ。」

「私は誰よりも真人間だあ！ 冒険者なんていう命の叩き売りをやっている馬鹿共より遥かに堅実的な生活をしているしLVは9まで登り詰めたのだぞ？」 神の恩恵というのは最高だな」

思い起こすのは10年ほど前の光景。事務所にいたはずの2人が
見ず知らずの場所に転移させられ食事にも困っている所を拾って

れたのがミアハ・ファミリアの主神であるミアハだった。

当初、神などという存在を全く信じていなかった2人はミアハの事を変質者か異常者と思ったのだが、食事に釣られてホームまで行き話を聞くと、目が飛び出そうになるほど驚いたのであった。

現代日本という恵まれた環境で育った2人は当然ながら教養もあり、当然ながらドラゴンや神々の出てくるファンタジー世界を信じる事ができなかった。だが、その認識はオラリオ中を探索する内にアツサリ吹き飛んだ。

魔法使い、エルフ、ドワーフ、亜人、モンスター等々、自分達の世界とは余りにも違い過ぎる光景を目の当たりにした2人は揃って絶叫したのである。

「肉体は若返って健康になったし、ポーションとかいう訳の分からん薬も有るから長生きできるだろう。残念なのは服部さんの手料理が食べられん事だが仕方あるまい」

「皆今頃どうしてるかなあ。ミアハ様には事情を話してるけれども戻れるなら元の世界に戻りたいですよね？」

「まあ私は結構この世界を楽しんでいるのだがね。エルフなど美人ばかりだしイシユタルからまたもやベッドに誘われて大変だったのだよ。モテる男は辛いよマユズミ君」

スケベで守銭奴のコミカドは元の世界ならばそれほど女性にモテるわけでは無いのだが強さと財力が絶対のオラリオでは様々な女性からアプローチを受けているのだった。

当然ながら美の女神であるフレイヤやフレイヤを目の仇にして少しでも戦力を求めているイシユタルなどからも誘いが来るのである。そんなコミカドを見るマユズミは透視スキルでコミカドのステータスを見て溜め息を吐く。

ケンスケ・コミカド

L v 9

力；F 343

耐久；E 445
器用；A 909
敏捷；B 706
魔力；SS 1044
対異常；A 悪運；A 洞察力；S 精癒；B 狩人；E

《魔法》

【シャドーマン】

己の分身を最大で4名まで作り出せるが一つ作るごとに分身のLVが1つずつ下がる。

《スキル》

リーガルソウル

【弁護魂】

- ・ 相手を論破すればする程ステータスが上昇する
- ・ 勝利を諦めない限り効果継続
- ・ 連続して論戦に勝利する度に上昇値がUP

この凄まじいステータスに思わずマユズミは頭が痛くなってしまう。

日本に住んでいた頃から天上天下唯我独尊を地で行く男だったというのに、オラリオ最強の座を手にして女性からモテモテになったコミカドは以前の100倍ロクでなしになってしまったのだ。

「ははははっ、デメテル様からお誘いが来ちゃったし困っちゃうなあ。今日は歓楽街で朝まで私のフェロモンに満ち溢れたセクシーな肉体で女の子達を泣かせてやろうじゃないか！」

「今日はミアハ様とナーザさんでファミリアの運営方針を相談する派閥内会議です！ 今や先生のお陰でオラリオ有数の富豪ファミリアになったんですからしつかりしてください！」

「堅い事言うなマユズミいい、大体君はウザくて空気が読めない嫌われ者のクセに独りよがりの勝手な価値観を人に押し付ける典型的な

馬鹿女なんだから慎みを持ちたまえ」

「指をささないでください！ 私には皆から好かれる人気者です」

弱肉強食のオラリオに住んでいるというのに、日本にいた頃から全く成長していないこの2人はある意味では大物だろう。

「それにしても、今度はもつと正義を貫けるような弁護をしたいです。

ディアンケヒト・ファミリアとの裁判で勝訴した時は貧しい方々が大喜びしてましたしナーザさんも喜んでましたよ」

「ん？ ああ、守銭奴のオッサンが主神を務めているファミリアの何とか。 ロクでなしだが金持ちファミリアだったからなあ、実に良い収入になったよ」

「守銭奴は先生も同じです！ 何度も何度も裁判で慰謝料を奪い取ったせいで、現在あのファミリアは潰れる寸前ですから何とも言えませんが……」

コミカドの苛烈な弁護活動と裁判にて没落寸前のディアンケヒト・ファミリアを思い浮かべるマズミ。

あらゆる手段を用いて裕福なファミリアを没落させてきたコミカドの手腕はオラリオの名物となっており、コミカド1人の手で壊滅させられたファミリアは数知れず。

そのお陰かミアハ・ファミリアは金を借りる側から貸す側にまで成り上がったのだが、それにしてもディアンケヒトのゲツソリした時の表情は哀れだったなあとマズミは同情してしまうのだった。

「要するにマヌケなんだよ！ この世界は踏みつけるか踏みつけられるかの世界であり、踏みつけられるのはいつだってあの手の馬鹿共なんだよ！ それにしても哀れだよなあ。 借金返済の為に娼婦になった女達だっているそうじゃないか？ 中には貞淑なエルフの女性だっていたらしいし、貧すれば鈍するという奴だねえ」

「先生は何時もやり過ぎなんです！ って、そういえばエルフの女性という言葉で思い出したけどあのロキ・ファミリアに所属していたレフィーヤちゃんとかいう女の子ですけど、隠し撮りはマズいですよ！」

「隠し撮りい？ 私はそんな事など一切していない」

マユズミの言葉にコミカドは心外だと言わんばかりに反論する。コミカドの口から出た次の言葉はマユズミの予想を遥かに超えているものだった。

「あれはソーマ・ファミアにいるリルカなんちゃらという小娘に変身魔法で一芝居打って貰っただけだ。よほど金に困っているのか500万ヴァリスも渡したら簡単に演技してくれたぞ」

「捏造じゃないですか！　いくら原告を説得して論破する為とはいえ女の子の名誉を著しく傷つけたんですよ！」

「ほっとけほっとけ！　あんなペツタンコな小娘どうせ長生きしても男から相手にされず、行く宛ての無い花嫁修業を婆さんになるまでしているのが関の山だ」

「ああ、この人は全然変わってない……………」

絶好調のコミカドは今回の裁判で多額の謝礼を貰っており歓楽街の娼館で遊ぼうかな等と暢気な事を考えているのだったが、ふと背後からこの世の全てを呪うような声が聞こえた。

「ふふふふふふふつ、あひやひやひやひやあああ、やっぱりいゝ捏造だったんですねえ!!　あの後物凄く大変だったんですよおゝ。　キヒヤヒヤヒヤヒヤああ」

「……………マユズミ君、何とかしなさい」

「絶対嫌です。先生の責任ですからご自身で解決してください」

夢遊病患者のようにフラフラとした足取りで近づいてくるレフィーヤはガラガラした獣のような瞳でコミカドを睨みつけて来るのだ。

「ひいーひっひっひ、アイズさんやリヴェリア様からは汚物を見るような目でアバズレ扱いされたしファミアの中では尻軽女と呼ばれているんですよ？　うひやひやひやははあ……………待ちなさあああああいつ!!」

「ヒイヒイヒイヒイツ、先生逃げますよ！」

「クソッ、何でこんな事につ！　お前のせいだマユズミいいい！」

全速力で逃げ出すコミカドとマユズミは必死の形相であった。

エルフの魔法ならばどんな魔法でもコピーできる彼女は第一級冒

険者であるリヴェリアの魔法でさえ使いこなせるのである。突っ立っていればコミカドとて無傷では済まないだろう。

「ふふふつ、相変わらず素敵なコンビね。貴方もそう思わないオツタル？」

「私には何とも……………」

バベルの頂上で2人を見つめるのは美の女神フレイヤである。

フレイヤはコミカドの黄金のように輝く魂を見ながら恍惚とした表情を浮かべる。

「何故、あのような愚か者を気にかけるのですかフレイヤ様」

「あらあ、貴方ならば分かると思ってたのだけれど。あの男は情けない外見に反して素晴らしい魂を宿しているのよ？ ある種の天才と言っても過言じゃないわ♪」

「左様でございますか」

そう言いながら地上を見下ろすフレイヤとオツタルは追いかけてこをする3名に目を向ける。

「うがあああああああああああつ、絶対に許さない
いいいいいい！ 待てえええええええ！」

「マユズミ！ 囹になるんだ！」

「絶対嫌です！ ていうか先生さえないなければ私は無関係ですし、それじゃ先生お元気で！」

「貴様あああああ、マユズミいいいいいい！」

この日、コミカドは夜が明け朝日が昇るまで鬼エルフから逃げ続ける事になったのであった。

ストーリーカー男を弁護せよ

現在、裁判所にて弁護活動を行っているコミカドは何時ものように見事な手腕で相棒のマユズミと裁判に動しんでいるのであった。

「あゝあゝあゝあゝあゝ、ああ、俺はねえ、この世の中をねえ、変えたい一心で、ずっと冒険してきたんですう！　せやけど変わらへんからッ……」

「ノムラ被告はこのように狂うしか無かったです！　この救いようのない醜い世界を変えたい一心で冒険者（こうけんしや）を志し今まで生きてきたのです！　しかし、誰も認めてくれない、一向にランクアップできない、派閥内での疎外感を感じるなどの理由から温泉旅行で心を癒すしか無かったのです！」

「確かに疑われるような内容ですがあ、うううっ……冒険者という枠組みの中では極々小さいものなんですっ！　命がけでええええっ、少子化問題高齢化ああああああああっ！　あゝあゝあゝあゝあゝあゝ、この世のなひやああああああああああああっ！」

それにしても凄まじい号泣ぶりなのか裁判官と傍聴席が被告人を見て啞然としているのである。

勿論コミカドは余裕の笑みを浮かべながら話を紡いでいく。

「皆さん！　確かに年間190回以上の温泉旅行において領収書が全く残っていないのは不自然かも知れません。ですが、被告人はそんな事を気にする心の余裕が無かったです！　領収書を貰う事にさえ頭が回らない程に追い込まれていたのです！　彼がファミリアの活動費を横領した証拠はどこにも無いのです！」

「あゝあゝあゝあゝあゝ、高齢者問題はあつ、オラリオのみならずうゝこの世界全体の問題じゃないですかあああ！　皆さんのご指摘を真摯に受け止めてえええ、あゝあゝあゝあゝあゝああああっ！」

「ノムラ被告はこう言っているのです！　温泉旅行に行き多額のお金を使うことで温泉旅館の経営に協力して地域住民の為に経済を活性化しようと試みていたのです。老人ばかりの地域では働く者もおらず収入が不安定なのを見越してノムラ被告は地域調査をしていた

のです！」

下界の問題は下界に住む者同士で解決するのがオラリオの掟である為、嘘を見抜ける神々は裁判に参加できないのである。それが100%デタラメであつても裁判で勝利すれば無罪が確定するのがオラリオなのだ。

そこを利用したコミカドは嘘八百を並べ立てる。

「だがッ、しかあぁし！ 悪意ある方々の陰湿な訴えによりノムラ被告は今こうして横領犯にされようとしているのです！ 何と恐ろしい事でしょう！ 裁判官や傍聴席の方々には今一度考え直して欲しいものです。 彼が悪意を持って領収書を貰わなかったという証拠はどこにも無いという事を！」

「どう考えても横領でしょうがッ！ 我々アポロン・ファミリアは絶対に騙されないわよ！」

アポロン・ファミリアに所属する女性エリザベートはコミカドの弁論に烈火の如く激しく抗議する。無論コミカドもそんなリックスの反応を予想していたのか切り札を使う事を決めるのだ。

「裁判長！ 原告の訴えは信憑性に欠けています。 この女性は私に對して個人的な恨みを抱えているのです！」

「といますと？」

コミカドの言葉が気になったのか裁判長が思わず聞き返してしまう。

「原告であるエリザベートさんは、以前よりこの私に對して強い強い恋愛感情を抱いているのです。 ですが、私が彼女のラブコールに見向きもしなかった事から逆恨みしてしまったのです。 この私の興味を引く為ならばあの手この手で私を困らせようとするのですよ！」

「で、デタラメです裁判長！ この男に興味関心など一切ありませんっ！」

「彼女は二人つきりになると私に甘えてくるんですよ。 今まで何度も何度も断わったのにしつこく付き纏いながらアプローチをしてくるんですよ。 この間は仕方なくベッドで可愛がつてあげたんですがね。 マズミ、君の作った魔道カメラの写真を皆さんに

見せて上げなさい！」

「……………はい」

そう言いながらオラリオにおいてマユズミ以外には作れない写真を裁判官や傍聴席の人々に配っていく。

そこには嬉しそうに微笑みながらコミカドに甘えるエリザベートの姿やベッドの上で乱れるエリザベートの姿が大量に写っていたのである。

「はあああああつ！ 何よコレええええええ、絶対有り得ないっ！ 嘘よ嘘よ嘘よおお！」

「見苦しいですよエリザベートさん。 ロベルトさんも残念ですねえ、恋人が酷い裏切り行為をしている姿を見せられてしまったのですから」

その言葉にアポロン・ファミリアの傍聴席に座るロベルトに対して視線が集中してしまう。 本人は恋人のあられもない姿に絶句しているようだ。

「ろ、ロベルトっ、こんなのデタラメよっ！ 私が愛してるのは貴方だけなのよ！ この卑劣な男が嘘を吐いているだけよ！ この男がどんなに卑劣な男か知っているでしょうっ！」

「内腿のホクロの数まで知っている仲じゃありませんかあ？ 右足の付け根にホクロがありましたよねえ？」

「——っ!!!」

何故知^っているのだと絶句してしまうエリザベートだが、そんな彼女を他所にロベルトは口を開く。

「このアバズレがあっ！ お前のような汚い女を信じた俺が馬鹿だった！ 二度と面を見せるなっ！」

「そ、そんなあああつ！ この男のデタラメよ！」

「裁判長お、そろそろ結論が出ましたし判決お願いしまあす」

「主文、原告の請求をいずれも棄却とし被告へ対する慰謝料800万
ヴァリスを支払うものとする」

「こんなのデタラメよおおっ！ こんな裁判間違ってるわあつ！
このクズ男つ、許さないいい、殺す!!」

怒りのあまり魔法を唱え始めたエリザベートは唱えながらコミカ
ドに掴みかかる。

「落ち着きなさい原告人！ 取り押さえないさい！」

「うがああああああ、離せええええええええ！ 殺す殺す殺
すうううう、その男を殺させろおおっつ！」

大暴れしながら職員やファミリアの団員に捕まるエリザベートは
悪鬼のような顔でコミカドを睨みながら連行されていってしまった。

——シーンッ！——

「まったく、実に見苦しい女ですね。 それでは帰るとしましょう。

行くぞマユズミ君！」

「エリザベートさんが可哀想ですよ先生！ 恋人にも振られて被害者
なのに加害者に慰謝料を払わされるなんて絶対に間違ってます！」

「黙れ朝ドラあ、我々の仕事は依頼人の利益を追求する事であって真
実を明らかにする事では無いのだよ！ いい加減に覚えろポンコツ
幼稚園児いいつつ！」

「指ささないでください！ しかもあの子の変身魔法でまた捏造した
写真を使ってますし」



三日後――。

ミアハ・ファミリアのホームの隣に新築した新コミカド事務所にてコミカドとマユズミは昼食を食べていた。

「ですから先生、アミッド・テアサナーレちゃんが可哀想だと思いませんか？ 己の正義を貫いて内部告発してくれたのに今じゃ裏切り者扱いで疎外されてるそうなんです。ミアハ・ファミリアに改宗させましょうよ！」

「疎外されてる？ あの女が内部告発したせいで一時は大手の商業系ファミリアとして飛ぶ鳥を落とす勢いだつたのに今じゃ没落寸前なのだ！ 疎外されても当然の結果だっ！」

「どの口が言うんですか！ 私達が説得したから内部告発してくれたんでしょうがっ！」

「忘れたね〜」

ヌケヌケと自分を馬鹿にするようなコミカドに対し、徐々に頭に血が上るマユズミ。

「と・に・か・く、今回の件はアミッドちゃんに正義がありますからミアハ様に直談判しますからね！」

「好きにしたまえ。まあ、もつともナアーズには嫌われてるから来ても一緒だろうがね。ディアンケヒトの所で活動してた頃からあの男について回って嫌がらせの片棒を担がされてきたのだからなあ！」

「本来の彼女は優しい性格です。無理矢理ディアンケヒトの指示で借金の取立てや圧力をかける手伝いをさせられてただけなんです！」

ミアハ様だって理解してくれますよ！」

争う2人だったが、そんな2人の事務所に一人の小人バルウムの女の子がやって来た。

少女の名前はリリルカ・アーデ。

この世界において加賀蘭丸のポジションを務めるコミカドの協力者である。本人は乗り気ではないのだが最強の実力者であるコミカ

ドとのコネクションや報酬の高さにより協力関係をきづ築いているのだ。

「コミカド様にマユズミ様あゝ、失礼いたしますね」

「あつ、リリちゃん相変わらず可愛いわぁ♪ 抱き締めたくなっちゃう！ 飴ちゃんあげるからいらっしやい！」

「子ども扱いしないでください。 リリはもう15歳ですっ！」

日本には小人などという種族がいなかったため可愛い外見のリリルカはマユズミから可愛がられているのだ。

「それより今日はどうしたのだね魔法少女リリカル君」

「リリルカですっ！ 魔法少女って何の話ですか！」

「細かい事は気にしないでくれたまえ。 私は君の手腕を高く評価しているのだよ。 潜入操作に変身魔法や独自の情報網など子供とは思えない能力だし、この間もベッドの上では素晴らしい演技だったじゃないかあ？」

「リリはまだ男の人とは何もしてませんっ！ というか二度とあんな依頼引き受けませんからね！」

顔を真っ赤にして反論するリリルカは年頃の女の子そのものである。 リマユズミは可愛らしいリリルカを抱き締めたくてウズウズしているようだった。

「ははははっ、ソーマ・ファミリア脱退の条件は1000万ヴァリス払うんだったねえ。 脱退したら何時でもウチの事務所に来なさいリリちゃん！ 報酬は弾むから私と一緒に儲けようじゃないかあ」

「………凄く心配なのはリリの気のせいでしょうか……」

「リリちゃんもこんな大人になったら駄目よ？ それよりもお姉ちゃんの所へいらっしやい。 良い子のリリちゃんにはハンバーグを食べさせて上げますからねえ」

「だから子供扱いしないでくださいっ！ って、こんな事してる場合じゃなかったです。 依頼ですよ依頼！」

つつい2人の雰囲気は吞まれそうになったリリルカであったがここへ来た本来の目的を思い出し自分のペースを取り戻す。

「今回の依頼は中々の報酬ですよ。 何とアポフィス・ファミリアの

団員がロキ・ファミリアの九魔姫ナインヘルに対するストーカーで訴えられたんですってば！ アポフィス・ファミリアといえばカジノの運営などをしてたり都市の外と黒い噂が流れるファミリアですけど富豪ファミリアですよ！」

「リリルカちゃん、相変わらず君は素晴らしい！ このポンコツの蟹股女にも見習わせたいよ！」

金持ちが依頼人と知りご機嫌のコミカドはリリルカを持ち上げると子供のように遊び始める。

「それ高い高あい！ 良い子のリリちゃんに拍手うううつ！ そうれ飛行機だぞお！」

「リリで遊ばないでくださいっ！ 大体飛行機って何ですか！」

「先生っ、次は私にもリリちゃん貸してください！」

傍から見たらこの3人は3馬鹿トリオにしか見えないだろうが本人達にはどうでも良いようである。

「依頼人はアポフィス・ファミリアのアレックス・ブランドー様です。」

「というかそろそろ降ろしてくださいよコミカド様っ！ 馬鹿げた話ですが九魔姫ナインヘルに一目惚れして数ヶ月もストーカー行為に及んでいたそうですよ」

「確かにリヴェリアさん美人ですもんねえ。 リリちゃんの話にも納得できちゃうしエルフって羨ましいわあ」

何時までも美しいエルフに憧憬を抱いてしまうマズミだが女に生まれた以上は当然だろう。

「あの色気もヘツタクレも無いお堅いだけのクソババアの何が良いんだか！ どうせならフレイヤちゃんかイシユタルちゃんみたいな女が良い！」

「リリが口出しする事じゃ無いですけどリヴェリア様が聞いたら悲しみますよ？」

「あの魔法熟女がどうして悲しむんだ？」

「いえ、分からないようなら別に……………」

思わず溜め息を吐いてしまうリリルカだが放っておいたほうが楽なので無視する事に決めたようである。

そんな3人を尻目に1人の男が事務所に入ってくる。

「失礼しますがコミカド先生でしょうか？ こちらの少女に紹介されたアレックス・ブランドーです」

「これはこれは弁護士のコミカドと相棒のマユズミです。 リリちゃん、呼んで来たなら言ってくれないと困るんだよねえ。 まあ今はどうでもいいとして椅子にお掛けください」

「はい」

思わず礼儀正しいアレックスに驚いてしまうマユズミ。

悪神アポフィスを主神とするファミリアにしては団員の素行がしっかりしているのだ。

「では詳しい話をお聞かせくださいアレックスさん」

「はい、この少女から聞いている通り訴えられたんです。 おもにナインヘル九魔姫ことリヴェリア・リヨス・アールヴの側近であるエルフ達からなんです……」

「でしょうねえ、あのエルフ達って王族であるリヴェリアさんを崇拜していますから。 今回はコミカド先生でも勝ち目は無いですってば。

諦めましょうよ先生」

さすがに勝ち目が無いと判断したマユズミは乗り気ではないのかコミカドを宥めるのだが、アレックスはというとアタッシユケースをコミカドの目の前に差し出す。

「接近禁止命令が出されれば俺の愛するリヴェリア様に近づけなくなってしまう！ コミカド先生っ、この1億ヴァリスで何とかしてくださいっ！」

「先生っ、いくらお金を積まれてもこの裁判は「お引き受けしましょうアレックスさん！」って先生ってば！」

「自分がストーリーカーされてる等と思い上がった男日照りの勘違いババアを完膚無きまでに論破して逆に慰謝料を取ってやりましょうアレックスさんっ！」

恐ろしい反応速度でアタッシユケースを抱き締めるコミカドはまさに拝金主義の守銭奴そのものであり、ソーマ・ファミリアの団員よ

り金に汚いと呆れるリリル力であつた。

「さすがはコミカド先生！ 助かりますよお」

「あつはつはつはつはつは、お任せくださいアレックスさんっ！　口
キ・ファミリアは金持ちですからねえ。　どれだけ搾り取れるのか楽
しみですよ！」

「この人達、ホントに大丈夫でしょうか……」

「リリもマユズミ様と同じく心配です……………」

かくしてロキ・ファミリアを相手取るコミカドの戦いが始まるのであつた。



裁判当日

アポフィス・ファミリアの団員とロキ・ファミリアの団員はそれぞれ傍聴席にて殺伐とした雰囲気醸し出して相対していた。

特にリヴェリアの側仕えをしているエルフ達は親の敵を見るかの如く被告席を睨みつけている。

傍聴席に来ている神々なども30名は超えておりコミカドの担当する裁判は傍聴希望者が殺到してしまうのだ。

「起立ッ！ それでは始めます」

ニヤニヤした神々が見世物を楽しむかのように裁判の様子を見て
いるが、コミカドは賠償金を何に使うのかしか考えていなかった。

「それでは原告側から始めてください。原告代理人！」

「はい！」

そう言うとも如何にも頭が良さそうな女性エルフの弁護士が立ち上がりマイクの前まで向かう。

彼女の名はシャルデア・エルロン——オラリオの学区にてトップの成績で学校を卒業し、ギルドでの下積み経験を数年間勤めた後に冒険者となった叩き上げの実力者である。

「では始めさせて頂きます。事の始まりは今から数ヶ月前の事です。結論から言ってしまえば被告人ことアレックス・ブランドー氏はロキ・ファミリア副団長を務めるアールヴ氏に対して執拗なストーカー行為と1日に120通以上もの手紙を送りつけるという常軌を逸した行為に及びました」

淡々と話し始めるシャルデアだが、やはりエルフとして王族のリヴェリアを助けたのか冷静な言葉遣いの中にもアレックスに対する嫌悪が混じっている。

「それだけでは飽き足らず自宅がロキ・ファミリアのホームの近くに存在するのをダシにしてアールヴ氏が家に近づく窓の内側で全裸になって裸を見せつけているのです。この変質者に正義の鉄槌を下す必要が有ります！結論としては慰謝料700万ヴァリスに加え、正式な謝罪と接近禁止命令を要求いたしますっ！」

ざわざわ——

シャルデアの淡々とした弁論と美しい容姿は如何にも「できる女」であり、女性陣は感嘆の声を上げて憧れの目を向けているのであった。傍聴席の神々や男性陣などはニヤニヤと笑いを堪えているのだが。

「では被告人！」

「はいっ！では失礼いたします。ハッキリと言わせて貰いましょうっ！原告と原告代理人の主張は全く根拠の無い独りよがりの勝手な価値観であり、請求は断固拒否いたしますっ！」

「「「「っ！」「」」」」

まさかの完全否定とは予想もしなかったのかコミカドの主張に傍聴席の人々や神々は驚いている。

「原告代理人のシャルデアさんは被告がアールヴ氏をストーカーしていたと主張なさっていますが本当にそうなのでしょうか？ 具体的

にどのくらいの距離から付き纏っていたのか、付き纏っていた時間帯は昼なのか夜なのかそれとも夕方なのか、またはアールヴ氏の自信過剰に過ぎないのではないか等の疑問点が残ります」

「なっ、き、距離と言われても……そんな正確な事までは……。付き纏っていたとされるのは殆ど昼頃の時間帯だと他の方々に聞いておられます。それにアールヴ氏の自信過剰というのは考えにくいかと思います。王族出身のハイエルフであるアールヴ氏は美の女神に匹敵する美女であり他の女性とは訳が違うのですよ」

コミカドの重箱の隅を突くような発言に戸惑いながらも答えるシャルデアだが、この時の彼女は洞察力Sのスキルを持つコミカドを舐めていた。

「距離が曖昧なんですかあ？ 曖昧なのに何故ストーカーと断定出来るのですか？ 例えば常に一定の距離から原告の姿を覗いていたと断定出来るならともかく、毎回いる場所が違ったり距離も違ったり何故ストーカーと断定できるのでしょうか？ 近くに住んでいるのだから偶然が重なっただけでしよう？」

「そ、それは……」

「時間帯にしてもそうですよ！ 夜や深夜のように人気が無い時間帯にコッソリ近づいたりするなら怪しいと言わざる得ないですが、人の多い昼間に歩いているのですから不自然な事ではありません！」

「いや……し、しかしですね、手紙を1日に120通以上も送るのは常軌を逸してますっ！ これは明らかにストーカー行為かそれに準ずる行為と読んでも差し支え無いです！」

なおも食いだがるシャルデアは聞いていた以上に厄介なコミカドの弁論に思わず冷や汗をかいてしまう。誰が見ても被告に勝ち目は無い裁判だというのに圧倒的有利に振舞うのだから当然だろう。

「ほう、1日に120通以上もの手紙を送るとストーカーなのですかあ？ そんな事を誰が決めたのです？」

「だ、誰がって……そんな事は……で、ですが不自然です、い、一日に何度も手紙なんて……」

言葉に詰まってしまうシャルデアを見るコミカドは反論する暇を

与えずに一気に畳み掛ける。

「確かシャルデアさんは油絵が得意で一日に何度も絵を描いては周囲の友人に見せているのですよねえ？　周囲の友人達がその姿を見て、貴方はしつこくて粘着質なストーリーカードと言ったらどうでしょう？　貴方はストーリーカードになってしまいますねえ」

「て、手紙と油絵は別物ですっ！　油絵は芸術ですから問題は無いでしょうし、手紙を何十通も送る等という気持ち悪い行為とは違いますわっ！」

「油絵は紙に絵を表現するものですが、手紙は紙に文字による表現をする為の物なのですよ。　同じように自分の書きたい事を表現する以上、同じ芸術なのですよ。　アレックスさんは手紙という形で芸術を表現しているだけなのです！」

ざわざわ――

コミカドの凄まじい弁論に神々と傍聴席の人々は舌を巻いてしまった。

圧倒的に不利な裁判を受けているというのに物怖じするどころか逆にエリートエルフのシャルデアを追い詰めているのだから当然だろう。リヴェリアの主神であるロキでさえ感心しているのだ。

「このオラリオには私の故郷と同じように表現の自由というものが認められています！　それをストーリーカード扱いする事は憲法に反する行為であり表現の自由を侵害する事になりますっ！」

「で、ですがっ、仮にそうだとしても女性に裸を見せる事に関しては変態以外の何者でもありません！　精神的苦痛に対して慰謝料を払うべきですっ！」

「誰もが他人を気にせずありのままの自分でいられる場所、それこそが自宅なのです！　家の中で何をしようが個人の自由ではありませんせんか！」

これには流石のマズミとアレックス、そしてアポフィス・ファミリアの団員達も驚いているようであった。エルフの里で王女に対して全裸を見せるような事をやれば不敬罪として投獄されるかも知れないのだ。

「しかしカーテンくらい閉めるべきでしょうっ！ 人目を気にしないで良いといっても限度が有ります」

「日の光が気持ち良いから日光浴をしたくなっただけですよ。ねえ、アレックスさん？」

意味ありげな視線を送られるアレックスは瞬時にその意図を理解する。

「は、はい、日光浴が大好きなんですよ私は……不幸な偶然が重なるものですねえ」

「嘘つけえっ！ んなわけあるかあっ！」

「原告代理人は静粛に！」

思わず叫んでしまったシャルデアだが、他の弁護士でも同じような反応をしただろう。

「ははははははっ、シャルデアさんも落ち着いてください。情緒不安定なのでしょうか？ 全く、世の中には変人や奇人というのが居ますからねえ、困ったものですよ」

「『「お前等のことなんだよっ！」「』」

「皆さん静粛に」

思わず傍聴席やシャルデアが激しく突っ込みを入れるのだが、全くもってどうでも良いといった様子で話を続けていくコミカドに呆れるマユズミ。

「シャルデアさんは先程、手紙を送るのが気持ち悪いと仰っていましたがそれは貴方個人の主観に過ぎないものであり自分が気に入らないから他の人も行動も気に入らないというのは只のエゴであり独り善がりなのです！」

「ぐっ、ううううっ……し、しかし内容が破廉恥ですわっ！ 異性に対する恋文というのはもつと遠回しに上品な書き方をする物ですっ！ 私は被告のような下品な手紙を書いた事など一度も有りません」

「ほほう、それはそれは素晴らしい事ですわねえ。さすがに貞淑なエルフの女性は言う事が違いますなあ。マユズミ君、アレを持ってきなさい」

「……………はい」

物凄く嫌そうにしながら何枚かの手紙が入った木箱を持っていくマユズミはその手紙をコミカドに渡す。

「そ、その手紙は一体……………」

「これはですねえ、シャルデアさんが学区に在籍していた頃に恩師に宛てた手紙ですよ。貴方の恩師に頼み込んで拝借させて頂きました」

「なああああっ!!」

ざわざわ――

コミカドのニヤケた表情と焦りに焦るシャルデアの表情を見た周囲は何事かと騒ぎ始める。

「裁判長！ 原告代理人の主張に矛盾が見受けられるのでこの手紙を読ませて頂きたいのですが？」

「許可します」

「いやあああああああつ、駄目ですっ！ 絶対に駄目ですうっ！ 裁判長っ、撤回を求めますっ！」

「却下します」

シャルデアのその慌て方を見た神々は面白いものを見るかのようにニヤニヤと笑っておりロキに至ってはポップコーンとオレンジジュースを貪っているのだ。

「では被告代理人から恩師に宛てた手紙を読みたいと思います」

「貴様ああああああああつ、その手を離せえええつ！ 読んだら只では済まさんっ！」

「原告代理人を押さえないさい」

コミカドに掴みかかろうとするシャルデアをギルドの雇った冒険者達を取り押さえる。いざという時の為にLV4以上の冒険者を10名以上雇っているのである。

「それでは失礼します」

『愛深き故にこの手紙を送らせて頂きたく存じ上げます。 ああ、エルヴィス先生、何故貴方はこんなにも私の心を乱すのでしょうか？』

貴方を思うだけで私の胸は雷に撃たれたかの如く痺れて授業も手につかなくなってしまう。毎日のように貴方を思いベッドの上で一人悶々と過ごす日々はこの乙女の身には辛いものでございます。貴方を思うだけで私の身体は熱く疼いてしまい食事も喉を通らなくなってしまう。今日もまた貴方に抱き締められる夢を見てしまいました、正夢になると嬉しいです。貴方の優しい笑顔を思い浮かべるだけで私の中に眠る女の部分がキュンキュン疼いてしまうのでいてもたってもいられません。ああ、愛しのエルヴィス先生、奥様と別れて今すぐに私の元へ来て下さい。愛の狩人にして恋の僕、シャルデア・エルロンより』

——シーンッ！——

その余りに凄まじい蕩けるような内容に裁判所が凍ってしまった。シャルデアを押さえていた冒険者達でさえあんぐりと口を開けているのだから仕方がないだろう。

そんな中、コミカドは遠慮せず話を続けていく。

「いやあ、流石は貞淑で慎ましいシャルデアさん。破廉恥な手紙を一度も書いた事が無いというだけの事がありますねえ。ははははっ、既婚者の男性を誘惑してしまうとは流石は愛の狩人にして恋の僕ですねえ？」

ぎやはははははははっ！——

傍聴席の神々や冒険者などが一斉に腹を抱えて爆笑するその様子はオラリオの裁判でも歴史に残る光景といっても過言ではないだろう。裁判官でさえ顔を背けて笑いを堪えているのだ。

「きい、さあ、まあ、こ、殺すっ！ 今すぐに息の根を止めてやるうううっ！ うらああああああっ！」

「原告代理人は静粛にっ！ 押さえつけていなさい！」

貞淑を美德とするエルフにとって既婚者を誘惑する女など恥以外の何者でもないのか、顔を真っ赤にしながら殺気を放つシャルデアは滑稽であった。

「原告代理人は下品な手紙など一切書いた事が無いそうですし、この手紙が破廉恥でないならば当然ながらアレックスさんの手紙も下品ではないという事になりますね。原告のリヴェリア・リヨス・アルヴさんはこの件に関してどう思われますかな？」

「鬱陶しい手紙さえ送らないでくれれば私はどうでも良い。元々周りの者達が私への不敬だの何だのと騒ぎ始めただけだからな。エルフというのは王族に関して神経質になり過ぎるのだ」

「それはそれは賢いご判断でしょう。しかし、アレックスさんは変態扱いされ名誉を傷つけられたのです。訴えを起こしたエルフの方々にはそれなりの慰謝料を払っていただかないとアレックスさんの心の傷が癒えません」

「……っ！……」

まさかの慰謝料請求に誰もが驚いてしまう。

それはそうだろう。どう見ても訴えられる側の被告が逆に慰謝料を要求しているのだから。

「皆さん、今までの話でも理解できたようにアレックスさんをストーリーカードと決定する確たる根拠や証拠はどこにも存在しないのです。その代わり原告代理人が主張するのはどれもこれも自分勝手な独り善がりであり逆に自分の下品な手紙を読まれて暴れる始末です。よって、どちらの主張が正しいのかは明白ですっ！」

「ケンスケ・コミカドおっ、お前だけはっ、お前だけは許さぁん！」
悪霊のような姿でコミカドを睨みつけるシャルデアの姿は子供には見せられない恐ろしさであり、森の妖精と呼ばれているエルフ達の理想像が壊れてしまうだろう。

「ははははははっ、リヴェリアさんも以前仰っていたじゃないですか！ 最近の若い者は打たれ弱くて簡単に諦めてしまっし、好きな女の為に己の壁を越えようとする男がいないのだと」

「……………」

「アレックスさんは何度断わられても諦めず数ヶ月にも及ぶ猛アタックと1日120通もの手紙で愛を示したのですっ！ 少し前に壁だってキツチリ乗り越えて貴方に会いに行っただじゃないですか」

「限度があるだろうっ！ それに、壁は壁でも私の部屋の壁をブチ抜いて侵入するのは訳が違うっ！」

つい声を荒げてしまいがマユズミのほうはゲツソリした様子で呆れている。

「さて、ここまでの話でどちらの主張が正しいのかハッキリいたしました！ そろそろ判決を聞かせて頂いてもよろしいでしょうか裁判長っ！」

「主文——原告側の請求を全て棄却とし、被告に対する慰謝料800万ヴァリスを支払うものとする」

「こんな無茶苦茶な裁判が許されるかあああつ！ 私は絶対に認めないっ、やり直しを要求しますっ！」

「あはははははっ、この私に勝てると思ったか愚か者があああつ！ 一度ダンジョンに出向いて斧を持ったミノタウロスに頭をカチ割られて来ると良い少しはマシになるだろう！ 死後の世界でだがねええええっ！」

「クツソオオオオオオツ！ 私の純情を踏みにじりおつてええっ！」

呆れるマユズミは思わずコミカドの顔を見るのだが、それはそれは良い笑顔で狂喜しているのであった。



「で、結局コミカド様は勝ってしまったのですか……………」

「信じられないでしょ……………これから夕飯だけどりりちゃんも何か食べる？」

「……………いえ」

裁判が終わり事務所に向かい始めた2人を待っていたのは呆れた表情のリリルカであった。

流石に今回ばかりは勝てないと悟ったりリリルカだが、逆に慰謝料を獲得して原告代理人の心にトラウマを刻んだという話を聞き心底驚いていたのだった。

「あはははっはっはっ、リリルカ君も良い案件を持ってきたくれた。ここに500万ヴァリス有るから貰っておきなさい。」

そう言いながら札束の詰まった封筒を取り出すコミカドに驚くりリルカだったが、何とか気を取り直す。

「こ、こんなに貰って良いのですか？ リリは役立たずのサポーターなのですよ？」

「やくたたずう？ 役立たずというのは日々ダンジョンに潜り汗水垂らしながらケチ臭い商売をしているアホ共の事を指す言葉なのだよ。命の叩き売りをしてる馬鹿な冒険者達から搾取するには君のような人脈や知識を持ち機転の利く人間が必要なのだよ。ハッキリ言うが私からすれば第一級冒険者より君の方が価値が有るのさ」

「こ、コミカド様……………」

自分の能力を正当に評価された事に思わず感動してしまうリリルカは改めてソーマ・ファミアアの脱退を決意するのである。

「おっぱいは小さくて女の色気は皆無だが、それを上回る世渡り上手な女じゃないか。成長してもおっぱいは期待できんだろうが、リヴェリアみたいにストーキングされる事は一生無いから安心だねえ！」

「……………。」

ジト目でコミカドを見るリリルカはやはり他のファミリアを探そうと決意する。

そんな折、一人の女性がコミカドに近づいてくる。

「やあ、ケンスケ先程ぶりだな」

「リヴェリアさんじゃないですかっ！ コミカド先生に何か御用ですか？」

「んー、リヴェリアではないか。一体どうしたんだ君が私の下へ来るといふ事は何か依頼かね？」

マズミは突然のことに驚いているようだが、コミカドはどうでも良さそうに平静を保っている。

「ああ、いや別に大した用事では無いのだがな……久々に、その、食事でもどうだろうか？」

「しよくじい？ 一体どういう風の吹き回しなんだ？」

その様子に空気を察したマズミとリリルカは示し合わせたように言葉を発する。

「コミカド先生っ、私これからリリちゃんと用事が有るのでお先に失礼しますね！」

「そうなんですっ！ ではではコミカド様もお元気で！」

そう言うど颯爽と街中へ消えてしまうマズミとリリルカ。

「ふふっ、あの2人は残念ながら忙しいようだな」

「食事か、どうせ時間も余っている事だし「ケンスケじゃないかあ」って、イシユタルちゅわあん！」

ふと、背後に美の女神イシユタルが現れ驚くコミカドだったが、イシユタルは舌なめずりしてコミカドを見つめながら言う。

「裁判でまた勝ったそうじゃないかあ。ウチのファミリアの顧問弁護士ならないかあい？ 私の身体も団員の身体も好きにさせてやるぞ？ 悪くないだろう？」

「なあにいいいっ、それは本当かっ！ やはりモテる男は辛いものだねえ。私のフサフサの胸毛から溢れ出るフェロモンとダンディーな男の魅力は抑えようとしても押さえられんからねええっ！ あっはははは、困っちゃうなああ、改宗してハーレム作っちゃうのも悪く

ないかもなああつ！」

「……………」

有頂天になるコミカドとは対照的に冷たい視線を送るリヴェリア。その視線はイシュタルとコミカドの両方に送られており、こめかみがピクピク痙攣しているのだ。

「ほう、それじゃあ今夜は私とお楽しみといこうかあ」

「だーいさんせーい！ 私の男気溢れる肉体をたあっぷり味わわせ「ガアアアツ！」

ふと、ヤル気満々のコミカドがリヴェリアの杖で後頭部を殴られ気絶してしまった。

「ふう、特注の杖にしておいて正解だったな。Lv9でも不意打ちならば気絶させられるとは。さて、女神イシュタルよ、この馬鹿は私が事務所まで送り届けるので今日は諦めて帰ると良い」

「ヒイツー！」

Lv6であるリヴェリアが全力で殺気に向けてくるせいかわらず後ずさりしてしまうイシュタル。高位冒険者であり同性のリヴェリアには他の者達と違って魅了の力が効き難いのである。

アルカナム神の力を使用できない神々は冒険者に勝てない為、現在のイシュタルに打つ手は無い。

そうそうと街中へ消えていくイシュタルを見送るリヴェリアは世紀末覇者のような目をしながら呟く。

「さて、今日は私の料理でも作ってやるとしようか。栄養バランスを考えておかんと」

どこぞのシュナイダーとは別な意味で恐ろしい女の姿がそこに在った。

最低男の離婚裁判！

「では、マチコの言うそのアミッドという少女を今度連れてきなさい」
「はい、流石はミアハ様です！ コミカド先生とは大違いですねえ」
「やかましいっ、クソ蟹股女があ！ どうせなら子供ではなく色気ムンムンの美女を誘うべきだあ！」

ミアハ・ファミリアの隣にそびえ立つコミカド法律事務所では現在、ミアハと法律コンビの3人でファミリアの今後の運営方針について話し合いが行われていた。ちなみにナアーザは店番である。

「ミアハさまあ、どうせならイシユタル・ファミリアの美女達を勧誘しましょうよ！ この色気もヘツタクレも無いクソ蟹股迷惑女では私の心が癒えません！」

「はっはっは、マチコは美人で頭も良いし優しい女の子だ。 そんな事を言うものではないよ。 我がファミリアの経営にも大きく貢献してくれているじゃないか」

そう言いながら整った容姿を微笑ませキラリと歯を見せるミアハに赤くなってしまうマユズミ。

「そ、そんな、び、美人だなんて……もう、ミアハ様ったら、お世辞ばかり！」

「全くですよ！ このアンポンタンが美人ならばヒギガエル娼婦のフリユネ・ジャミールだって美女になってしまいますよミアハ様あ！」
「失礼なっ！ 私はこれでも男性から人気なんですよ！ この間だつて……………」

そんなマユズミの様子など心底どうでも良いコミカドはお気に入りのソーマを飲みながら主神であるミアハの方を見つめて口を開く。
「ミアハ様、この私が居ればファミリアの財政は安心ですし何より金貸しの利息だけでも相当なものですよ。 色気の有る美女を数名入団させても問題は無いハズです！」

「マチコとケンスケが異世界よりやって来てから我がファミリアはオラリオでトップクラスの富豪ファミリアになったのは助かってるさ。だが、入団するには面接もしなければならんし人格面も考慮せねば

いかん」

現在、ミアハ・ファミリアにおける入団希望者はかなり多く面接を希望する者が毎日のようにやって来るのだがネームバリューや派閥のステータスしか見ていない者達ばかりであり入団するには至っていないのだ。

その昔、ナアーザが大怪我をして義手を購入した時だどが良い例である。

多くの団員達は義手の購入により多額の借金を抱えたミアハを見捨てアツサリ他のファミリアに移ったのだ。当然ながらナアーザとしてはそんな連中が再び入団する事を良しとせず入団希望者が増えないのだった。

「ミアハ様のご友神であるロリ巨乳の女神様にご紹介するのは如何ですかあ？ 私も面白そうな案件を探している最中ですのでねえ。」

今度はどこのファミリアから筆取り取ってやりましょうかねえ」

「先生、あそこの主神はベル君に近づく女を警戒してますから厳しいですよ」

「ん？ ああ、最近入団した兎みたいな小僧だろう。アツサリ死んじやいそうだけどねえ」

ヘスティアが聞けば激昂しそうな台詞を平然と言うコミカドにマユズミは思わず溜め息を吐いてしまう。

「はははっ、ケンスケにはリヴェリアが居るじゃないか。どの程度まで進んだのだ？ 主神として相談に乗っても構わないから困ったら言いなさい」

「ミアハさまあ、どうしてそこであの魔法熟女が出てくるんです！ 私とあの魔法熟女は決して男女の仲ではありませんし周囲のエルフ共が鬱陶しいので恐らく一生独身のままでしょうねえ」

「先生つてば、そんな事言つてると孤独死してしまいますよ。エルフの里開発計画の時はお二人とも手を取り合って活動した仲じゃないですか」

「マあユウズうミいーくうん、裁判なんてのは所詮勝つか負けるかのギャンブルなのだよ！ 里の開発計画なんて裁判が終われば私には

どうでも良いのだよ。君は相変わらずの朝ドラだなあ」

本気でどうでも良いと思っているコミカドに流石のミアハも呆れてしまうのだが、やはり神として子供達の色恋沙汰には興味があるのか出会いの場をセツティングしよう等と不穏な事を考えるミアハだった。

ふと、事務所のドアから誰かの気配がする。

コンコン――

「コミカドさまあ、マユズミさまあ、リリですけど失礼します！」
そんな3名がやり取りする最中、事務所のドアがノックされ小人族バルウムの少女リリルカ・アーデが入って来るのであった。

「ほう、君はケンスケとマチコが言っていた子かな？ 噂の忍びの者という奴か」

「もしやミアハ様でございますか？ 私リリルカ・アーデと申します。
以後お見知りおきを」

「4日ぶりだねリリちゃん！ 相変わらず可愛いわあ！ ちょうどジャガ丸くんが有るから手をキレイキレイしてお口をアーンしましょうねえ♪」

「リリはもう15歳ですっ！ 赤ちゃんじゃありません！」

相変わらずの馬鹿っぷりを発揮するマユズミに呆れるリリルカだったが、華麗にスルーしながらコミカドに向けて請け負った案件について話し始める。

「コミカド様！ 今回の依頼も中々の報酬ですよ！ あのロキ・ファミリアの団員が訴えられたんですよ、デイオニユロス・ファミリアの団員にですっ！」

「ほう、ロキ・ファミリアがねえ。 何度か裁判しているのでチヨロそうだねえ」

金持ちファミリアが相手と知り俄然やる気が出るコミカドは興味津々にリリルカの方を見る。

「ええと、デイオニユロス・ファミリアの団員アルフォンス・マツキーニさんはご存知ですか？」

「LV4の冒険者であり【絶対零度】アフソリユート・ゼロの二つ名を持つ男だったな。

確かロキのファミリアにいるアリス・ガードナーとかいう女冒険者と合体したそうだねえ」

「結婚したんですよっ！　合体という変な表現は止めてください！」

思わず突っ込んでしまいうりルカだが、コミカドに付き合っているのは疲れるだけなので無視して話を続ける。

「それですね……あ、アルフォンスさんがアリスさんとの離婚を望んでいるそうなので離婚裁判をして欲しいそうなんです」

「断わる！　離婚裁判など汚物だあ！　私の能力は痴話喧嘩の仲裁の為にあるものではないのだよ貧乳魔法少女のりりカルちゃん！」

「りりルカですっ！　それに貧乳じゃありません！　りりは小人族バルウムの中でも同年代と比べて大きいほうなんですっ……って、何を言わせるつもりですかあ！」

慎ましい胸板を撫でながら真っ赤になって反論するりりルカなのだが、コミカドはそのペツタンコな胸を見て憐れんでしまうのだった。

「ラチが明かないですう！　この案件はコミカド様に向いている面白い裁判ですよ？」

「ほお、りりちゃんがそこまで言うなら聞こうじゃないか」

「おしどり夫婦として有名だった二人はお互いの派閥の架け橋として両派閥から大切な存在だったのですが、何とつ、アリス様のほうはフェイス・チェンジの魔道具で顔を整形していたそうなのです！」

「なあるほどねえ、整形していたのかあ！　それはそれは………実に馬鹿な話だ」

この手の話は日本に居た頃から何度か経験しているのでコミカドにとっては正直どうでも良い話である。この世界の文明では整形手術など考えられないので珍しいかも知れないがコミカドにとっては腐る程ありふれた話なのだ。

「ではお受けしないのですか？」

「当然だっ！　アホらしくて相手にできんわ！」

効く耳持たずのコミカドはアッサリ断わってしまうのだが、ミアハとマユズミが揃って口を開く。

「ケンスケ、やって上げなさい。君の実力ならば和解させられるハズだ」

「そうですよ先生、整形くらいで離婚なんて馬鹿げてます！ 私達で解決しましょう」

「あ、あのお、実はアルフォンスさんを連れてきたのですが……事務所の前で待つてまして……」

話に夢中になっている2人を尻目にリリルカがおどおどと告げる。

「リリちゃん、悪いけど呼んできてくれるかしら？ 私とコミカド先生で何とかするから」

「うむ、私も聞かせて貰おうかな。ケンスケとマチコの弁護が気になるのでな……」

「は、はい、では少々お待ちください………」



「先生っ！ ぜひこの離婚裁判を引き受けて貰いたいです。リリルカさんから聞いての通りですが、アリスと夫婦生活を続けるのはもう無理です」

「あははははっ、確かにあの美しいアリスさんが整形していた等というのは驚きですねえ！ それにしてもこの似顔絵を見る限り元の顔が酷過ぎる。掴まされましたねえ？」

現在。事務所の広間にてコミカド、マユズミ。ミアハの3名はアルフォンスの話を聞いていた。リリルカは紹介が終わりホームに戻ってしまっただが……。

「コミカド先生の言う通り、ううう、折角冒険者として名を上げてそれ

なりの男になれたと思ったら……ぐす、妻にこんな裏切りを受けるとは……ううう、何て、何て悲劇だあ、神も仏もあつたもんじやないっ！」

「失礼ですがアルフォンスさん！ 貴方も人の事を悪く言える顔ではありませんよ！ 奥さんが可哀想だと思わないんですか？ 私からすれば貴方の態度こそが立派な裏切りですよっ！」

マユズミはアルフォンスを呆れたような目で見ながら妻のアリス・ガードナーを擁護する。マユズミの言うようにアルフォンスとて決して容姿が優れている訳ではなく中の下が関の山だろう。

「例えば他にも離婚事由が有るなら分かりますけど。奥さんの浮気は？」

「してないです」

「妻としての役目は？」

「全く問題無いです」

ぬけぬけと臆する事無く告げるアルフォンスを前に流石のマユズミとミアハも呆れてしまう。

「やっぱり整形ぐらいで離婚なんて馬鹿げてますよ。両ファミリアの皆さんだって貴方達の関係が良好である事を望んでいます。皆の期待を裏切ってしまう事になるんですよ？」

「顔を偽っていたんだぞ？ これ程の裏切りが有るかっ！」

「駄目だこの人……早く何とかしないと……」

殺人ノートを拾ったキラキラネーム高校生のような台詞を吐くマユズミは本格的に頭を抱え始めるのだが、アルフォンスの口から予想外の言葉が出てくる。

「離婚請求をしているんですが……じ、実は……向こうに、わ、私の浮気バレそうなんですよ……」

「死ねええええええええええええつ！」

マユズミが思わず絶叫してしまう。

「お、落ち着くのだマチコ！ ケンスケも止めてくれっ！」

「ほっときなさい、結婚なんてのは長期売春契約ですよミアハさまあ。

それにしてもチェスの駒は水晶に限る」

冷静にアルフォンスを見つめるコミカドはルールも知らないのに購入したチェス盤の駒を持ちながら満足そうに眺めている。リリルカがさつさと帰った理由が良く分かる案件であった。

「はあ、はあ、先生っ！ お引取り願いましうっ！ 馬鹿馬鹿しいので無視するのが一番ですっ！」

「ふむ、確かに私の引き受ける案件ではない。 生憎ですが『2億ヴァリス払いますっ！』引き受けましようっ！」

「……………」

もはや安定のコミカドぶりに絶句してしまうミアハとマユズミはあんぐりと口を開けて呆氣に取られる。

「先生っ、こんな裁判勝てっこないですし勝って良い訳がないですっ！ アルフォンスさんに責任が有るんですから弁護する必要は無いです」

「何を言うかマユズミいゝ、アルフォンスさんの心の痛みが分からないのか？ 依頼人の利益が最優先なのだよ幼稚園児の蟹股女があ」

「ああもう、どうして男ってのは浮気ばかりっ！ 奥さんが可哀想ですよっ！ コミカド先生だって浮気によつてケイコさんとは破局したじゃないですか？」

「あれは相手に問題が有ったんだあ！ 私に非難される点など一切ないのだよ！」

真っ向から自分の不貞行為を正当化するのは流石コミカドというべきだろう。ミアハの方はコミカドが結婚していた事に驚いているようだが。

「あのお、そろそろ良いですか？ 私は卑劣な裏切り行為をした妻が

許せないんですよ！　ぜひ勝ってください」

「どの口が言うんですかあつ！」

思わず突っ込んでしまうマユズミは悪くないだろう。

「それで先生、勝てるのでしょうか？」

「まずは浮気相手の女を教えてください。裁判で証言しないように説得しないといけませんからねえ」

コミカドにしてはマトモな意見であり離婚裁判では当然のことなのだが、アルフォンスの口から出たのはまたもや予想外の話であった。

「アポロン・ファミリアのレイナさん、ヘファイストス・ファミリアのアメリアさん、学区で教師をしているマリアンヌさん、バーの店員をしているアーシャさんとメリッサさん、定食屋のキャメロンさん……あとは、20人くらい居るのですが記憶が曖昧で………」

「奥さんに土下座して謝罪する立場じゃないですかあ！」

思わずマユズミが叫んでしまうがコミカドは何時ものように葉巻を吸って落ち着いている。

「丸腰で隻眼の黒竜に立ち向かう一般人の気分ですよ。マユズミ君、発明した道具で証拠の捏造でもして勝訴できないかね？」

「ここまで愚かだと捏造でどうにか出来る問題じゃないと思いますよ。ミアハ様みたいな誠実な男性と人格が融合すれば少しはマシになるかも知れませんね」

「あつはははははは、それは面白いねえ。そんな面白そうな魔道具が作れば大儲けできるなあ！」

馬鹿笑いするコミカドにマユズミは突拍子もない台詞を告げる。

「以前作ったんですよ。お互いに右耳と左耳にピアスを装着して合体できるアイテムを………」

「どこのポタラだあああつ！　貴様は宇宙最強の魔人とも戦うつもりかあ！」

今度はコミカドのほうがか叫んでしまうが、ミアハには何の事かサツパリ分らないようである。

「隻眼の黒竜のような凶悪なモンスターが現れた時に使用できれば多

くの命を救えるじゃないですかっ！ いざという時はオラリオで最強のコミカド先生と猛者オツタルで合体を……」

「あんなガチムチの気色悪いオツサンと合体なんぞ反吐が出るわああ！」

思わず猪耳いのししみみを生やした横分けの究極戦士を想像してしまうコミカドだったが二度と2人に戻れなくなるなどと想像もしたくないようである。

「あのお、そろそろ本題に戻って良いですか？ もし離婚ならば慰謝料1億ヴァリス払えと要求されてるんですよコミカド先生っ！」

「これは失礼。愛する夫を裏切っておきながら逆に慰謝料まで請求する恥知らずの整形詐欺女をギタギタのズツタンズツタンにしてやりましょうっ！」

「…………アストレア様に心を浄化して貰うべきだわ…………」

「うむ、マチコの気持ちが良い分かる……………」

整形用の魔道具などという厄介極まりない道具を誰が作ったのだと忌々しく思うマユズミは馬鹿笑いするアルフォンスとコミカドを見る。

「あっはははははは、私にかかればデコピン一発でハイ終了ですよお！」

「いやあゝ、一時はどうなるかと思いましたが卑劣な悪女に正義の鉄槌が下されると知り安心しましたよ！」

「……………」

汚い物を見るような目で2人を見つめるミアハとマユズミはもはや呆れてしまい言葉が出ないのであった。



裁判当日――

ギルド内にある裁判所には様々なファミリアの団員や神々が列を作って並んでいた。

コミカドの裁判目当てでギルドが裁判所を改築して大きくなったので今までより余裕が有るのである。

「ではコミカド先生つ、お願いします！　浮気の証拠は完全に隠蔽したので安心ですが裁判に勝たなければ水の泡になってしまいます！」
「まあかあせなさあい、ロキ・ファミリアからは何度も甘い汁を吸っているので今回も楽勝ですよ！」

自信満々にそう言うコミカドを少し不安そうに見つめるアルフォンスだったが、ロキ・ファミリアやフレイヤ・ファミリア、ガネーシャ・ファミリアといった最大派閥まで見物に来ているのだから当然だろう。

「では皆さん席に着いて」

そうこうしている内に裁判長の合図が下され原告席と被告席、傍聴席にいる者達が着席する。

「それでは本件に関する裁判を開廷いたします！　まずは原告側から！」

「はいつ、では原告ことアルフォンスさんに代わって本件代理人を務めます私と相方のマズミから始めさせて貰いましょう！」

「また貴方達ですか……………」

連戦連勝を繰り返し遂にはオラリオ最強の座を手に入れたコミカドは裁判所へ顔を出す機会が多く、もはや冒険者としての活動など全くしていないのだ。何度もコミカドの裁判を担当する裁判官はうんざりしているのである。

「では始めます。早速ですが皆さん、被告ことアリス・ガードナーさんの顔をご覧ください！　実に美しい容姿でありロキ・ファミリアの名に恥じない凄腕の冒険者だそうです。原告のアルフォンスさんにとって自慢の奥さんだった事でしようっ！」

コミカドの説明により裁判官、傍聴席の人々が一斉にアリスの方を

向いて様子を見つめる。男達の多くはその整った容姿に目を奪われているようだった。

「ですが！　な、なな、なあと、彼女はフェイス・チェンジ専用の魔道具にて己の容姿を偽っていたのでありますっ！　本当の彼女の顔はこちら！　ジャジャン！」

そういうと、コミカドがアリス・ガードナーの整形前の顔を知っている者に頼み込んで描いて貰った似顔絵を提示しながら多くの者達に見せびらかす。その似顔絵の顔はお世辞にも美女とは言えず不細工そのものであった。

「ハッキリと断言いたしました！　彼女の本来の容姿は、ものの見事にブサイクだったのです！」

「異議あり！　不適切な……」

「表現だと言うならば言い換えましょう。容姿が醜い女性でした！」

「異議あり！」

「顔面がブサイク！」

「もう死ねよ！」

思わずコミカドに対して暴言を吐いてしまうシャルデア・エルロ
ン。以前の雪辱を果たす為なのかコミカドを睨みつけており参考人
には【千の淫乱妖精】ことレフイーヤ・ウイリデイスが殺気を放ちな
がら座っているのだ。

「皆さん、言葉尻を誤魔化して綺麗事を並べ立てるのは止めましょう。
アリスさんの顔がブサイクである事くらい本当は理解しているの
でしょう？」

「誰がブサイクですかあっ！　さっきから黙って聞いてればふざけた
事ばかりいい！　横分けの守銭奴弁護士が何を馬鹿げた事をつ！」

「双方共落ち着いて！」

裁判長が声をかけ2人を宥める。

遠慮の無いコミカドの言葉に対して、ついにアリス・ガードナーの
怒りが爆発したようである。アリスの主神であるロキやガネーシャ
のような神格者以外の神は笑いを堪えているのだったが。

「話を続けますがアルフォンスさんは冒険者になって以来、美人との結婚を夢見て一生懸命に修羅場を潜って名を上げてきたのです！」

ですが、被告は婚姻前に自分が顔を偽っている事をアルフォンスさんに告げずに今日に至るのであります。幼少期よりブサイク故に辛い思いをしてきたアルフォンスさんには耐え難い苦痛だったでしょうねえ！」

「うぐぐぐぐぐぐぐぐぐ……」

コミカドに言われ放題のアリスは殺気を放ちながら阿修羅のような顔で睨みつけている。

「被告はアルフォンスさんの長年の夢と努力を踏みにしたのです。」

これらの理由によりアルフォンスさんの精神的苦痛に対する慰謝料500万ヴァリスを請求致します」

「ぐ、ぐううう……言わせておけば……」

アリスの顔が凄まじい事になっているが傍聴席の女性陣も同じような反応をしており、女性を容姿で判断する男への不快感が拭えないのだろう。

「では次に被告代理人！」

「はいっ！」

シャルデアが立ち上がるとコミカドを睨みつけながらアリスの弁護を始める。

「では言わせて頂きますが結論から言ってしまうえば原告側の主張は断固拒否いたしますっ！確かにアルフォンスさんが結婚前からブサイク故に苦勞してきた事や美形の子供を得る為に努力してきた事はアリスさんも知っていましたし、それを承知で整形していた事実を伝えませんでした」

「……っ！」「……」

原告側の主張に対し、まさかの肯定に周囲が驚くのだがシャルデアは気にせず話を続ける。

「ですが、容姿を偽っていた程度で一体何が問題なのでしょうか？美形の子供じゃなくても良いではありませんか！人の価値は外見ではなく心で決まるのです。寧ろ生まれてきた子供に内面を磨く

ように正しく導けるチャンスだと考えて今までの仲の良い夫婦に戻ろうではありませんかっ！ 貴方達の3年間に及ぶ結婚生活は容姿を偽っていたというだけで壊れてしまう程の絆だったのでしょうか？ 夫婦とは不完全な者同士が懸命に支えあつて築いていくものなのです」

「「……………」」

諭すようなシャルデアの言葉に男性陣はともかく女性陣は深く頷いて感動している。もともとコミカドの方は予想通りといった様子で余裕の笑みを浮かべているのだが。

「裁判長！ 被告代理人に尋問したいのですが？」

「認めます」

「シャルデアさあん、貴方の身に着けている衣服は最新のブランド品ですが何故そんな服を着ているのでしょうかねえ？ 服なんてボロボロでも良いじゃありませんか？ 髪だって美容院でしっかり整えていますしねえ」

「お、仰る意味が分かりませんわ。 女性として身嗜みに気をつけるのは当然の事ではありませんかっ！」

コミカドの意図が分からず正直に答えてしまうシャルデア。

「人の価値は外見ではなく心なのでしょう？ だとするならば綺麗な衣服や美容に気を使う必要性なんて皆無じゃありませんかっ！」

「なっ、こ、これは……」

思わず言葉を詰まらせてしまうシャルデアだったがコミカドの言う事は自分の矛盾点を的確に指摘しているので反論できない。

「貴方は人の価値は心で決まると言いながらも外見に拘っているじゃありませんか？ 結局のところ、ここにいる皆さんの大多数は他者を外見で判断してブサイクを差別しているのですよ！」

「心外ですわ！」

「そうです！ 私達は差別なんてしてませんっ！」

「そうよっ！ 一緒にしないでよね！」

被告の参考人として来ているティオネとレフィーヤがシャルデア同様に猛抗議するのだが、コミカドはお構い無しに続けていく。

「ほほう、しかし現実にはファミリアの面接でも美人とブサイクでは扱いが違いますよねえ？ 同じ能力ならば大抵の場合は美人が入団できてブサイクが落とされます。いえ、美人のほうが能力的に劣っていたとしてもブサイクが落とされ美人が入団される事が多いのですっ！ アポロン・ファミリアなどは典型的な面食いのファミリアじゃありませんか？」

「そんなファミリアはオラリオから追放されるべき最低のファミリアですわっ！ 大体あそこのファミリアは欲しい美形の冒険者を手にする為ならば犯罪紛いのことさえするファミリアです。アポロン・ファミリアに限らずそんなファミリアは全て最低の人間の集まりです！」

シャルデアの言う通りアポロン・ファミリアの汚い手口は有名であり周囲の者達も思い当たるフシがあるようだ。

「では、そちらの参考人であるティオネさんに質問したいのですがよろしいでしょうか？」

「わ、私っ……………」

思いがけず名前を呼ばれて驚くティオネ。

「許可します」

「ではお尋ねしますが貴方は団長であるディムナ氏を愛しているそうですが、一体どこに惹かれたのでしょうか？ 詳しく教えていただけませんか？」

「それは勿論っ、愛らしい外見でとっても可愛いところよ！ 見た目は子供そのもののなのに仕草が大人っぽくてギャップが凄いのよ！ ご飯を食べる時も戦う時も小さくて可愛い団長がしてるだけで絵になるわぁ！」

うつとりした表情でフィンについて語り始めるティオネは自分の世界に入っており、傍聴席のフィンが頭を抱えている。

「ほう、愛らしい外見が可愛いのですか？ それはそれは、流石のロキ・ファミリア！ 団員の質も他の有象無象のファミリアとは違いますなあ」

「げ、原告代理人は何が仰りたいのですかっ！」

「なあに、ティオネさんは団長であるフィン・ディムナさんの事を外見でしか判断していないと言いたいのですよ」

「——はっ?」

突拍子も無い事を言い出すコミカドに周囲の目が点になった。

「今の説明においてティオネさんはフィン・ディムナ氏の容姿に関してしか触れませんでした! 幼い外見が可愛らしいだの見た目が子供そのもののなのに大人びているだの言いながら内面に関する話は一切出てきませんでしたねえティオネさん。つまり、貴方は男性を外見でしか判断していませんですよ!」

「ご、誤解よつ! 強くて頭が良かったり皆を纏めるのが上手な所だつて素敵だと思つてゐるわつ!」

思わずコミカドに鋭い指摘をされてしまい焦るティオネだが、コミカドはそんなティオネの様子を見逃さない。

「ではティオネさん、もしディムナ氏がガレス・ランドロック氏のように強面の髭面ひげづらだった場合、中身だけを見て彼を愛せますか? 貴方の主神の前で嘘偽り無く愛を誓えますか?」

「あ、いや、そ、それとこれとは話が別よつ! もしもの話なんてしても無意味でしょうがっ!」

「フフフ、確かに無意味でしょうねえ。貴方が愛しているのは可愛らしい容姿をした美少年そのものであるディムナ氏であり中身なんてどうでも良いのですからねえ。仰る通り中身がどうこう言つても無駄ですね」

「うぐつ……………」

コミカドの言葉に思わず言葉を詰まらせてしまうティオネだったが、やはり鋭い正論なのか反論できないのだ。

そんなティオネを無視してコミカドは更に続けていく。

「シャルデアさん、このチラシは何でしょうか?」

「——っ!」

そう言つて驚くシャルデアの目の前に差し出して来たのは一枚の紙切れである。

「それは……我がロキ・ファミリアの団員募集用のチラシですね。」

見れば分かるように団長と副団長の似顔絵やアイズ・ヴァレンシユタイン氏とここに居るレフィーヤ氏も描かれています。それがどうしたのですか？」

「ではお聞きしましょう！ ファミリアの団員募集チラシといえは当然ながら派閥そのもののイメージを印象深く宣伝できるように作らなければいけませんよねえ？ 団長のディムナ氏や副団長のアールヴ氏などはちゃんとチラシに載っているというのに最古参のガレス・ランドロツク氏の似顔絵がどこにも載っていませんっ！」

「え、あ、それは……ですね、ですから……」

「不思議な話ですよええ。 ガレス氏より弱いというのに大した実績の無い若いエルフの女性達が全面的にアップされて描かれています。何故ならば派閥のイメージ戦略において年老いた爺さんを出すより見目麗しい女性陣や美男子を見せつけた方が効果的だからですっ！ 中身が大切ならばガレス氏を載せないのは不自然ですねえ」

「」「」「」

思わずコミカドの言葉に黙ってしまうロキ・ファミリアの団員達。中にはコミカドの意見を聞くまで自分達のファミリアを客観的に分析出来ていなかった事を恥じている者さえ居る。

「更にもう一つ有ります。 マズミいゝ、アレを見せなさい」

「……………はい……………何じやこの裁判は……………」

思わず呆れ果ててしまうマズミだが、作成した魔道カメラを持ちながらコミカドの方へ向かう。

「さあマズミくうん、上映開始だ」

「絶対ロクな死に方しないです……………」

そう言うと魔道カメラから光が溢れとある光景が映し出される。

「こ、これは…………我がファミリアの宴会では……………」

「その通りです。 今からお見せする貴方達の主神ロキの姿をご覧ください」

「なっ、ウチが何したって言うんやっ！ やましい事はしとらんでえ！」

「そうでしょうねえ、貴方は信念を持って派閥を運営しておられます

からねえ。ちなみに傍聴席ではお静かにお願いします」

含み笑いをしながら傍聴席で動揺するロキを見つめるコミカドなのだが、そうこうしている内に映像が流れ始めるのだった。

——ひやつほお、アイズたあん相変わらず可愛いでえ——

——止めて下さい——

——そんな事言わずにほれほれ、肌がスベスベやなあ、デヘヘ——

——テメエ、ロキツ、アイズから離れろっ！——

——うっとおしいぞお前達、静かに飲まんか——

——リヴェリアの言う通りじゃわい。来年はまた新人が入って来るというのに——

——そ、そうですよお、ベートさんも新人から尊敬されるような行動をとってください——

——ババアにジジイにテメエもロキを止めやがれっ！——

——デヘヘッ、来年も可愛い子を優先して入団させるでえ！ 美少女は宝やねん！——

——少しは酒を飲める男も入団せんかいロキっ！——

——そう言うたてなあガレスう、ウチ好みの美少年や美少女を集めたいねん！——

淡々と映像が流される中、多くの者達はこれが一体どうしたのだと不思議そうにしているのだがリヴェリアのような者はコミカドの意図を察したようである。

「皆さん、御覧の通りロキ・ファミリアの主神であるロキは女好きのロクデナシ女神であり派閥の中には見目麗しい女性達の割合が多いのですっ！ 男性陣と女性陣では圧倒的に女性陣のほうが多いくらいにです」

「そ、それがどうしたのですか！」

「分かりますせんかあ？ 主神であるロキは美少年や美少女を優先して採用しているのですよっ！ 我がファミリアの主神ミアハ様とは正反対ですねえ！ 主神が団員の前で堂々と容姿の美しい者を優先して入団すると言っているのです！」

「き、詭弁ですっ！ そんな馬鹿な話が有って溜まりますかっ！」

思わずコミカドの意見に反論しようとするシャルデアだったが、具體的な間違いを指摘できないのである。

「貴方は先ほどアポロン・ファミリアのような派閥に関して、オラリオから追放されるべきであり最低の人間の集まりと仰いましたよねえ？　だとするならロキ・ファミリアは追放されるべき最低のファミリアであり団員も最低な人間ばかりという事になります」

「そんな事はっ……………」

「そんな事は有るんですよシャルデアさんっ！　容姿が重要だと貴方のファミリアに所属する団員達や主神が教えてくれているのですよっ！」

「……………っ……………」

気まずい表情を浮かべるロキ・ファミリアのメンバー達だが周囲の神々は面白そうに彼等の姿を眺めており傍聴席の一般人やギルド職員もコミカドの見事な弁論に舌を巻いているのだった。

「はははははっ、アリスさんもそんな最低のファミリアに居るのは辛いでしょうし改宗をオススメしますよ。　我がミアハ・ファミリアは何時でもフリーですからねえ、さっさと抜け出すべきかも知れませんかよお？」

「わ、私は今のファミリアを離れるつもりは……………」

「貴方の主神は女性を容姿で判断する最低の主神ですからねえ、もし貴方がブサイクなまま入団試験に挑んでいたならロキ・ファミリアに入団できなかったでしょう。　貴方の主神は貴方の容姿を愛しているだけであり、貴方の能力や人格など気にもとめていないのですっ！　はははははっ、捨てられる前に自ら去ったほうが良いですよお」

「うう……………」

「ち、違うんやでアリスたんっ！　ウチはアリスたんをブサイクだの追い出したいなんて思つたらんねん！　シャルデアも何とか言つてやらんかいな！　その横分小僧の策略に乗せられただけやでっ！」

平静を保ちながらも心に深い傷を負ってしまったアリスに必死のフォローをするロキ。ぬけぬけと団員達の前で引き抜きをしようとするコミカドは相当に図太い神経をしていると言えるだろう。

「失礼ですが傍聴席はお静かにお願いします。アリスさあん、貴方の頼りない仲間達などさつきと捨てて慰謝料を払った後は脱退してしまいなさい。なあに、貴方の能力ならば500万ヴアリスなんて簡単に稼げますし私と組めば無敵ですよお？」

「あう……………」

「か、勝手な勧誘や悪質な言動は控えてください原告代理人」

「シャルデアさんの言う通りやでえ！アリスたん、ウチはアリスさんの事も大事に思ってるでえ！そんな横分小僧の作戦に引かなかったらアカンわい！」

「双方共まずは落ち着いて！静粛につ！」

裁判長が思わず止めに入るが、ロキは複雑そうに顔を歪めるアリスを見ながら宴会における浅はかな言動を猛烈に後悔していた。周囲の神々や傍聴人達は面白そうに、そして食い入るように場を見つめている。

「悪くない話だと思いますよアリスさあん？アルフォンスさんは離婚を望んでいますし貴方だって結婚生活が修復できないのは薄々感じているでしょう？そちらの無能な弁護士には円満解決なんて不可能ですよ」

「む、無能で、すって……………い、言わせてお、け、ば……………」

頭に血が上りそうなシャルデアだがコミカドの言う通り自分には何もできないと理解している彼女は怒りで身体を震わせている。

常に知的でクールなシャルデアは女性達から尊敬の的になっておりコミカドに出会うまで一度も挫折を味わった事が無かったのである。彼女のエリートとしての誇りは著しく傷つけられてしまったのだ。

「さあ、アリスさん。決めるのは貴方です。この裁判で勝ち目が無いのは理解なさっているでしょう？」

「……………」

まさに悪魔の囁きというほど見事な言葉を放つコミカドは勝利を確信している。

「あ、アリスさん、私達が何とかしますから一度皆で話し合いましょ

う。誰も貴方を邪魔者扱いなんてしませんしブサイクだなんて思ってませんから。ですから……………」

「アリスさあん、このシャルデア・エルロンという女の言葉を信じてはいけませんよお！ 先ほどの話で分かったと思いますがロキ・ファミリアは人を容姿で判断するファミリアです。自分だけブサイクのまま奇異の目で見られるのはお辛いですよお？」

「貴方は黙っててくださいっ！」

声を荒げてしまうシャルデアだが、そんな事は知らんとばかりにコミカドは話を続ける。

「上から目線の安い同情を受け続けながら腫れ物扱いされてまでロキ・ファミリアに残りたいのですかあ？ 我がミアハ・ファミリアは人を中身で判断する派閥なので能力が有るなら拒みませんよお」

「黙れと言っているだろうがあっ！ 殺すぞ貴様あっ！」

「被告代理人は静粛につ！ 傍聴席の皆さんも冷静につ！」

「応じます……………」

「……………え？」

「慰謝料は…………お、お支払い致します。シャルデアさん、ここまで有難うございました。もう結構です」

「アリスさんっ！ 駄目ですよ、この男は守銭奴であり貴方を上手に言い包めて勝訴する事しか考えていないんですよっ！ 私が貴方を守りますから、ですから……………」

「良いんです、もう十分です。話を聞いている内に向こうの意見が

正論である事は理解してしまいましたし、嘘を吐いていた私に勝ち目なんて無いんですから……」

「何が良いんですかつ！ 貴方ばかりが苦しい思いをした挙句恥を晒して良い訳が無いでしょうっ！ こんな決断は絶対に間違ってるっ！ 貴方だけが不幸になるんだっ、最後まで堂々と戦うべきだっ！」シャルデアの表情は必死そのものであり何とかアリスを思い留まらせようとする。その姿は普段の冷静な彼女からは考えられない光景だった。

「被告代理人は落ち着いたほうがよろしいですよ？ 依頼人がこちらの要求を呑むならば代理人でしかない貴方に拒む権利など有りはしないのですからねえ」

「ふざけるなっ！ 汚らわしい守銭奴があっ！ お前達のようなクズが存在するから彼女のような心優しい女性が傷つかなければなら無いんだっ！」

「双方共静粛にっ！ これ以上続けるならば退廷させますよ！」

「……………うぐうつ……………し、失礼、しました……………」

「では、原告と被告の意見が重なりましたので裁判長、判決をお願いしますー！」

「主文、被告は原告ことアルフォンス・マツキーニに対し慰謝料500万ヴァリスを支払うものとする」

「こんな判決は不当だっ！ 馬鹿げてるっ！」

裁判の判決に怒気を孕ませながら原告席を睨みつけるシャルデア

はこの世の全てを呪うかのような目つきで齒軋りしているのである。
「さあゝてアルフォンスさん、我々の勝利です。　歓楽街の娼婦でも
身請けして見目麗しい方と結婚なさってくださいよお。　あははは
ははははっ」

「いやあ、コミカド先生のお陰で助かりましたよ。　ははははははっ、
一時はどうなるかと思いました」

馬鹿笑いする2人を見つめるマユズミは複雑そうな表情で今度は
アリスを見つめる。

本音ではアリスのような困っている女性を助きたいマユズミとし
ては、すっかり意気消沈している彼女を見るのが辛いのだろう。

「貴様、アルフォンス・マッキーニ……………恥ずかしくないのかっ！」

「私は正当な権利を主張しただけです。　とやかく聞かれるいわれは
有りませんよ」

「その通りですよシャルデアさん。　貴方達だって結局は人を容姿で
判断していたじゃあないですかあ？　何故アルフォンスさんだけが
非難されるのですか？　彼は決して悪人でも犯罪者でもないのです。
皆よりも少し正直なだけなんですよ」

諦めきれないシャルデアに正論で返すコミカドだが、なおもシャル
デアは食い下がる。

「それでも私は容姿より中身を選ぶっ！」

「ご自由にどうぞ。　里で暮らすエルフ達は外で暮らす人々に対し
て、内も外も醜い存在だと軽視しているでしょう？　エルフなんての
はプライドが高く上から目線で他種族を見下す者達ばかりの種族で
しょう？」

「……………そういう者達が多い事は、否定しない……………だが、だが私は
違うっ！」

忌々しそうにコミカドを見つめるシャルデアだが帰って来たのは
意外な言葉だった。

「確かにそうでしょうねえ。　貴方は本当に優しい女性ですし人格者
ですよ。　これから今まで通りにアリスさんの友人でいて上げな
さい」

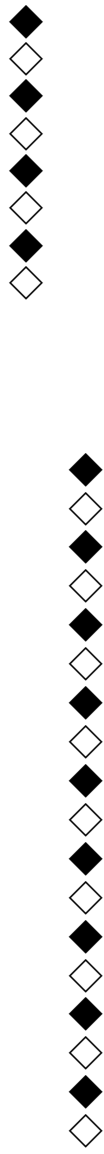
「——っ、何を今更……彼女を追い込んだのは貴方でしょうっ！」
「違うなっ。君が弱くて愚かだから負けたんだ。君は自分のファミリアを神聖視して問題など全く無いとばかりに思いあがっていた。だから容姿にコンプレックスを抱いていた彼女を守れずに傷つけたんだ！」

「……………」

「自分のファミリアが少なからず容姿で人を選ぶのだと客観的に判断できていればアリス・ガードナーをもっと上手に守れたかもしれない。結果として、美男美女の集まりの中で自分だけ奇異の視線に晒される事に耐えられなくなった彼女は争いを止めて逃げたんだよっ！」

「わ、私のせいなのか……私が無能だから……」

「さあねえ、君じゃなくても私が相手じゃ誰も敵わんさ。彼女にはウチのファミリアに来るように誘っておいてくれたまえ。彼女の幸せを思うならばね」



「では、我がファミリアの新しい仲間を祝ってケンスケにマチコ、ナーザも楽しんでくれ」

「それじゃコミカド先生もナーザさんも皆で一緒に乾杯」
「ちよっと待ったあ！ アリス君は良いとして何故このクソ喧しい愛の狩人にして恋の僕が居るんだっ！」

そう言って向かいに座るシャルデアを見ながらコミカドが突っ込みを入れる。

「アリスさんと私は友人ですし今度こそアリスさんがピンチの時は守れるように貴方の下で弁護活動をして学ぶことにしました」

「待て待て、アリス君の透明化魔法は非常に貴重な能力であり素晴らしい人材だが君はマユズミと同じレベルのアンポンタンだろうがぁ！」

「先生、良いじゃないですか。 シャルデアさんとアリスさんの2人が入ってくれて私も嬉しいですし」

「コミカド先生、私からもシャルデアさんを受け入れてくれるようお願いします」

「そうは言われてもねえ……………」

あの後、ロキ・ファミリアを脱退したアリスはコミカドの誘いに応じミアハ・ファミリアに改宗する事になったのである。主神であるロキや仲間達が何度も引き止めたのだがロキ・ファミリアに居辛いアリスにとっては他に選択肢が無かったのだ。

その後、最後の最後まで自分の浅はかな言動がアリスを傷つけた事を悔いていたロキに対し、シャルデアが同じく脱退を希望したのである。ちなみに入団祝いとしてアリスの払う慰謝料500万ヴァリスはコミカドが支払ったのだが、守銭奴であるコミカドの羽振りの良さに周囲が驚いたのは言うまでもない。

「ケンスケ、良いじゃないか。 彼女は賢くて真面目だからね。

きつと戦力になるさ」

「まあミアハ様が言うならば私としても断われませんよ。 にしてもリリちゃんが入団しないのは非常に残念だ」

「それは私も残念でしたねえ。 はあ、毎日抱き締められると思ってたのになぁ……………」

残念そうに落ち込むコミカドとマユズミは小人族バルウムの少女リルカがロリ巨乳の主神が作ったヘステイア・ファミリアに入団したのを先ほど知らされたのだった。

その時のコミカドは普段の彼からは考えられないほど残念そうに肩を落としたのである。割と本気でリルルカを気に入っていたコミカドなのだった。

「なあらあばあ、君の身体を報酬にして貰おうじゃないかあ！ マユズミは色気が無さ過ぎて盛り上がらないしナアーザは子供過ぎて魅力が無いのだよ！」

ナアーザとマユズミが思わず口を揃えて怒気を放つが生真面目なシャルデアは真つ赤になつて悩んでしまう。

「シャルデアさん、本気で悩んじゃ駄目ですからね。只でさえエルフの方々は真面目で気難しいのにかかわらないでください先生！」

「ケンスケは相変わらずだな。マチコの故郷にはケンスケみたいな弁護士が大勢居たのか？」

ハッキリ断言するマユズミはコミカドのような男が何人も居たらストレスで死ぬだろうと真剣に考えてしまう。

「アリスちゃん、何なら君に私の肉体から溢れ出るセクシーなフェロモンを一晩中味わわせてあげようじゃないかあ。私は整形でも一向に構わんよお」

「ケンスケ氏、アリスさんに不埒なマネは許しません」

「ようし、ならば今日はシャルデアちゃんにダンディーな私の肉体を
たあつぷり味わわせてあげようじゃないかあ。　　ははははっ、今まで
自分より頭の悪い男しか居なくて満足出来なかったのだろう。　ど
こぞの魔法熟女みたいにお局様つぼねさまと呼ばれ始めたら終わりだよお？
あっはははははは」

「た、確かに……頭脳において、優れた男は居なかったが……だ、だからといって、け、ケンスケ氏と、そういう事をするのは……」

「シャルデアさん、この男を信用しちや駄目ですって！ 自分より優れた男性を求めるのは女性として理解出来まずけどこの横分小僧は

最低ですからっ！」

流石にコミカドの相棒を続けてきただけの事はあるのかマユズミはペースに流されない。

「ははははっ、自分より優れた男がどうこう言う前に君は結婚相手の心配でもしたまえマユズミいゝ。LV5の君より優れた男となるとオラリオの中でも少ないからねえ、オツタルとかどうだい？」

「……………嫌です」

「ははははははははははっ、オツタルと君なら案外お似合いのカップルかも知れんぞお。野蛮で粗暴な性格なんかまさにピッタリじゃないかあ。猛牛夫婦として休みの日にはミノタウロスでも狩りに行ってこい」

「誰が猛牛夫婦ですかっ！ 私は上品で貞淑で争うことが大嫌いな女性です。結婚相手なんて、うゝんそうですねえ、ディオニユソス様みたいな紳士的な男性とか良いかも♪」

「……………。」

「え？ 皆どうしたの？」

どう考えても似合わないカップルだと無言で訴えかけてくる全員の視線に意味が分からないマユズミ。

「マチコ、割とオツタルと君はお似合いのカップルかも知れんぞ。

この前の立食パーティーでフレイヤの護衛としてついて来ている猛者に出会ったのだが、君の事を聞いて来たのでな……………」

「いやアアああああああああああああつ！」

「あはははははははははは、おめでとうマユズミくうん。結婚式には呼んでおくれよお」

「……………ブフウツ！……………」

シャルデア、アリス、ナアーズ、ミアハが一斉に吹き出した。

ウエディングドレスを着たマユズミとタキシード姿のオツタルが教会で愛を誓う姿が何とも滑稽なのだ。

「笑わないでくださいっ！ 私はそれよりもコミカド先生を超える弁護士になるんです！」

「身の程知らずがあ。一度フレイヤ・ファミリアに出向いてガリ

バー兄弟とプロレスでもしてくると良い、代わりばんこに間接ワザを食らって頭もマシになるだろう。君の蟹股には関節技など効かないだろうがねえええ！」

「だあれが蟹股ですかああああ！」

ちなみにマユズミは裁判沙汰の関係で過去にガリバー兄弟4人と戦った事があるのだ。

こうして新たな仲間を得たコミカドもといミアハ・ファミリアは何時ものように時間だけが過ぎていくのだった。

豊満牛乳と強欲弁護士

「ではではコミカド様はこれで通算500勝目の勝訴という事ですかあ。 リリも流石に驚きますよ」

「ホントに信じられないけどコミカド先生のやり方には呆れちゃうわよ。 リリちゃんもそう思うでしょ？」

「ですが冒険者になつて不安定な収入を得るよりは安定していて良いかもしれないですよ？ それと、さつきから頭を撫でないでくださいねマユズミ様」

迷宮都市オラリオの名物、怪物モンスター祭ファイリアが1週間後に迫ったこの日、マユズミとリリルカは事務所にてファミリア同士の近況報告をしていた。

ソーマ・ファミリアを無事に脱退することが出来たりリカル、いやリリルカは現在ロリ巨乳と呼ばれる女神ヘスティアが主神のヘスティア・ファミリアに所属しているのだ。

未だメンバーは2人しか存在しない零細ファミリアだったが、それでもリリルカの心は幸せに満ちていた。

悪辣なファミリアを何とか抜け出して人並みの生活と安全を手に入れたのだから当然だろう。

「はあ、それにしても平和って素晴らしいですねえ。 リリもソーマ・ファミリアを脱退してやっと普通の人間らしい生き方が出来ます」

「リリちゃんったら小さいのに偉いわねえ。 コミカド先生の所へ来ればもつと早く脱退できたのに」

「リリの周囲には善意で人を助けようなんて奇特な方は居ませんでしたがし、結局最後に信じられるのは自分だけですからね。 こういう問題は自分で解決しないとダメなんですよ」

「リリちゃん……………」

幼い頃から悪質なファミリアにてロクな生活を送ってこなかったリリルカを見るマユズミはその自立した態度に感心してしまうのだが、それと同時にソーマ・ファミリアに対する怒りが湧き上がってくる。

小さな子供が窃盗やスリなどに手を染めなければ生きていけないような環境を平然と放置している主神や団員が許せないからだ。

「まあ、でも……何はともあれリリちゃんが無事で良かったわあ。もし団員達から因縁を付けられたら私に言って頂戴ねっ！ ああいう人達って絶対に反省しない生き物だから」

「マユズミ様ってばビューマンなのにLV5ですもんねえ。 いざとなったらリリも頼らせてもらいますよ」

「ミアハ・ファミリア総出で助けるから安心してね。 まあ、アリスさんとシャルデアさんは魔法大国アルテナで厄介な問題を解決しに行ってるから無理だけど」

「何かあったら頼りにしますねマユズミ様」

そんな風に2人が会話をしていると二階のほうから階段を下りてくる音が聞こえる。

「どうやら事務所の主が起きたようだ。

「ふああああああ、眠い……………マユズミく、腹が減ったので何か作ってくれ。 魚料理とか無いのかあ？」

「オラリオの文明レベルで生物を保存しておくのは不可能ですよ先生？ 私の開発した冷蔵庫は壊れちゃってるし、魚なんて腐っちゃいますってば」

「あああああつ、服部さんの料理が恋しいいつ！ というか服部さんの実力なら間違いなく第一級冒険者になれるだろうに」

「それは同感ですね。 あの人は色々な意味で凄まじいですし」

思わず他愛もないが口癖の料理人の姿を思い浮かべてしまうが全く他愛もなくて服部の存在は謎に包まれているのであった。

以前とは違い真っ直ぐな瞳でコミカドを見つめるリリルカは2人の様子を幸せそうに見つめている。

「おはようございますコミカド様っ！ 本日は少々コミカド様にお話が有ってお邪魔しております」

「おお、リリちゃんじゃないかあ！ 分かるよお、お漏らしが治らないのでマユズミに魔道具を開発してもらいに来たんだろお？ いず

「それは治るから安心したまええ！」

「リリは10歳でお漏らしを克服しましたっ！ 子供扱いを止めてくださいっ！」

「えっ？　リリちゃんって今15歳でしょ？　10歳までオネシヨシてたの？」

「へあつ？ い、今のはちよつとした冗談ですよマユズミ様っ！ りはそんな子供じゃありませんよ」

思わず己の失言に気づいてしまい慌てて前言撤回するリリルカだが、マユズミが笑いを堪えている様子からバレバレのようであった。

真つ赤になったリルカが顔を背けてしまうのだが今はどうでもいい。

「ぷふうっ！　ま、まあ、コミカド先生も私が買って来たソーセージやワインナーでも焼いて食べましょう。　屋台で買って来たんですが、美味しいんですよ？　リリちゃんも一緒に、ぷふうっ！　あはははははははっ！」

「ま、マユズミ様ったら笑わないでくださいませっ！　リリはオネシヨなんてしてませんっ！」

「ソーセージはともかくウインナーに目玉焼き、トーストの三冠王は定番だしねえ、それで良いかも。にしても、プツ……………く、くく、あつははははははははははっ！ 10歳までオネシヨかあ！」

笑いを堪えきれず爆笑する2人の存在に焦るリルルカは恥ずかしそうに慌てふためく。

己の失言に後悔するも時既に遅しというやつである。

[illegible]

「ううう……こないたいけな小人をからかうなんて意地悪で
すう」

顔を真っ赤にしながら恨み言を呟くりリルカだったがソーマ・ファミアでの屈辱を考えれば大した事ではないので我慢する。

数分後、ようやく笑い終えた二人はお漏らし娘、ではなくリリルカとソーセージやウインナーを食べていた。

「デメテル・ファミリアって牛や鳥も飼育してるんですもんねえ。モグモグ」

「ほくんと、中々美味しいもんですねえ。マユズミ様もお肉は好きなんですね。モグモグ」

「あのファミリアって農業系だったわけ？ 野菜だけじゃなくて肉類までも販売してるのかねえ。モグモグ」

三者三様の反応で何気ない会話をする三名。

モグモグと食べている中、ふとコミカドがマユズミに質問する。

「それにしてもマユズミくん？ このパルウムはちっちゃくて良い味だねえ」

「ブフウツ!!!」

その瞬間、マユズミとリリルカの二人が口の中のソーセージとウインナーを吐き出す。

「こ、コミカド様？ 今なんと？」

「そうですよコミカド先生、いきなり何を？」

「だ・か・ら、この袋に書いてあるだろっ！ このポークピッツの商品名だよ」

「へっ？」

コミカドの言葉に思わず買って来たポークピッツの袋を見るマユズミとリリルカ。

すると、袋にはデカデカと「パルウム」と書かれているのだった。

「な、ななな、何でポークピッツの名前がパルウムなんですかつ！
もっと普通の名前にすれば良いのにつ！」

「ま、マユズミ様っ！ こちらのソーセージはドワーフという名前だ
 そうですよっ！」

「あははははははっ！ ウィンナーはヒューマンと書かれているねえ！ 一体どうやって名前を決めたのやら」

あからさまに悪意を持って付けられた商品名に女性陣の二人は真つ赤になってしまう。

「ひいゝひっひっひっひっ！ お、面白いネーミングじゃないかあ！

あははははははははははっ！」

「どこが面白いんですかあつ！　よりによつてウインナーやソーセイジに種族の名前なんてっ！」

「そうですよコミカド先生っ！」

[illegible]

「へ、変な言い方しないでくださいコミカド様っ！」

「そうですよ先生ってばあつ！ 折角美味しく食べてたのにつ！」

爆笑するコミカドはツボに入っただのか収まる様子が見えない。

リルカとマユズミは何とも言えない表情をしているのだが。

「あははははははっ！　ぱ、パルウムで満足できないならドワーフにむしやぶりつけば良いじゃないかあ！　太くて大きいから満足できるぞお！　ひいつ、ひいーつひつひつひつひつ！　あははははははっ！」

$$\left[\left[\begin{array}{c} \vdots \\ \vdots \end{array} \right] \right]_0$$

すっかり食べる氣力を失った二人はナニを想像したのか分からないが食欲が消え失せたようだ。

もつとも、コミカドだけは笑い転げているのだが。

「ふうう、ふははははははっ！ リリちゃんはドワーフのソーセージが大好物のようだねえ！ お小遣いあげるから太くて大きいドワーフのソーセージをくださいと街中で言ってみるといいっ！ あははははははっ！」

「マ、マユズミ様、これはどこで買ったんですかっ！」

「学区のある売店で買ったんだけど、確かイケロス・ファミリアのお店だったような」

「まあ、イケロス・ファミリアですかあっ！ あのファミリアは口くさな事しないですっ！」

主神イケロスが考えたのか団員が考えたのかは分からないが、面白いことが大好きな駄目神であるイケロスのほうが可能性としては高いだろう。

間違はなく愉快犯であることは理解できるのだが。

「もうソーセージやウインナーの話は止めましょうっ！ 折角の食事時だというのに……」

「はあ、マユズミ様に同意です。 っていうか、今日も依頼が有って来たんですけど忘れてましたよ」

「依頼？ リリちゃん、相変わらず君は良い仕事してくれるねえ？ どの派閥だい？」

思わずリリルカに問うコミカド。

リリルカの持つてくる案件は非常に旨味の有る案件ばかりでコミカドとしても助かっているのだ。

本気でミアハ・ファミリアにスカウトしたい人材なのだが、他派閥に入っただのが残念でならないコミカドであった。

「ヤカテクトリ・ファミリアからの依頼ですよっ！ 商業の神と呼ばれるヤカテクトリ様の派閥ですっ！」

「あそこのファミリアかあ！ 私も随分といろんな商品を買わせて貰ってるからねえ。 ぜひとも助けたいと思っっていたんだよお！」

「コミカド先生はあそこの美人店員や売っている精力剤や媚薬なんか

しか興味無いじゃないですかっ！　全くもって情けないし破廉恥ですっ！」

「ははははっ、冗談じゃない。　お店の経営に協力しているんだよお！　その結果として買った精力剤や媚薬を歓楽街で使用しているだけの事じゃないかあ！」

「最っ低です……………」

ジト目でコミカドを見つめるマユズミとリリルカは心をついにし
て声を発する。

迷宮都市オラリオにて確固たる地位と実力を身につけたコミカドは実のところ、女神やオラリオの美女と遊びまくっており元の世界より遥かに楽しんでいるのだ。

強さと財力こそがモノをいう世界では力さえ手に入れば日本などより遥かに自由なのだった。

「ヤカテクトリ様には節税対策やお得な商品情報なんかを教えて貰ってるからねえ。　今後も仲良くしたいと思っていたんだよお！」

「商品情報はともかくっ、あれは節税ではありませんよっ！　完全な脱税ですってばあっ！」

コミカドの言葉に思わず突っ込んでしまうマユズミ。

リリルカは訳が分からないといった様子で見ているだけだが、何となくコミカドがロクでもない事をしでかしたのだろうと想像がついていた。

「ラキア王国にある租税回避の土地を有効活用しているだけじゃないかあ？　何が問題なんだ？」

「今回シャルデアさんとアリスさんが魔法大国アルテナに出向いたの
だってコミカド先生の名前が脱税者リストに記載されていたから
じゃないですかっ！　ラキア文書の流出が大問題なんですよっ！」

「も、もしかしてマユズミ様？　ラキア文書ってあの富裕層の合法的な脱税が記録されてるっていう……………」

「そうよりりちゃんっ！　コミカド先生ったら税金対策として税の少ない国に架空の商店や教会なんかを作って寄付や利益の一部を移動

させてたのよっ！」

「ゲッ、コミカド様つてば本気ですか……」

思わず絶句してしまうリルカ。

それもそのハズ、現在多くの国家間で大問題となっている話題の中心に目の前の男が絡んでいるのだから。

どこのタックス〇イブンだよと叫びたくなるマユズミの気持ちは想像にお任せしよう。

古今東西、金持ちや権力者というのは都合の良いルールを作り法に裁かれないように特権を甘受する生き物だ。

人という生き物である以上、世界が違っても同じなのだろう。

「何が悪いんだ？ 法に違反している訳じゃない」

「オラリオはこの世界で唯一身分による差別が無い土地ですっ！ いわば民主主義なんですっ！」

「で？」

「皆が平等に税金を払っているのにコミカド先生だけ節税なんてマズイですってばっ！ 民主主義への冒涇です」

正義感溢れるマユズミの言葉をコミカドはどうでもいいとばかりに受け流す。

ちなみに、ラキア文書の原本を流出させた者が魔法大国アルテナに亡命して世界各地にコピーをばら撒いているそうなのでシャルデアとアリスの二人が出向くこととなったのだ。

勿論、コミカドには大した問題ではないのだが。

「民主主義へのぼうとくう？ 民主主義というのは誰もが法に反しない範囲で自由に活動できる政治体制のことをいうのだよお？ 誰もが自由に商売をするなら格差が生まれるのは当然だし、その結果一部の金持ちが都合の良いルールを作るのも当然だっ！ 結果まで平等になるわけじゃないんだよマユズミい」

「で、ですが法は皆のものですよっ！ 私達の日本だって皆のために法律が存在していたんですよっ！」

思わずコミカドの正論に吞まれそうになるマユズミだが、やはり納

得がいかないうだ。

そのマユズミの反応を馬鹿馬鹿しいとばかりにコミカドは反論する。

「法が皆のものお？　本気でそう思うなら一度小学校の低学年からやり直してお子様と一緒に二度目の卒業式を経験してくると良い。少しはマシになるだろう、マヌケ面の子供達と一緒にねえ」

「なっ、何が間違ってるんですかつ！」

「大体だね、日本の法律や憲法なんてのは戦後アメリカのGHQによつてアメリカに都合よく作成されたものだ。当然ながらルールというのは作る側に有利に作られる。平等性など一切無いし、地位や経済力によつて同じ犯罪でも刑罰が違ふし場合によつては無罪放免になる事さえ有るじゃないか」

ぐうの音も出ない程の正論なのだが弁護士が言つては元も子もない。

「ですがっ、仮にそうだとしても税金というのは皆の為に使われるべきですっ！　日本だつて税金は日本国民の為に使われていたじゃないですかっ！」

「はあ？　中国や北の核開発に税が流出したり官僚の利権になつただけだよっ！　大体戦後の日本なんてアメリカの経済的植民地なのだよ？　結局のところ国民に日本が平等だと洗脳を施しておけば支配層の連中が上手い具合に甘い汁を吸えるから平等に見せかけているだけなのだよっ！」

「あ、あめりか、ちゅうごく？　かくかいはっ……………コミカド様は何を言っているんですか？」

コミカドの話を全く理解していないリルカだったが世界が違うのだから当然だろう。

「しかしっ！　金は天下の回り物というように一部の人が独占すれば経済が停滞しますっ！」

「それが民主主義の末路だろうから当然だろうねえ！　民主主義が大好きという奴はその結果として格差が生まれたとしても大好きな民主主義の末路なのだから格差万歳と喜べば良いじゃないか」

「真に残念ながらその通りなのだよ強欲弁護」
グリードデیفエンス

現在、バベルから北に位置するヤカテクトリ・ファミリアの本拠地にてコミカドとマユズミは主神ヤカテクトリとの話し合いをしているのだった。

ちなみにリルルカは「ドワーフ」ソーセージを三本食べてからホームへ戻っていった。

出荷されたソーセージやウインナーがどういう名前で売られているのか知ったらデメテル・ファミリアは何と言うだろうか考えたくも無いマユズミであった。

「ヤカテクトリ様としてはどうしたいんですか？」

「裁判沙汰は避けたい。商品が商品だけに話題にされるのはな………」

「というと？」

今度はマユズミがヤカテクトリに質問する。

駄目な神々が多いオラリオでは比較的まともなヤカテクトリが不正を行うとは考えにくいからだ。

「その商品というのが『豊満牛乳』という名の牛乳なのだよ。女性には飲めば胸が成長すると宣伝している牛乳でなあ、一部の女は血眼になって買い漁っている商品なんだ」

「ブフウッ！」

思わず吹いてしまうコミカドとマユズミ。

『豊満牛乳』とは女性の間では人気の商品であり、肌のツヤ、健康、髪の質といった美容目的で飲んでいる女性が大勢居る牛乳なのだ。

マユズミやコミカドも列に並んでいる女性を何度も目撃したことがある。

「つまりだな………調合スキルを持つ我がファミリアのデオン・バレアスが調合を間違えていたのが発覚したのだよ。実際には全く別の効果が現れるのだ」

「別の効果とは？」

「筋肉が発達してボディビルダーも顔負けの筋骨隆々とした肉体に変化していくそうだ」

「あ、あたし……………飲まなくて良かった…………」

「長い期間ずっと飲んでいる女性は更にマズいでしょうねえ。ですが元に戻す牛乳なり栄養剤なりを作れば良いのではないですか？」

ホツと一息吐いて安心するマユズミと打開策が無いのかを聞くコミカド。

すると、ヤカテクトリはおずおずと答える。

「それはもうすぐ完成するらしいのだ。ただなあ、厄介な問題が残っているのだよ」

「厄介な問題？」

二人が声を揃えて疑問符を浮かべる。

「ああ、実はな「ヤカテクトリイイッー、ウチの純情を返せええっ！」……………さっそく来た」

「この声は……………」

「まさかっ！」

思わず心を一つにしてしまうマユズミとコミカドは「とある女神」を想像してしまう。

すると次の瞬間――

ドッゴオオオオオンッ！

ヤカテクトリ・ファミリアの門から玄関までが吹き飛ばされた。

何事かと思い玄関を見るとそこには般若のような顔をしたアマゾネスの少女と男みたいな女神が居た。

「でえ〜おお〜んう〜！ 今すぐに出てこおおいっ！」

「ヤカテクトリイイイ！ ウチの身体を元に戻せええええ！」

そう、オラリオ最強派閥にして頂点に君臨するロキ・ファミリアの主神ロキとアマゾネスの少女ティオナが阿修羅のような顔で立っていたのだ。

この時点でコミカドとマユズミは大体のことを理解する。

「ヤカテクトリ様？　もしかして……………」

「想像通りだよ……………彼女達に豊満牛乳のことを知られてしまったんだ……………」

「では私はこれで失礼いたし「待ってくれええっっ！」って離してくださいっ！　マユズミの馬鹿にでも頼めば良いじゃないですかあ！」
「き、君はオツタルより強いんだし用心棒としても交渉人としても必要なんだよっ！」

実に身勝手な理由だが神とて命は惜しいのだ。

特にコンプレックスのある女性ほど恐ろしいものは無い。

ティオナの一撃で吹き飛んだ団員達は死んでいないのが不思議なくらいだった。

「ヤカテクトリ様、私は痴話喧嘩の仲裁など馬鹿馬鹿しくてやりたくないのですよ？　他を当たってください」

「あ、あれが痴話喧嘩で済むと思うのかあっ！　デオンは地下室に籠もって研究を完成させる為に頑張っている最中だから狙われんかも知れないが私は別なんだよっ！」

「コミカド先生っ！　ヤカテクトリ様が不憫ですし助けてあげましょうよ？」

「そ、そうだマユズミ君！　もっと言ってやってくれ。　3億ヴァリス支払うぞっ！」

「はあ、金よりもリスクのほうが高いですが仕方ない。　この派閥が潰れると私も困るのでね」

今回ばかりは大金を積まれても断わりたいコミカドだったが、ヤカテクトリが天界に送還されれば儲け話が手に入らなくなってしまうので嫌々手伝うことにするのだった。





ヤカテクトリ・ファミリアの応接室は現在、凄まじい悪意と殺気に支配されていた。

原因は言わずもがな、女神ロキとアマゾネスの少女ティオナ・ヒリユテである。

「で？ ウチの身体を戻す薬は出来たんやろうなあ？」

「アタシの身体もこんな風になっちゃて……………戻らなかったら皆殺しにするからねっ！」

「も、もうすぐだ、もうすぐ完成するらしいんだっ！ 待ってくれよっ！」

ヤカテクトリの目の前に座る二人の女性(?)は以前とは比べ物にならないとんでもない姿をしている。

二人ともどこぞの筋肉妖怪のような体型をしており「100%中の100%」になった闇ブローカーのようだ。

暗黒武術会に出場すれば簡単に優勝できるだろう。

「それにしてもロキとアマゾネスのお嬢さん……………随分と立派になったじゃないかあ！ あははははははははははっ！」

ギロリッ！

「……………冗談です」

本人達からすれば笑い事ではないのか肉食獣のような目で睨んでくるのだった。

既に無駄な話をする程の余裕さえ無いのか無言のままコミカドを睨む姿が更に恐ろしい。

LV9のコミカドであつても指で空気を弾くだけで殺せそうなプレッシャーを放っているのだ。

オツタルでさえ勝てないかも知れない。

「で、ではお二人には私から質問します。 コミカド先生が言うように貴方達の肉体が急激に成長したようですけれども、それは『豊満牛

乳』の効能なのでしょうか？」

「ああっ！ そうだよっ！」

「ひいっ！」

無表情で自分を見つめる怪物（乙女？）の凶悪な視線がマユズミに向かう。

ファミリアの中で散々笑い者にされたであろう事は容易に想像できるのだが、その怒りに満ちた表情が二人の恐ろしさを増長させているのだ。

他の団員達は主神であるヤカテクトリを無視して一目散に逃げ出してしまったのが良い証拠だろう。

「で、ですがっ……調査した結果ではここまで肉体が変化したのは貴方達だけだそうです。他の女性はいせいで腹筋が少し割れたり腕が数センチ太くなったただけだそうです。牛乳のせいとは言い切れませんよ？」

「ああ、マユズミ君？ ロキとティオナ君はロキ・ファミリアの権限をフル活用して『豊満牛乳』を買い占めたりしていたらしい。一日20本ほど飲んでたそうだよ」

「に、20本もっ！」

「……………」

思わず聞き返してしまうマユズミだったが、無言で殺気を放つ二人の姿がそれを正しいと証明している。

とてつもないコンプレックスの塊である二人は巨乳に対する憧れが他の女性とは段違いなのだ。

絶句してしまうマユズミは気絶して楽になりたいと生まれて初めて思った。

「まあまあ、健康に影響が無いんだからそう焦らないように。しばらく待てばデオンとかいう小僧が元通りになるように新薬を調合してくれるでしょうしねえ」

コミカドが暢気にそんな事を言うのだが、肝心の二人は冗談じやな

いと言わんばかりの顔で殺気を放ちながら声を荒げてしまおうのだった。

「健康に影響が無くとも関係無いやでっ！　ウチが街を歩いたびにどんな思いをした事かつ！　あの憎たらしいドチビからは憐れみの視線と同情までされたんやぞっ！　治らんかったら絶対に殺すからなあっ！」

「アタシだってファミリアの中では腫れ物扱いなんだからねえっ！　ティオネやベートには爆笑されるし他の皆は化け物を見るような目で見てくるし、正直このファミリアを今すぐにも破壊したいわよっ！！」

「お、おち、落ち着けっ！　私の名にかけて必ずデオンには元通りになるよう薬を作らせるから」

必死な表情で二人を宥めるヤカテクトリ。

恐らく治らない場合、ギルドやオラリオを敵に回してもヤカテクトリ・ファミリアを滅ぼすだろう。

この世の全ての不吉や悪意を一点に凝縮したような殺意が嘘ではないと物語っていた。

「にしても馬鹿だねえ！　ファミリアの力関係にモノを言わせて独占なんかしなければここまで酷い変身を遂げる事は無かっただろうに」
「ウチの気持ち치가アンタに分かるんかいなあっ！　藁わらにも縋すがる思いやったんやでっ！」

「アタシだって必死だったのよっ！　いつもティオネと比較されてたアタシの気持ち치가分かるのっ！」

「ああ、うんうんそうだねえ。　取り合えず落ち着きなさい。　焦っても解決しないのだから」

面倒な依頼を引き受けたなど絶賛後悔しているコミカドは日本ならば有り得ない問題にゲツソリしてしまう。

只でさえ不気味な闇ブローカーが女言葉で話しかけてくるのだ。

コミカドからすれば気持ち悪くて仕方が無いのだ。

「にしても、不老の存在である神に肉体を成長させるとは……………恐るべし豊満牛乳だねえ。　ぷふっう、くつくつく、

あーはっはっはっはっ！　こりや、酷過ぎる」

「……………」

「こ、コミカド先生ってばっ！」

不動明王の如き威圧感と殺気を撒き散らしながら睨んでくるロキとティオナの存在は悪鬼羅刹のようだ。

ロキが神会デナトウスに参加すれば間違いなく笑いにされるだろう。

「まあ、何はともあれ元に戻る薬品が開発されそうなんだから良かったじゃないですか？　私としても無駄な裁判は避けたいので示談にしましょう」

「ウチの精神的苦痛は示談じゃ解決せえへんのやつ！」

「アタシだってそうよっ!!　今すぐにデオンを血祭りにあげたいわっ！」

「裁判になれば野次馬の連中にマッスルボディを見られますよ？　一生オラリオで笑う者になりますねえ」

「うぐうつ……………」

コミカドの一言で冷静に戻る二人は自分達が笑いの種にされる姿を想像してしまう。

有名人だけあってゴシップネタが発生すれば一般人よりもネタにされて厄介なのだ。

ヤカテクトリ・ファミリアまでは顔を隠しながら来たようなので、やはり筋肉妖怪のような姿を晒すのは嫌なのだろう。

「裁判になれば大恥をかきますからねえ。　お金は得られても心の傷は永遠に残りますよお？」

「彼の言う通りだよロキっ！　私としてもデオンに開発を急がせるのが大事にするのは止めよう」

未だに二人の乙女(??)は納得いかないようだが、精神的な余裕が無いのか元に戻ることしか考えていないようであった。

「そんなら新薬が出来上がるのは何時になるねん？　一刻も早く戻りたいんやあつ！　も、もし治らなかつたらウチの神生は……………」

うう、うつ、うううう、うああああああんっ！ 嫌やでえええっ！」

「その不気味な姿で泣かないでください。泣きたいのはこっちです。完っ全に暗黒武術会の覇者にしか見えん」

「私も小さい頃は週刊少年ジャ○プ読んでたなあ。連載が長続きしない作者でしたけど……」

マユズミとコミカドは二人揃ってうんざりしてしまう。

化け物のような女がギャアギャア泣いているのだから当然だろう。

本人からすれば泣きたいのは普通なのだが。

「デオンの研究が本当ならば」とある材料」さえ有れば今すぐにでも完成するらしい」

「——ツツ!?!」

ヤカテクトリの言葉に顔をハッとさせるロキとティオナ。

野獣のようなギラギラした目でヤカテクトリを見つめる二人はマユズミのトラウマになるだろう。

「何が必要なんやあ？ 採取が難しいアイテムなんかいなあ？」

「教えてくれれば直ぐに採って来るわよっ！」

二人のやる気がこれまでに無いほど上がる。

余程戻りたいのか世紀末覇者の目をしながらヤカテクトリを見つめている。

「ポイズン・ウエルミスの体液と「ヨツシヤアツ！ 採りに行くでええっ！」って、待てロキっ！」

「何やねん？」

慌てて引き止めるヤカテクトリの姿に振り向くロキ。

ティオナと共に早速ダンジョンに向かおうとしていたらしい。

神でありながらダンジョンに向かうなど愚かとしか言えないだろうが、今のロキならゴライアスでも瞬殺できそうなのでヤカテクトリは黙っておく。

「も、もう一つだけ有るんだ……それが、ひ、非常に厄介な物で入手困難なのだ」

「何やねん？」

「アタシの力が有れば余裕よっ！ ポイズン・ウエルミスの体液なんて簡単でしようし、そっちのアイテムも簡単にゲットするわよっ！ 勿体つけずに言いなさい」

今ならオツタルと一騎討ちをしても勝てそうなティオナはどんなモンスターでも斬り伏せると言わんばかりの勢いでヤカテクトリを睨む。

すると、ヤカテクトリは言い辛そうに口を開く。

「は、……………ハイエルフの体液だ」

「……………やっぱコイツ殺そうかつ！」

「まっ、待てっ！ 豊満牛乳というのは牛乳という形で販売しているが魔法薬なのだっ！ その魔法薬の効果を中和する為には更に高純度の魔力が必要なのだよっ！」

「説明を続けろ……………」

ドス黒い濁った目つきでヤカテクトリを見つめるロキとティオナは今すぐにでもヤカテクトリの首の骨をへし折りたい気分になるのだが、軽々しく悪戯や嘘を吐くような相手ではないので本当なのだろうと判断する。

アポフィスやイケロス、ヘルメスならば間違いなく信用されずに殺されていただろう。

「ポイズン・ウエルミスの体液で牛乳の効果を打ち消せば元に戻るらしいが、豊満牛乳の効能が肝心のポイズン・ウエルミスの体液を中和してしまうそうだ」

「で？」

「豊満牛乳という魔法薬の成分を中和させるだけの魔力純度の高い液体が必要なのだそうだ」

「確かにハイエルフは世界でもトップクラスの魔力を持っていますし、普通のエルフとは一線を画していますからねえ。　コミカド先生、どう思います?」

殺気を放ちながら睨んでくるロキとティオナの姿はヤカテクトリのストレスを猛スピードで高めていく。

日本でも似たような事件でウィンター印の牛乳がテレビに取り上げられたなあとマユズミは暢気な事を考えてしまう。

「あつはははははははははっ!　　なあるほどねえ、確かにハイエルフともなれば里に出向いても会ってくれる事などまず無いだろうねえ。

排他的な種族だし大変だろうねえ」

「こ、コミカド先生?　エルフの里まで出向いて血液を少しだけ貰うって大変なんですか?」

「相変わらずのポンコツだなあマユズミィ。　相手の血液を少量手に入れるだけでも呪いをかけられる世界なんだぞ?　我々のような日本人の感覚は通じないし身分制度があるんだから簡単には合えないさ」

その台詞によくこの世界と日本の違いを思い出す。

現代日本のように表向きの身分が無くなった世界と王侯貴族が当然のように国を仕切る世界では考え方や風習が全くといって良い程違うのだ。

「で、でもコミカド先生ならエルフの里開発計画で里の方々と知り合いますから……………」

「私がこの世で最も嫌いな物が自然で、二番目が田舎で三番目が貧乏だっ!　虫ばかりの森なんて誰が行くかっ!」

異世界でもマイペースなコミカドの姿にある意味呆れてしまう。

以前エルフの里で出向いた時もマユズミが騙し騙しでやつと連れて行くことに成功したのだ。

自然環境など全く興味が無いコミカドは心底どうでも良いのだから。

「ろ、ロキ?　リヴェリアに頼んだら何とかならないかな?」

「王族の血液なんかを他派閥の、それも男に渡すなんて他のエルフが

許さんやろうなあ」

「涙や唾液でも良いんじゃない?」

「もつと嫌がるやろっ! 特につ! あのリヴェリアが唾液なんて他人に渡すわけないやろっ! し・か・も、薬品が完成したらウチらは唾液をブレンドした薬品を飲むんやぞっ!!!」

「……………絶望的だあ」

二人の光景を見ているヤカテクトリも気まずそう様子だった。

ヤカテクトリは、ミアハ・タケミカツチ・ヤカテクトリというオラリオの中でも紳士的でマトモな男神として有名なのだ。

やはり、責任感もあるのだろうがコミカドはニヤニヤと笑いを堪えている。

「ぶつ、くつくつくつく、あーはっははははははっ! な、ならば汗でどうでしょうかねえ? お風呂場でも何でも利用して採取すれば良いでしょうっ! ひいーひいっ、あくはっははははは、腹が痛いっ!」

「ティオナ……………この横分小僧を殺して構わんぞ?」

「うん……………消すか」

「お、落ち着きなさい二人とも。 グリードデイフェンス 強欲弁護も止めなさいっ!」

気苦労に絶えないヤカテクトリは必死に三人を宥めるのだが、マユズミはさつさと帰りなってしまう。

家に帰ったら可愛い小人族 バルウム の少女を抱き締めて眠りたいなあなどと暢気な事を考えるマユズミは改めて無乳女のコンプレックスが哀れに思えてしまうのだった。

「さあて、では問題も解決しましたし私はこれで「待ちいや横分小僧っ!」 っうああ、抱きつくなああ!」

「エルフの里にコネが有るんやろっ!! 金は払うから頼むっ! お願いやあ!」

「お断りだあっ! 誰があんな殺風景で面白くもない場所に行くかつ! 明日はイシユタルちゃんと甘い夜を過ごす予定だし、明後日はフレイヤちゅわあんと食事なのだよ。 その後は勿論チュツチュツする予定だっ!」

「こ、コミカド先生ったらあ！　行つてあげれば良いじゃないですか？」

「そうよっ！　アタシだってこのまま死ぬまでこの姿なんて絶対に嫌っ！」

最低なことを当たり前に言うコミカドに猛抗議する三名は非常に喧しいのだが、ヤカテクトリとしてはコミカドに任せて終わらせたいのだ。

哀れケンスケ・コミカド……………異界の地にて眠る。

「眠らあああんっ！　何だ今の電波はっ！」

「頼むで横分小僧っ！　女なんて何時でも抱けるやろうが」

「そうよっ！　アタシ達だって辛いのよっ！」

「ええい離せっ！　あの魔法熟女から汗でも唾液でも涙でも採取すれば良いだろうがあっ！　私を巻き込むなあ」

「リヴェエリアに殺されるわ（わよ）」

取り付く島も無いといった様子のコミカドに他の四名も必死そうである。

全員の意思がコミカド一人に任せて終わらせたいと一致団結しているのはコミカドへの信頼の現われなのか、はたまた面倒事を押し付けたいだけなのだろうか。

「なあ強欲弁護、私のファミリアの為にも頼むっ！　それにエルフの里ならば美女ばかりだし最高だぞ？」

「生憎ですがヤカテクトリ様、美女なんてオラリオには腐る程いるのですよ。　ここから一週間は必要ですし、正直なところ面倒なので嫌です」

「はあ、この際リヴェエリア様に正直に話すしかないでしょうねえ。

コミカド先生もそれくらいなら交渉しても良いでしょっ！　私も手伝いますからっ！」

「ウチからも頼むで」

れ、私の魔法で頭を吹き飛ばしてやろう」

「血液ですよ血液っ！ コミカド先生もふざけるのは止めてくださいっ！」

当然の如く拒否するリヴェリアの姿がそこにはあった。

何故、よりにもよって汗と唾液のほうを要求するのか理解できないマユズミは突っ込んでしまう。

「冗談に決まっているだろうマユズミい。私だってリヴェリアの汗や唾液など金を貰っても御免だし、折角ならフレイヤちゅわあんとかイシユタルちゃんのほうが……って杖を向けるな杖をつ！」

「はっはっはっは、言葉には気をつけないと後ろから刺されたりするかも知れんぞケンスケ？」

ハイエルフ特有の美貌で見事な笑顔を作るリヴェリアだったが、辺り一面に見事な冷気と殺気が充満しておりマユズミは気絶してしまいたくなるのだった。

美人は怒ると恐ろしいのだ。

「なありヴェリア、ウチを助けると思っ血液を提供してくれえ！」

「リヴェリアあ、ずっとこの身体でいるのはアタシも嫌だからさあ！

少して良いから血を頂戴よ」

屈強な肉体で女性言葉を使う二人の姿は不気味であり流石のリヴェリアもドン引きしている。

どこぞの筋肉妖怪の闇ブローカーがオカマになったと考えればその気持ち悪さが想像できるだろう。

「……っ……！ わ、分かったから近寄らんでくれ。正直不気味なんだが……」

「リヴェリアア、ウチのためにアリガトなああ！ 大好きやでえ！」

「アタシも大好きだよリヴェリアア」

思わず感動と喜びのあまり麗しいハイエルフに抱きつくマッスルボディの二人。

化け物同士で抱きついている様にしか見えないのだが。

「うあああああつ！ ち、近寄るなあ！ ケンスケも見てないで止め

ろおお！」

「あっはははははははっ！ 仲良きことは美しいかなあ。 実に羨ましいねえ！」

ようやく元の身体に戻れるのだと涙を流す二人の乙女(??)だったが、抱きつかれているリヴェリアのほうはゲッソリしている。

恐らく他派閥の人間ならば魔法で消し飛ばしているだろう。

「でも、これで一件落着じゃないですかっ！ コミカド先生も思ったよりスムーズに進んで良かったじゃないですかっ！」

「フンッ、私が居るのだから当然だよお？ 後はヤカテクトリ様に報告してさっさと新薬を開発してもらえば終了だよ。 今回は一番疲れたねえ」

「私としても主神と仲間が化け物のままでは困るのでな。 寧ろもつと早く連絡して欲しかったくらいだ」

流石に常識人であるリヴェリアだけあって話が簡単に纏まる。

他のエルフ達が周囲にいないければ割りと簡単に話が進むのだが、やはり王族で美女というのは近寄りがたい存在なのだろう。

この強欲弁護士のように面の皮が厚い男ならば話は別だが。

「一時はどうなるかと思ったがウチも元通りになれるし、これからもう一回ティオナとヤカテクトリのファミリアまで出向いてくるわ」

「ううっ……ぐすっ……一生このままだったらどうしようかと……やっ戻る……」

「その顔と身体で泣くなあ！ 不気味だろうがあ！ 今までの依頼の中では最悪だよ」

服部さんならば上手くやり込めてくれるんだろうなあなどと思っってしまうコミカドは悪くないだろう。

去っていくロキとティオナを見つめるマユズミもうんざりした様子で明後日の方向を見つめている。

「まあ、何だ……うちの主神と団員が世話になった」

「貧乳というのが女をあそこまで追い詰めるとは……哀れな」

「コミカド先生みたいに容姿とスタイルで女性を判断する男性が居る

からですよ？ ケイコさんと結婚した時にしつかり更生すれば良かったものを」

「私が更生するのではないっ！ あの金使いの荒い寝癖最悪の女こそが更生するのだよっ！」

「へあ？」

何時ものようにマユズミに毒舌を吐くコミカドに、それを当然の如く受け流すマユズミだったのだが約一名マヌケな声を上げてしまう女が居た。

長い耳をピクピクさせているハイエルフ様である。

「ケンスケ……………まさかとは思うが結婚しているのか？」

「あ、そういえばリヴェリア様は知らないんですっけ？ コミカド先生って結婚してたんですよ」

「とつくに離婚しちゃったけどねえ！」

「……………あ？ 世界の法則が乱れているようだ」

「どういう意味だあああつ！」

信じられないものを見たかのように驚愕するリヴェリアはどこぞの最後の物語に出てくるような台詞を吐く。

お世辞にも結婚など出来そうにないコミカドが結婚していたという事実はオラリオに流れれば話題になるかもしれないだろう。

「コミカド先生と結婚してやっていける女性なんて相当我慢強いか人格が破綻しているかのどっちかですよ」

「失礼な事を言うな蟹股女があ！ そういう君も人の事言う前に結婚したらどうだあ？ 相手が居るならねえ」

「指差さないでくださいっ！ セクハラですよっ！」

どんぐりの背比べをするマユズミとコミカドだったが、ポカンとした表情のリヴェリアはどこか上の空だ。

数分ほど醜い争いを繰り広げたところでふと、マユズミが疑問を口にする。

「つていうかりヴェリア様ってお見合いとかしないんですか？ フィンさんなんて結構恋人探しをしてますけど」

「え、ああ……………私はそういう事に縁が無くてな。 良い相手に出会

えば話は別なのだが」

「高位冒険者でお金持ちで格好良くてオシャレな男性を探してくださいよりヴェリア様っ！ ミアハ様やディオニュソス様みたいな男性なんて最高ですよっ！」

「ペットを飼い始めたからお終いだな……………」

冷静な分析をするコミカドは流石に晩婚化の現代日本に居ただけのことはある。

特にバブル期の女性などは3高だの3Kだの言いながら婚期を逃した者も大勢いたほどだ、

この時代では考えられないがそれでも生涯独身で終える女性の中には存在する。

「リヴェリア様みたいに完璧だと男の人だつて近寄りづらいですねえ。 フレイヤ・ファミアにもエルフの第一級冒険者が居ましたしお見合いとかどうです？」

「いや、折角だが……………」

「はーはっはっはっはっ！ マユズミいゝ、人の心配している場合かあ？ 君にはオツタルが居るじゃないかあ？ あっははははははははははっ！」

「そのネタを引き摺るの止めて下さいっ！」

武術と戦いにしか興味の無い屈強な猪男を想像して思わずゾツとするマユズミ。

ちなみに高位冒険者の女性ほど結婚が遅れたり独身だったりする割合が高いのだが、それを口に出す男は居ない。

「まあ何はともあれ一件落着なんだから良しとしよう。 デオンとかいう小僧もかなり優秀な調合スキルを持つらしいし解決するだろう。 帰るぞマユズミ」

「そうですね。 何時までもお邪魔する訳にはいかないですし……………」

「もう帰るのか？ 折角だから夕食でも食べていくと良いさ」

「折角だがこの後重要な案件が有るんだ。 マユズミみたいな暇人じゃないのだよお」

「誰が暇人ですかっ！」

慌てた様子で二人を引き止めようとするリヴェリアだが、コミカドはあっさり断わってしまう。

ハイエルフであり最強の魔法使いと名高いリヴェリアの誘いを断わる男などそうそう居ないだろう。

無論、リヴェリアとてコミカドが訴訟のプロである事を理解しているので目くじらを立てるような真似はしない。

次の一言が耳に入るまでは――

「何てたつて今日はデメテル・ファミリアのデメテルちゃんとお食事だからねえ！ 食後は宿でもとつてニヤンニヤンして朝日を迎える予定なのだよお！ デメテルちゃんはボインボインだから楽しみだよお、はっははははははっ！」

「……………」

急激に部屋の温度が下がっていくのがマユズミには理解できてしまう。

女性二人からの冷たい視線をものもしないコミカドは既にデメテルとの逢引を妄想していた。

無駄に気を使ってしまったリヴェリアは強烈な握力で杖を握り締めており不壊属性デュランダルの特性を持つ杖がミシミシと音を立てている。

「さあ、本日も私のダンディな肉体とフサフサの胸毛から溢れ出るフェロモンをたっぷり味わわせてあげようじゃないかあ！ あゝはっはっはっはっはっ！ ん？ どうしたんだ二人共？」

「さて、では先生……………今回は裁判にはならないようですし私はこれで。 ごゆっくりどうぞお！」

「ごゆっくりってどういう意味だマユズミっ！」

「フッフッフツ、それはなあ……………こういう意味だっ！」

思わずネズミのように逃げ出してしまったマユズミを不思議そうに見つめるコミカドだったが、背後に緑色の悪魔が存在することには気づいていなかった。

ドゴオンツ！

「うがああああっ！ な、なにが、おこつ……………」

突如として振り放たれた杖がコミカドの後頭部に直撃する。

その凄まじい威力は並みの冒険者ならば後遺症が残るかもしれないレベルだが、生憎オラリオにはポーションやエリクサーがあるのでどうでも良かったりする。

「さて、女神デメテルには上手く言っておくでしょう」

金剛力士像のような恐ろしい表情を浮かべるハイエルフという名の鬼はふと、そう呟いた。

数日後、ようやく元の身体に戻ったロキとティオナの二人はそれ以降、牛乳を一切飲まなくなったという。

貧乳に悩む女、完璧過ぎて結婚できない女、理想の男性が見つからない女、などなど様々な女性がこのオラリオでは存在するのだが、婚期を気にする女ほど厄介なものはないのであった。

ちなみに、ロキ・ファミアにて結婚適齢期を過ぎて結婚せずに残っている女性団員は七割以上だという話はタブーなのであった。いつの時代もエリート女性は結婚に苦労するのだ。

強欲弁護士と世界扉

場所はギルドの二階にある裁判所。

強欲、拝金主義、女好きで知られるオラリオ一の有名人ケンスケ・コミカドは何時もの様にたたずんでいた。

傍聴席にはポップコーン片手に喜劇コメディを見るかのように集まる神々や冒険者がゾロゾロと集まっておりギルドの名物として知られている。

「小人の貴方じやもう満足出来ないしウンザリなのよおおつ！」
バルウム

「だから浮気かあ、ふざけるなこのアバズレルナール狐人ルナールがああつ！」

「被告のマイヒメさんはこう仰っているのですつ！ 猪人ポアズのナニを知ってしまった以上、もはや原告のアッシュさんでは満足出来ないとおつ!! あーはっはっはっは、小人族バルウムのポークピッツじゃ仕方が無いですよええ？」

——ぎやはははははははっ！

「だ、誰がポークピッツだ拝金主義のクソ弁護士がああ！ こっちは浮気されてんだよお！」

コミカドのその言葉に傍聴席の小人族バルウムの男性以外が大爆笑する。すっかりオラリオ名物となったコミカドの裁判は傍聴希望者が殺到しているせいもあり百名以上の見物人が居るのだ。

「ひ、ひ、被告代理人、は、破廉恥な発言は控えてくださいっ!!」

「おやあ、私はポークピッツと言っただけですよ？ 一体ナニを想像したのでしょかねえアイラさん？」

「はえ？ え、いえ……それはあ………」

原告代理人を務めるアイラはエルフ特有の長い耳を真っ赤に染めてピクピク動かしている。

高潔なエルフである彼女にはとても人前で口に出せない内容であろう事を分かっている問い掛けるコミカドだったが、男神や冒険者の多数がニヤニヤ笑っている。

「と、とにかく不適切な発言は謹んでくださいっ!! ぽ、ポークピッツ

だの何だの変な表現はしないでくださいっ！」

「あーっはっはっは、これは失礼しましたアイラさん。貴方はポークピッツがお嫌いでしたかあ？ 昨日のお昼は太くて大きい『ドワーフ・ソーセージ』を三本も食べてましたからねえ。うっかりしてましたよお！」

——シーンッ！

一瞬、裁判所内の全員が凍りつく。

男女共に口をポカンと開けながらマヌケな顔を晒している姿は中々見れない光景だろう。

「二二」 うおおおおおおおっ!! 「二二」

「お、俺らのアイラさんがドワーフのナニを食べたああ？」

「う、嘘だあああああっ！」

「エルフでありながら、未婚の女性が昼間からなんて……………最低」

「ご、誤解ですうううっ！ 私はイケロス・ファミリアの販売しているソーセージを買っただけですっ!!」

傍聴席の男女が大声を上げて騒ぎ出す中、当のアイラは必死に身の潔白を訴える。

高潔なエルフ族にとって婚前交渉を疑われるなど自殺モノの屈辱であり騒ぎ出す傍聴席に向かって真っ赤な顔をしながら声を張り詰めるのも当然だろう。

「静粛にっ!! 騒ぐと退廷させますよっ！」

「全く紛らわしい原告代理人にも困ったものですねえ？ 騒がしくて仕方がないですよお」

「二二二」 誰のせいだよっ!! 「二二二」

「では話を戻しましょう。今回の件は既に夫婦の仲が冷え切っていた時に起こったのですっ！」

当然のように周囲の者達を無視して話を戻すコミカドは実に図太

い神経をしているといえるだろうが今はどうでもいい。

無論、相棒のマズミに至ってはうんざりしているのだが。

「皆さん、男女の愛や熱などというのはいずれ必ず冷めるモノなのですっ！ 我々人間というのは皆誰しも不完全で欠点だらけの存在なのですよ。 選択を間違えてしまう事も有れば同じ相手を生涯愛し続けるのも難しいのですっ！」

「そ、そうですよっ！ 私だって何時までも結婚した当時のようにアッシュを好きでいられる訳じゃないのよっ！」

「黙れアバズレがああつ！ 俺の12年間は何だったんだあつ!!」

「双方共まずは落ち着いてっ！」

ヒートアップしていく離婚裁判に裁判長が仲介に入る。

警備員として雇われた上級冒険者も相変わらぬの光景にうんざりしている様子だが過去に暴力沙汰に発展したケースもあるので油断出来ないのだ。

「もう一度言いますっ！ 我々は神ではない只の人間なのですっ！ 神々でさえ浮気やら女遊びやら「胸が小さ過ぎて結婚できない女神」やらが存在するのですから人間である我々が完璧になれないのは当然なのですっ!!」

その瞬間、ポップコーンを食べながら傍聴席に座っていた「とある女神」に視線が集中する。

主にその胸を見る者が大半だ。

「な、何でウチを見るんやっ！」

ニヤニヤと見つめてくる男性陣や哀れむような目で見てくる女性陣にポップコーンを喉に詰まらせそうになるロキは己の「まな板」を忌々しそうに見つめる。

一部の者達には「豊満牛乳」に手を出してマッチョになった事を知られているので尚更気まずいのだ。

「神友の元で自堕落な生活をして追い出された女神、女好きなせいで嫉妬深い妻に苦勞させられている男神などロクでもない神々だっ！ 存在するのですよ。 ちなみに今言った二名の神は姉弟なんですよ！ ロクでもない姉にロクでもない弟も居たものですよねえ？」

「うぐうつつ!」

コミカドの発言に傍聴席から「ジャガ丸君」を喉に詰まらせる女神がいた。

ロリ巨乳として有名なその女神は言わずもがな、ヘステイアである。

今度は女神ロキがニヤニヤと哀れむような目で見ている。

「何故それを知っているんだ」と言わんばかりにコミカドを見つめるヘステイアは、コミカドが異世界人である事を知らないのだから当然だろう。

「話は逸れましたが夫婦間の愛が冷え切っていた場合、これは離婚事由として成立するのですよ。妻を満足させられないナニしか持たない男のせいでマイヒメさんは不遇な思いをさせられていたのですっ! 何と可哀想な被害者なのでしょうかっ!」

「コミカド先生の仰る通りですわ。ああ、何て可哀想な私ですこっとっ! 女一人満足させられない男と結婚してしまうなんて、ああ悲劇だわあ!」

「このクソアバズレ女があああああつ! やっぱりブツ殺すっ!!」

「静粛につ!!」

警備員の上級冒険者達がいざという時にアツシュを取り押さえるため身構える。

裁判長は相変わらずの光景にうんざりしているようだった。

「全く、ナニの小さい男は器も肝っ玉も小さくて困りますなあゝ。

12年も欲求不満の夫婦生活に付きあつて上げたマイヒメさんに感謝もせず己の未熟さ故に女一人満足させられない男の負け惜しみは実に困りますよお!」

「そうよそうよっ! 小人はバルウム小人同士で結婚するのが一番よ」

「加害者が被害者面してんじゃねええっ! 不貞行為を働いたのはソッチだろうがあ!」

あまりに遠慮の無い二人の物言いに原告のアッシュは思わず叫んでしまう。

徹底的にコケにされたのだから当然だろうが、傍聴席の小人バルウム以外はアッシュを見てクスクス笑っているのだから火に油を注ぐようなものだった。

小人バルウムの男性の内、何人かはアッシュに同情して涙ぐんでいるのだが野郎からの同情など貰っても全く嬉しくないアッシュには良い迷惑だ。

「加害者あゝ？ どの面下げてそんな事を言ってるんでしょうかねえ？ マユズミイーあれを出せ！」

「……………はい」

そう言うマユズミは懐から封筒を取り出す。

中に入っているのは数十枚にも及ぶ写真の束であった。

「さあ、アッシュさあん？ コレを御覧ください」

「はっ、え？ いや、まさかコレって……………」

「そう、貴女がイシュタル・ファミリアの女の子達とにやんにやんしていた時の写真ですっ！ 身に覚えが有りますよねえアッシュさあん？」

「……………な、何の事だかサッパリ」

そう惚けるアッシュだったが傍聴席の者達や裁判官にも写真が行き渡ると場の空気が一変する。

その写真に写っているのは娼婦のアマゾネスやエルフ、猫キャットレベール人と乱交パーティーを開いてご満悦の様子のアッシュが写し出されていたのだ。のだ。

娼婦に変装したりリルカと透明魔法で潜入していたアリスがバッチリ魔道カメラにて証拠を収めていたのだから言い訳など不可能だろう。

「はああああっああああ、何よコレええええっ！ この最低嘘吐き男がああっ！ 妻が居るにも関わらず娼婦と寝て遊んでたなんて最

低のクズ野郎だわあ！」

「だ、黙れアバズレ狐人^{ルナール}がつ！ 男はたまに発散しないといけない生き物なんだよつ！ 最低のクズはテメエだろうがあ！」

「アツシユさあん、貴方の女性経歴に関してとはとくに調査済みなんですよお。 2年以上も前から娼館に通っていたのを確認しています。 奥さん以外の女性と遊んで心が痛まないんですかあ？ 立派な浮気ですよお？」

「こ、これはあくまで金を払ってサービスを買うだけの商売だつ！ 金の無い女達や歓楽街の経済発展の為に協力してやっていただけに過ぎんさ……………」

「……………」

あまりにゲスな言い訳を平然と主張するアツシユを前に裁判所内の空気がしんみりする。

先程まで傍聴席で応援していた小人族^{パルウム}の男性陣でさえ固まっていた。

勿論ながら女性陣は冷気を放ちながら汚物を見るような目で見つめているのだが。

「であるならば、お二人は共に別な異性と遊んでいたわけです。 ならばアツシユさんばかりが被害者というのはお門違いな話ですよつ！ いや、マイヒメさんは2ヶ月前から浮気をしていましたが貴方の場合は2年以上も前からですし、貴方の方が責任は重いのですよ」
「コミカド先生の言う通りです。 今回の件はそちらにも非がありません。 弁明が有るならハッキリと言ってくださいアツシユさん」

「お、俺は妻の事を完璧な女だと思って愛しているし100点満点の女だと思ってた。 ただ、人間というのは環境に慣れてしまう生き物だからな、こんな完璧な嫁と一緒に居たらソレが当たり前になって感謝の気持ちが無くなってしまっだろう」

「「「「 はあ？ 」」」」

いきなりの話に裁判所内の空気がこれまた一変してしまう。

先程まで喧嘩同然の状況だったのだから当然だろう。

だがしかし――

「だがっ、だがしかしっ!! 他の女の子と遊ぶ事によって、他の女に比べてウチの妻は良くできた良い嫁だなあと実感できるんだよっ! こうする事によって妻への感謝を忘れないように心掛けていたんだっ!」

「「「「……………」」」」

「女遊びというのは妻と他の女を比較する事によって妻に対する愛を再確認する為の神聖な行為なんだよ。夫婦円満の秘訣であり夫として避けては通れない道なんだあっ!」

「「「「……………」」」」

再び傍聴席の女性陣から冷たい視線が浴びせられていくアツシュ。何人かの男性陣は納得しているようだが女性陣の手前、中々擁護出来ないのだ。

一瞬、コミカドも上手い言い訳を考えるものと納得してしまいそうになるのだが今はどうでも良い。

「だそうですが、マイヒメさんどう思いますか？」

「最っ低の言い訳ですね。こんな卑劣な男と結婚した自分が情けないですう」

「でしょうねえ、夫婦とは互いに支え合い身を削りながら人生を歩んでいくもの。こんな身勝手な言い分で12年もの間無駄な時間を使わされたのでは理不尽と言わざるを得ないでしょう」

「うっ、ううう……ぐすっ……ああああっ、なんて不幸な私なお……」

「おいっ! お前も浮気してるんだから一方的な被害者面すんじや

ねえよ！」

ついつい叫んでしまうアツシュだったが傍聴席の雰囲気はすっかり被告であるマイヒメへの同情に変わりつつありアツシュへの蔑むような視線が集中している。

男としては正しいが人としては最低な男であつた。

「良く考えてもみてくださいっ！ 毎日毎日、妻として必死に夫を支えているにも関わらず不貞行為を働く最低な夫の相手をしなければならぬのですっ！ 満たされない夫婦生活で身を粉にして働くマイヒメさんは一体どれだけお辛い思いをしてきた事でしょうか!!」
「うっ、ううう……あゝ、あだぢつたら、ぐすっ、こんな生活を毎日続けて、うう、身も心もボロボロになつてしまったのよお、ぐすっ……うう、うあああ、あああああつ！」

「何という惨めな人生でしょうか！ 間違つた男と結婚してしまつたばかりに彼女の人生は闇に閉ざされてしまったのですっ！ どうかマイヒメさんの第二の人生を邪魔しないであげて欲しいと思うばかりですっ！」

「おいっ！ なんて俺が加害者みたいになつてゐるんだよ!!」

周囲の男女の殆どがマイヒメに対して同情的な視線を向けているという不可解な現象に叫んでしまうアツシュ。

いざとなれば泣き喚いて同情を買えというコミカドの姑息な戦略だが案外有効なのだ。

「何度も申し上げますが、結婚しているにも関わらず異性と遊びまくっていた期間は原告のアツシュさんのほうが長いのですっ！ そんな夫に対して健気に尽くしていたマイヒメさんに感謝もせず不貞だの浮気だのと喚く馬鹿がいると実に迷惑ですよっ！」

「ううううっ、ううあああああつ、うゝ、私がもつと良い奥さんだったら、アツシュもこんなだらしない男にはならなかったのよお。

全て私の責任なんです……ぐすっ……うう」

「妻一人満足させられないアツシュさんではマイヒメさんに愛想を尽かして逃げられるのも当然でありますっ！ 寧ろ、12年間もの間我

慢してくれたことに感謝するべきなのですっ!」

「そんな馬鹿な話があるかあああっ!!」

魂の叫びとも言えるアツシユの声が木霊するがすっかりコミカドのペースであった。

「原告のアツシユさんはマイヒメ氏に対して慰謝料800万ヴァリスを請求していますが、アツシユさんの不貞行為や夫として妻を満足させられなかった事を含めればこちらが支払って貰う金額の方が多いかと思われます。無論のことながら公明正大なる裁判所におかれましてはそういった部分もしっかり考慮して頂けると思われますが」

「おいおい、娼婦と遊ぶくらい男なら珍しい事でも無いだろうっ!」

一夜だけの遊び程度で浮気と言われても納得出来ないに決まってるだろうっ!!!」

「さあ、裁判長……判決をお願いしますっ!」

「主文、原告の請求をいずれも棄却とする。尚、原告には被告に対して慰謝料400万ヴァリスの支払いを命ずる」

「こんなの不公平だあああああああっ!! 商売女とやっただけなのにいいいっ!」

「はーはっはっはっはっはっ! ざまあゝみろおおおおおっ! この私に勝てるわけ無いだろうがああ、このアンポンタンがああああああゝゝゝッ!」

「コミカド先生有難うございます。これでポークピッツから解放されますわあ!!!」

「誰がポークピッツだあああああああっ!!!!!!」

「やっぱりこの世界の裁判ってどこかおかしい……………」

思わず世界の違いを実感してしまうマユズミだったがどうしようも無いので諦めるしかなかった。

傍聴席の女性陣からの軽蔑、男性陣からの爆笑が温かくアツシュを迎え入れてくれるのだった。



「で、相変わらず滅茶苦茶なやり方で勝利を手に入れたと？」

「そうなんですよシャルデアさん。魔法大国からの長旅でお疲れでしたねぇ」

「ラキア文書の件は実に厄介だったぞ。あの強欲弁護士のせいで大変だった……………」

世界中の富裕層が租税回避をしていた証拠とされるラキア文書。

ラキア文書を流出させた者が魔法大国アルテナにそれらの詳しい資料を持ち込み亡命した為、シャルデアとアリスは現地調査の為に長旅に出ていたのだ。

大事になればミアハ・ファミリアの名前に傷が付くところではないのだ。

「それより、あの守銭奴が頼んでいた魔道書グリモアを何とか購入できたぞ。手に入れるのは大変だったが強制的に魔法を発現させる代物なのだから当然困難だろうしな」

「ああ、コミカド先生が欲しがっていた奴ですね。一体何に使うつもりなのか分からないけど私の方からコミカド先生に渡しておきますよ」

「心配せずとも既に渡してある。あの守銭奴が報酬として私に20

00万ヴァリスも渡したのがゾツとするがな」

「い、一体何をするつもりなのか私も恐いです……………」

二人の意見が最近はやけに一致するのだが同じ苦勞人同士で気が合うのかも知れない。

ふと、後ろから声が聞こえてきた。

「マユズミ様とシャルデア様もお悩みのようですねえ。 リリも少し

しか教えて貰えなかったのですよお」

「リリちゃん!？」

「あのお、私も居ますけどお……………」

背後に居たのはオネシヨ娘、ではなく草の者ことリリルカ・アーデとアリス・ブランドーであった。

最近妙に気配の消し方や頭脳面での能力が向上したりリリルカであつたがコミカドに付き合っていれば当然だろう。

「今日は近くに寄っただけなのですが、アリスさんやシャルデアさんが帰って来たらしいので久しぶりに会いに来たんですよ。 リリも日頃からお世話になってますし、ご挨拶でもと思ひまして」

「二もうつ、リリちゃんったらあ♡ 良い子でちゅねえ♡」

「リリはもう15歳ですっ!! このやりとり何度目ですかっ!!」

相変わらず自分を子供扱いするミアハ・ファミリアの女性陣に対してツツコミを入れるリリルカ。

身長と女性の象徴が大きくならないのは小人族パルウムの女性特有の悩みである。

「つて、話が逸れました。 コミカド様の魔道書グリモアを購入した事に関してですよっ—」

「ああ、そういえばそんな話だったわね。 コミカド先生ったら何を

するのかしら」
「あの守銭奴め、イヤらしい魔法でも手に入れるつもりだろうっ!」
「シャルデアさんの言う通り、ソレが濃厚な線ですね」

リリルカの言葉に三者三様の反応だがリリルカは興奮したように口を開く。

「コミカド様つてば異世界から人や物を召喚したり異世界に移動する魔法を手に入れるつもりなんですよっ!! リリも少ししか聞いた事が無いですけど、コミカド様つてば異世界から来たそうなんですっ!!!」

「そりやそうよ。 私もコミカド先生も同じ世界からこの世界に来たんだもの」

「はああああ!?!」

「あ、ゴメン。 ミアハ様とナーザーちゃん以外には黙ってたんだっ
た」

己のうっかりに舌を出してテヘペロするマユズミだったが歳のせ
いなのか似合っていない。

啞然とするシャルデア、アリス、リリルカは間抜けな表情をしてい
るのだった。

「で、どういう事なんですかつ!!」

「あゝ、詳しく話すと面倒なんだけどねえ……………」



「信じられん……………」

「リリもです……………」

「というか別な世界でもお二人は弁護士だったんですか……………」

シャルデア、リリルカ、アリスの三者三様の反応は似たり寄ったり
だった。

いきなり異世界などと言われれば当然の反応だろう。

だが、それよりも気になるのは異世界の文明レベルであった。

「魔石が無いのに明かりが点いたりする……………」

「人が月に行けるって……………」

「世界が球体だったなんて流石のりりも信じられないですう……………」

「まあ、皆の気持ちは分かるけどねえ。このオラリオは私達にとって200年くらい前の文明だから」

マユズミの言葉に絶句する3名はコミカド達の元居た世界がどんな世界なのか想像も付かないのだった。

極一部の者達しか学問を学べず、未だに産業革命も起きていないのだから当然だろう。

そんな折、二階からコミカドの声が聞こえてくる。

「マユズミいゝ、私の新魔法を行うので広い場所へ出かけるぞ」

「コミカド先生っ！　って、まさかもう魔道書を読み終わったんですか？！」

「当然だよ、愚鈍な君と一緒にされたくないねえ」

自信満々に話すコミカドは魔法を試したくて仕方が無いようだった。

神の恩恵とは神々でさえ予想出来ない奇跡を引き起こすモノなのだ。

才能ある者が上手く使えば途轍もない奇跡を引き起こせる上、LV9のコミカドならば何を起こすか分からないのも娯楽の一つとして成立するだろう。

不意にりりルカが興奮した様子で尋ねる。

「こ、コミカド様っ、やはり移動系の魔法なんでしょうか？」

「甘いなありりちゃん、確かに世界から世界へ移動出来る能力でもあるが異世界から指定した人物を呼び寄せる事も可能なのだよ。いわば召喚魔法でもあるのさ」

「…… 召喚魔法!?　……」

「服部さんでも召喚して美味しい料理を食べさせて貰わないとねえ。オラリオに来てから10年以上経過しているので向こうの世界がどうなっているのか分からないが」

訳の分からない現象にてオラリオまで飛ばされたコミカドとマユ

ズミは肉体が若返っていたからこそ現代日本の居た頃の容姿と変わっていないが精神年齢は当然ながら10年分成長しているのだ。

「さて、誰を召喚しようかねえ。モンスターみたいなのも召喚出来るかも知れないし広い場所へ行こうか」

「ちよ、ちよと待つてくれケンスケ氏。危険な存在が召喚されるかも知れないしロキ・ファミリアの面々のように強い人達にも居てもらうべきだっ！ 万が一の事を考えてくれ」

「シャルデアさんも私もロキ様の所に居ましたし少しくらいなら付き合ってくれるかも……」

「り、リリも見てみたいですっ！ 異世界に興味が有るので……」

「コミカド先生、もし間違つてドラゴンなんて召喚したら危険ですから皆の言うように強い方々に居て貰いましょうっ！」

やはり不安なのか興味が有るものの慎重な四名だったがコミカドの信頼性の無さを考えれば当然だろう。

「分かった分かった。 どうせLV9の私が居れば危険なんて有り得ないだろうけどねえ、はっはっはっはっはっ！」

「不安だ……」

「私もシャルデアさんと同じく不安です……」

「リリは少しワクワクしますねえ」

「服部さんや蘭丸君は元気かなあ」

かくして5名はロキ・ファミリアのホームへと移動するのであった。

不安と希望の種を胸に――

その頃、ロキ・ファミリアでは

「うっ、うう……ゆ、指が疼く……何だこの悪寒はっ……」

「どうしたんじやフィン。 珍しいのお前がダンジョンの外で不安を感じるなんぞ」

己の直感ともいえる指がかつて無い程に疼く小人族パルウムの団長の姿が

あつた。

酒を飲むガレスのほうは自分達をどうにか出来る者など存在しないのだから放って置けば良いだろうと可愛らしい少年姿の団長をどうでも良さ気に見ていた。



「で？ 何でウチの派閥まで来とるんや横分小僧。 豊満牛乳の件は感謝しとるが変な案件は御免やでえ」

「ロキ様、先程も仰ったように万が一の召喚に備えてLV5や6の方々を警護に就かせて欲しいのです。 ケンスケ氏の魔法が暴発しないとも限らないので……」

「わ、私からもお願いしますロキ様。 シャルデアさんの頼みを聞いていただけないでしょうか？」

「うつ、わ、分かったでシャルデアさんにアリスたん。 しかし異世界からやって来たとはなあ……」

アリスとシャルデアに深い心の傷を付けた負い目が有るのか断われないロキは渋々承諾する。

無論、異世界の存在とやらにも興味があるのだが。

「んじゃあ、ちいっと待つときや。 アイズたんやフィンが居れば問題無いやろ」

そう言つて己の眷属を誇りに思うロキは自信満々に胸を張る。

勿論、張るだけの胸が無いのだが今はどうでも良い。

「で、アイズやジジイにババア、フィンが良いとして何でバカゾネス姉妹まで居るんだよおっ!」

「うっさいわねベートったらあ! アイズと一緒に居られるんだから黙って喜んでなさいよ」

「な、何で俺が喜ばなきやいけねえんだよお!」

「お前達も少しは静かにしている。ガレスからも言ってやれ」

「はっはっは、面白そうではないか。異世界とはまた冒険心をくすぐるのお!」

10分後、そこにはロキ・ファミリアの精鋭である第一級冒険者達が集まっていた。

フィンの親指がこれまでに無い程疼くという事から、LV4以下は万が一の危険に備えてホームに避難させているのだが他の面々は己の武力に自信が有るので全く心配などしていない。

「にしても、ギヤアギヤアやかましいお子様ばかり集めたねえ。女性陣はもつと色気の有る子を用意して欲しいんだが、無い乳のロキ様では無理だったかねえ」

「誰が無い乳じゃボケェ!!」

「まあまあコミカド様もロキ様も落ち着いてくださいっ! 異世界に行くのも面白そうですけど何か召喚してみましようよっ!」

「コミカド先生、宇宙空間に繋がたりしないてくださいいよお」

「はっはっはっは、君のようなアンポンタンと一緒にするなあ。この私がそんなミスをしでかす訳無いだろ」

そう言いながら余裕の笑みで召喚魔法の準備をするコミカド。

固唾を呑んで見守るマユズミ、リリルカ、シャルデア、アリス、ロキ・ファミリアの面々。

だが、やはりフィンだけは険しい表情で身構えている。

「ねえねえ、リーガルディフェンス強欲弁護ってばあ! どうせなら強そうな人とか召喚してよ? 召喚するなら一般人よりも冒険者みたいな強い人のほうが面白いだろうし」

「ティオナの言う事も一理あるわね。どうせなら団長みたいに可愛

くて強い人が良いわあ!」

「ふむつ、ならば条件を強い者に指定してやってみようか。行くぞマユズミいゝ」

「「「「……………」」」」」

一同が見守る中、呪文を唱え始めるコミカド。

辺り一面が光り輝いていく中、フィンだけが警戒心を最大まで上げていた。

「来タレ、我が宣呪^{ノリト}ニ応エヨ。我が呼びカケニ応ジルナラバ、ソノ強キ姿ヲ見セヨ。異界ヨリイ出シ我が望ミノ者ヨ、馳セ参ジヨ我が眼前ニっ!!」

『イデヨ世界扉^{ワールドドア}!!』

——シャア ア ア ア ア!

辺り一面に光が溢れていく。

すると、コミカドの前に光で形造られた扉が出現する。

その妖しげな光はどこか神秘的で神々しかった。

ドッガアアアアン!

「きゃあ、ちよつと失敗じゃないでしょうねっ! ティオネやアイズは大丈夫?」

「平気……………それよりも」

「アタシは大丈夫よ。にしてもとんでもない魔力量ね……………」

周囲の者達がコミカドの世界扉に驚きを隠せず慌てる。

リルルカやアリスは僅かに興奮しており楽しみにしているのだが。

険しい表情のフィンだけが突如大声を出す。

「皆っ! 今すぐ逃げろっ!!!」

「つて、団長? 一体どうし……………」

「「「「「なっ!!」」」」」

爆発のように辺りが焦げているその地点を周囲の全員が見つめる。

コミカドでさえ呆気に取られているが、一番驚きなのはその凄まじいプレッシャーだった。

鎧を着込んだ長身の男(女?)が槍のような物を持って突っ立って

いるのである。

「な、な、何だとコイツはあつ!!! あ、有り得ない……………」

「リヴェリア、オヌシもそう思うか……………アレはまずい」

「つて、おいジジイにババアっ！ 何をビビってやがる。 おいアイズも何とか……………おいどうした？」

ベートがアイズのほうを見つめるとアイズの表情は真っ青になって絶句していた。

まるでこの世の終わりを見つめるかのように。

何故ならば、謎の鎧の人物から放たれる闘気と威圧感は間違いなく猛者オツタルを凌駕しており「死の気配」を撒き散らしているのだから。

「ま、ままま、マユズミくうん、何とか言って差し上げなさい。 ヤバくなったら色仕掛けだっ！」

「ひええ、ワ、私いいいいっ？ へ、へロー、ナイストウミートウ」

あまりのプレッシャーに恐る恐る話しかけるマユズミは鎧の人物を見つめる。

すると――

『ここはどこだ？ 見た所ブリタニアではないようじゃが、儂は何故このような場所におる？』

「へあ、あ、あの実は召喚魔法で貴方をお呼びしてしまったんです。

あ、魔法っていうのはですね……………」

『んあああ？ そうか道理でいきなり場所が変わったもんじゃわのう！ 石にならんという事は嘘を吐いている訳では無いようじゃなあ』
暢気な仕草で頭をポリポリ掻く老人のような存在にマユズミは話し合いが通じるのだと安心する。

もつとも、フィンだけは顔を真っ青にして絶望しているのだが。

だが流石の団長ともいふべきなのか即座に跪いて冷静な対応で話しかける。

「突然のことで大変申し訳ございません。 召喚魔法によって偶然貴方を召喚してしまったようなのです。 故意に召喚した訳ではありませんし元の場所へお返しする事も出来ると思いますので話だけで

も聞いてください」

「「「「「——っ!?!」「「「「「」」

普段のフィンを知らないコミカド達は分からないだろうが、これでもオラリオ最強の一角であるフィンが頭を下げて跪くなど見たことが無いのだ。

ティオネとティオナ、ベートに至っては半信半疑の様子で老人の實力を疑っているのだが…………。

「ほう、儂もいきなり辺鄙な場所に呼ばれて訳が分からんしのう。良からう、説明せい」

「ちよつと何よ団長に対してあの態度は「黙ってろティオネっ!」…………ってリヴェリア?」

いち早く空気を察したリヴェリアがティオネを黙らせると冷や汗をかきながら鎧の老人を見つめる。

ヘタな真似をすれば消されるのが理解できてしまう程に強いのが分かるからだ。

そんなこんなで何とかフィンとコミカドが説明を続けていく。

「成る程のう、魔法の実験という訳じゃったか。カーツカツカツカ、それで儂を呼んでしまうとは真に運が無い奴等よのう」

「し、信じていただけるのですか? 僕らの話を?」

『カアツカツカツカ、ヌシ等が嘘を吐いていないのは分かるワイ。

儂の前で嘘偽りを口にしていればとうの昔にお前さん達は石になるとるわい』

「「「「「——っ!」「「「「「」」

凄まじいプレッシャーを放つ老人は召喚者であるコミカドを見つめる。

あまりのおぞましい気配と濃密な死の気配に流石のロキも神の力

アルカナム

を解放する覚悟を決めていた。

『それで、オヌシ？　当然ながらこの儂を元の場所まで戻せるんじゃないかなあ？』

「も、もももも、勿論でございますとも。　今すぐにもお帰り頂けます」

『クツハアツハツハツハ、それを聞いて安心したわい。　これで帰れない等と言いおったら周囲の人間達を皆殺しにしておったが、オヌシを殺せば元の世界に帰れんのだし見逃そうぞ』

「ははあつ！　真に感謝の極みでございます。　このケンスケ・コミカド、感動しております」

目の前の老人の圧倒的な強さが分かるのか直ぐにでも元の世界へ飛ばしてやろうと決意するコミカド。

フィンとリヴェリア、ガレスは冷や汗をかいており、リリルカは漏らしているのだった。

エルフであるシャルデアは魔力や精霊の気配などを感じ取ることに長けているせいもあり、桁違いのパワーを感じ取ったため走馬灯を見ていた。

「で、では元通りの場所まで送りますので少々お待ちくださいませ」

『よからう。　それにしてもこの儂を前にして生き残れる人間は珍しいのだぞお。　クハハハハツ、《真実》を司る儂以外の9名ならば信用されずに殺されていたかも知れんしう』

「き、9名って貴方様のような実力者がまだ9名も居るのですか……」

老人の言葉に思わず驚いてしまうマユズミ。

勿論、ロキ・ファミリアの面々も絶句している。

『クカアツハツハツハツハ、儂なんぞ比べ物にならない怪物もおるぞよ？　封印されとったばかりでう、最近ようやく封印から解放されて自由になれたんじやわい』

「「「「——なっ！」「」」」」

こんな化物を封印から解き放つなど正気ではないと絶句する一同だったが、それより驚きなのはこの老人よりも強い存在が居るという

事だった。

誰だか知らないが厄介なことをしてくれたと呪うロキ・ファミリアとコミカド達は運命を恨んでしまう。

『安心せい。オヌシ達なら生かしておいても大した脅威にはならんし元の世界に戻る必要が有るので殺しはせんさ。クカカカッ、人間というのは相変わらず弱っちいのう』

その完全に見下すような発現にベートの額に青筋が浮く。

ティオナやティオネ、ベートなどは割りと鈍感なせいか他の者達に比べて危機感がそれほど無いようだ。

「ケツ、爺さん本気で強いのかよ？ リヴェリアやアイズも何とか言ってやれよ」

「ば、馬鹿な事を言うな。黙っているっ！」

「ベート、静かに……………」

顔を青褪めさせて取り繕う二人。

だが、鎧の老人はニヤリと不気味に笑う。

『そうじゃのう、ここに居るお前さん方を20秒以内に始末できる程度の実力じゃわい。遊び抜きならば10秒以内にアツサリ始末できさるじやろうなあ』

「ケツ、見え透いた嘘を並べやがって」

『カカカッ、儂は嘘を吐かんぞ。嘘を吐けば儂とて石になるからもう』

「何を訳の分からねえこ「いい加減にしろベートっ！」

「ウチの者が大変失礼いたした。もうすぐ再召喚が可能になるのでお待ちください」

顔面蒼白のフィンが珍しく怒鳴ると流石のベートやティオネ、ティオナも驚いたようだ。

そうこうする内に世界扉が完成していく。

「で、ではお通りくださいませ。元の場所に繋がっておりますので」
『ンウ？ もうそんな時間か、クカカカッ、命拾いしたのう小僧共。

どれ、帰る前に少しだけ実力を見せてやるわい』

「……………」なっ！……………」

そう言って膨大な魔力と殺意を充満させる鎧の老人はこのオラリオを殺意と悪意で包む。

その僅か数秒ともいえる時間、オラリオに住む全ての者達が死を感じ取り走馬灯を浮かべたのだ。

鈍感だったベートやヒリユテ姉妹もあまりの実力差に啞然としていた。

『クハアツハツハハツハツ、異世界とはまた面白い。では達者で暮らすが良いぞ』

そう言って老人は扉の中に去っていく。

扉が完全に消えるとその場にいた全員が屍餅について倒れてしまう。

一体何者なんだあの化物は、と全員の心が一つになった瞬間だった。

「し、し、し、死ぬかと思ったあああああつ!! 何て怪物を召喚してるのよお!!」

「お前が強い者を召喚しろと言ったんだろうがあ!!」

「り、りりは生きてる事がこれほど幸せだと感じたことは有りません……」

「やはり僕の勘は間違ってた……」

「ケンスケの魔法も狂ってるが……お前達の世界にはアレほどの化物がウジャウジャ存在しているのか?」

「り、リヴェリア様、多分アレは私達の世界とも別な世界の住人かと思っています」

「このシャルデア・エルロン………本当に死を覚悟したぞ」

皆が皆それぞれの感想を告げる中、コミカドはすこしだけチビっていた。

リリルカと同じように………。

「もつと安全そうなのを呼ぼう」

「「「もう止めとけよつ!!」」」」

コミカドの台詞に全員の心が一つになった瞬間であった。

「条件を指定すれば良いんだからもつと絞って召喚してみようよ。」

「ティオネだつてそう思うでしょ？」

「あんたねえ、さっきの怪物みたいなのが召喚されたらどうすんのよお」

「何時でも世界扉を使って元の世界へ送り出せるように準備しておけば良いんじゃないかな？」

「ティオナにしてはマトモな意見ねえ」

「どうやら無い乳娘のほうはまだ懲りてないのかもつと色々な召喚を試したいらしい。」

「ようし、ならば世界扉にいつでも放り込めるようにスタンバイしておこうじゃないか」

「すつごく不安です」

「リリも帰ったほうが良さそうかも……………」

「ロキ・ファミリアとか消し飛ぶんじゃ……………」

「各々が不安を口にするが当然の反応だろう。」

「最初に引き当てた存在が悪すぎたのだから。」

「これも魔法を使いこなす為だから仕方が無いだろう。　いくぞつ！」

『問おう。　雑種、貴様が我の^{われ}下僕^{マスター}か？』

「お帰りください」

『ふははははっ、この万夫不刀が有る限りワシは思うがままの不死身の肉体を与えられるのじゃ』

「お帰りください」

『一体、いつから鏡花水月を使っていないと……………どこだ、ここは？』
「お帰りください」

『バナッハ・タルスキー、マルチプル・インフィニティ、無限の私がお前達を切り刻む……………んん？』

「お帰りください」

『お前さんは何にも分かっちゃいねえよ。 人間の底すら無い悪意を………』

「他所で自爆しろおおおおっ！」

『今度は俺の切り札を見せてやろう………須佐能乎だ』
「失せろおおおおっ！」

『今のはメラゾーマではない、メラだっ！』

「どっちでも良いから帰れええ！」

とまあ幾度か召喚を繰り返したものの全員レベル違いの怪物揃いであつた為、即座に再召喚するハメになったのであつた。

明らかにヤバイ雰囲気 of 猛者ばかりのせい か 第一級冒険者の者達は自信を喪失してしまったようだ。

比べる相手が間違っているだけなのだが………。

「い、異世界ってのはあんな怪物揃いなのかしら………」

「こ、コミカド先生、そろそろ止めましょう」

「ケンスケ、流石にもうロキ・ファミリアが消し飛ぶかも知れんので………」

「儂も流石に懲り懲りじやわい。いくら儂でもLVが10や20あつても勝てそうに無い化物ばかりやって来るなぞ想像できんかつたわ」

「うん、止めようかあ！ さっさと私の居た事務所に空間を繋げれば良かった」

「……」 だから最初からそう言ってるだろうがあつ！ 「……」
ほぼ全員の意見が一致するが召喚の度に死にかけているのだから当然の反応だろう。

そんな彼等を見捨てて世界扉を使うコミカドはようやく自宅への空間を繋げる。

「や、やりましたよコミカド先生っ！ 私達の事務所ですっ！」

「早速だが戻ってみようじゃないか」

「あ、私も行く」

「それなら私も興味が……………」

「シャルデアさんも一緒に行きませんか？」

「アリスさんが言うのなら……………」

空間の裂け目を通して地球世界のコミカド事務所に入っていく一同。

ちなみにガレスとベートは精神的に疲れたのかさつきと戻ってしまった。

すると、事務所の奥からは懐かしい人影が現れた。

「あ、服部さあん、お久しぶりです。 元気になりましたかあ！」

「おや、コミカド先生にマユズミ先生、この1週間どちらへ？ それとソチラの方々は？」

「い、一週間？」

服部の言葉に声を合わせて驚くマユズミとコミカド。

「は、はい。 一週間もの間、お二人の姿がどこにも無いので搜索願を出そうかと真剣に悩んでおりました」

「こ、コミカド先生、やっぱり時間の流れが違うんじゃない……………」

「恐らくそうだろうな。 何が何だか分からんが時間は経過していないらしい」

「そ、それよりコミカド先生、ソチラのコスプレをしている方々は一体……………」

フィン、シャルデア、アリス、リリルカ、リヴェリア、アイズ、ヒリュテ姉妹、ロキを見る服部は痛々しい格好と危険物を平気で持ち歩く不審者集団に目を向ける。

服部の目から見てもかなりの達人である事が分かり殆どが戦闘のプロである事が理解出来るのだった。

「服部さん、今から全て説明しますので落ち着いてください」

「は、はい」



「異世界……………ですか？」

「はい、コミカド先生と私はつい一週間前に突如、別な世界へ移動させられてしまったんです」

「あちらでは10年以上もの時間が経ってますけどね」

「俄かには信じられません……………ですが、コミカド先生が分身の術など使えることから信じる以外には……………」

コミカドの能力であるシャドーマンを見て驚愕する服部は絶句してしまう。

「どうやらこちらの世界でも魔法は使えるようだ。」

「ねえねえ、箱の中に人が入ってるけどコレなにい〜」

「ティオナ、あんまり触っちゃダメよお！」

「ここがケンスケの住んで居た世界……………」

「あ、アリスさん、私も自分の目を疑ってしまうが……………家具や窓ガラスなどもオラリオより遥かに上質だ」

「は、はい、シャルデアさんの仰るように大気中のマナが全く有りません。精霊などの類や魔法使いが存在しないという事なのではないか？」

オラリオ組みが驚く中、コミカドとマユズミは今後の方針を話し始める。

「どうしますかコミカド先生、世界扉でこっちへ戻った以上はオラリオに住み続ける必要など無いですしオラリオの皆さんともお別れの時期なのではないですか？」

「お別れか……………それも悪くないな。しかし、デメテルちゃんやフレイヤちゃん、イシユタルちゃんのおっぱいは恋しいし分かれるのは辛いなあ……………」

「……………。……………」

この期に及んで考えるのは女の事だけというコミカドに一同は冷たい視線を向けてしまう。

しかし――

「神の恩恵を更に向上させれば若い肉体を何十年も保てるし、向こうの世界でこちらの世界の商品を買えば大儲けできるだろうからねえ、これでさようならというのは惜しいな」

「ああ、やっぱり何時もの先生ですね……………」

「ほっほっほ、それにしても小人やエルフなどという種族が本当に存在するとは。私も異世界に行ってみたものです」

「ではでは服部さんも行きましょう。なあに、服部さんならLV5くらい直ぐになれますよ」

軽い口調で言うコミカドだったが真面目な話、服部の實力ならば可能かも知れない。

ある意味、ヘルメス・ファミリアの団長であるアスフィ・アル・アンドロメダよりも万能者かも知れない。

「まあまあ、それよりコチラのお客様達にはお食事でもご用意致しますよう」

「これだけの人数だけど大丈夫ですか？」

「昔、中国にて満漢全席を一人で用意したことが有るので大丈夫かと」その言葉に10年ぶりのコミカドとマユズミは驚いてしまう。

神の恩恵を手に入ればどうなるのと考えたと真剣に恐ろしい男であった。

そして1時間後――

「メツチャ美味しいでえ、ウチの神生において最高の料理やでえ」

「へえ、これは素晴らしい」

「美味しいじゃんっ!!」

「あたしも団長の為に毎日こんな料理を……………」

「我がファミリアに引き抜きたい位の腕前だな」

「リリもコレほど美味しい料理は初めてですう」

「アリスさん、こちらも絶品ですよ」

「あら、本当ですね。美味しいのばかりです」

そこには服部の料理を楽しむ一同の姿があつた。

種族問わず虜にしてしまう料理をアツサリ提供できる服部とは本当に何者なのだろうかと思つてしまふマユズミは改めて人間の可能性を垣間見てしまうのだつた。



一カ月後

「ふははははははつ、マアユウズミィー、やはりオラリオは最高だねえ。

この間なんて日本製の安いビー玉や水晶のネックレスをプレゼントしただけで女の子からキャアキャア騒がれちゃったよお！」

「ああ、この時代の技術では作り出せないのを良い事にボロ儲けしてるワケですか……何にも変わってない」

世界扉の力にて世界観を移動できるようになったコミカド現代日本の製品をオラリオやラキアに持ち込む事で莫大な利益と収入を得ているのだ。

様々なファミリアが入手経路や作成方法を知りたがっているが不可能なのは言うまでもない。

「しま〇らとかユニ〇〇口の安い服やズボンが20倍以上もの価格で売れるのだからミアハ・ファミリアは安泰だねえ！ 日本円に換算すれば途轍もない利益になるだろう」

「この間も娼婦の女の子達に安い化粧品やシャンプー、美容液をプレ

ゼントして喜ばれてましたもんねえ」

「日本では市販の安物でもこっちの世界じゃ最高級品だから当然さあ！ あっははははははっ！」

ちなみにコミカドは世界扉にて美用品やダイエット食品の類を大量に輸入しているので女神や娼婦からのお誘いが更に増えてウハウハ状態であった。

恐るべし守銭奴弁護士だがそのお陰でミア・ファミリアの資産は小国の国家予算を超えるレベルにまで増えたのだから良しとするべきだろう。

「ふはははははっ、モンスター魔石は日本でも高く売れるからねえ。知り合いの宝石商に上手く加工して貰えるよう取引したから日本での弁護活動も減少させても大丈夫さあ。オラリオは最高だよお！」

「破壊されないように加工出来れば宝石と同じですもんねえ。

はあ、コミカド先生の拝金主義にはもう驚きませんよ」

「諦めたまえマユズミい、様々な王国にも大量の日本製品を売りつけているし場合によっては海外製品を輸入してこちらの世界へ普及させているからねえ、一度便利な生活を覚えたらもう抜け出せないのが人間だよ」

100円ショップのライターや輪ゴム、時計やスナック菓子は何十倍もの値段でこの世界の各国へ渡っていくのを複雑そうに考えるマユズミだが人々が幸せならば良いのだらうと思いを切り替える。

各国に金を貸している事からも利益だけで安泰だというのに更なる利益を求めるコミカドのやり方はエグいの一言に尽きるだろう。

「そういえばエルフの里から食料を支援してくれないかと昨日連絡が来ていましたね」

「んんっ？ ああ、あの連中か。普段は内も外も醜いだの下賤だのと他種族を見下しているクセに都合が悪くなるとコレだからねえ。

実に図々しい……が、食料という生命線を握るのは交渉にて有利になるのだから支援を行うべきだ」

「まあ、中にはそういうエルフも居ますけどエルフの里が困窮してい

るのだった。コミカド先生は無関係じゃないんですからねっ！」

そう、現代日本の知識や産業革命などの知識を元の世界から持ってきたコミカドはそれを使って急激に都市や王国を豊かにしていたのだ。

当然ながら人とは贅沢な暮らしに慣れれば戻れない生き物であり、わざわざエルフの里のような田舎や森の中に行こうとする商人は激減したのだ。

都市や国の中だけでも十分に経済が発展して生活できるからである。

徐々に外界との交流が遮断されていったエルフ達は内も外も醜いと蔑んでいた他種族に屈辱的な援助を申し出なければならぬ程に衰退し始めているのだ。

結局のところ自然と共存するエルフであつても悪天候や獲物の減少があれば生活を営めなくなるし、他種族の商人からの取引が無くなれば食料を得る手段も限られてくる。

農業だけで生活をするにしても限度がある上、外の世界がどんどん豊かになっていくのを見続けるエルフ達は次第に里を捨てて都会へ移り始めたのだ。

「にしても里のエルフ達も馬鹿だねえ。頭を下げて愛想良くしていれば他の種族の者達だって助けてくれるだろうに」

「それは……確かにそうですね。まあ、里で暮らしていた彼らは自分達こそが最も誇り高い種族だと教育されているんですからズレが生じるのは当然ですよ」

現在、様々な国家ではエルフの里からやって来たエルフ達に入国制限をしているのだ。

エルフの多くは高潔、言い換えればプライドが高い種族であり様々な理由から他種族との間にトラブルを起こしたりするのだ。

特にエルフの女性は他種族の男性と肌が触れただけでビンタをしたり蹴りを入れたり、握手でさえ汚い物を触るかのように嫌々するのだ。

育ってきた環境が違えば日常生活に齟齬が生じるのは当然であり、

世界各地でエルフ達の難民が問題となっているのだ。

「コミカド先生の力で最近はこの世界の経済や文明も発展し始めてきましたけど、私達の世界のようにエルフの森のような田舎は過疎化が進んでいるんですね。　なんか複雑な気持ちです」

「いずれは起きる問題だよ。　人が神から自立し、子が親から自立する。　そしてエルフもいずれは自然から自立して他種族との折り合いをつけないければならない時期なんだよ」

無論、オラリオでも多くのエルフ達が訪れているが大半は難民のようない扱いであり恩恵を刻む神々としてファミリアに適応できない者を入団させるわけにはいかない。

かといって里に戻っても仲間も食料も存在しないため、苦勞させられているのだ。

何千年という時間、他種族との関わりを極力避けていたツケが回ってきたのだろう。

引き籠もりの人間がいきなり社会に出ても他者と上手くコミュニケーションを取れないのと同じである。

特に種族間で仲が悪いドワーフ達はそういったエルフ達を自業自得だと罵るのだ。

国際社会におけるヒエラルキーの最下層にまで落ちぶれてしまった彼等だが、こういった問題は時間が解決してくれるものだと考えるコミカドはこの件には関わらない。

「まあまあ、ケンスケもそう言わずに助けてあげたらどうだい？」

「二つて、ミアハ様!？」

「ドアが開いてたんで入らせて貰ったよ。　悪いね」

貴公子の如く爽やかな笑顔を浮かべるミアハはやはり上品な仕草で佇んでいた。

恐らく買物か何かの帰りなのだろう。

「我がファミリアがこの世界における経済の発展に大きく貢献したのは周知の事実だ。　だが、それ故に多くのエルフ達の里は過疎化が進んでしまい難民状態の者達ばかりになってしまった」

「ミアハ様、それは我々のせいではありません。　放って置けば良い

んですよ」

「だが、中にはこの状況を生み出した我がファミリアやケンスケ個人を恨む者が居るのも事実だ。彼等にとつて他種族は穢れ、とは言えないまでも印象が悪い存在だからね。そんな存在に頭を下げて助けを乞うのは彼らのプライドを相当刺激したハズだ」

何千年、何万年という時間を行き続ける神々だからこそ冷静に分析できるのだろう。

ミアハの言葉は全て真実なのだ。

「だから、積極的とまでは言わないが何か有ったら助けて上げてくれないかな?」

「はははっ、ご安心くださいあい。何店舗か店を増やしたり開発する予定ですので彼等にも仕事を与えて助けて上げますから心配しなくとも問題無いですよ」

「頼んだぞケンスケっ!」

そういうとミアハは去っていく。

神格者と言われるだけの事はあつて貧しいものを見捨てられないのだろう。

もつとも、コミカドとしても問題さえ起こさなければ多少の援助はする予定だったので特に難しい話ではないのだが、問題はハイエルフだった。

エルフ達は里での価値観や倫理観を他国やオラリオにまで持ち込んで他種族に押し付けようとする物が多い。

そんな中、ハイエルフのような王族が店先でアルバイトなどしていたら絶対に苦情を出したり文句を言うだろう。

忠誠心や尊敬の念が半端ではないのだ。

「どこの世界にも人種間の問題は有るんですね」

「当然だろうな。肌の色、種族、時代、宗教といった概念は多くの悲劇を生んできた。少なくとも事は出来ても無くす事は不可能だろうな」

「……………」

「まあ、私としては折角の人材なのだから働き口を与えてミアハ・ファ

ミリアをより発展出来れば問題ない。ロキの派閥に居るリヴェリアやガレスとて種族のせいで仲が悪かったが時間が解決しただろう？」

「ええ、時間が解決してくれる事を祈りましょう」

そう決意するマユズミだったが、ふと可愛らしい声が響き渡る。

子供のような足取りで事務所へとやって来るリリルカは何時見ても無邪気そのものだった。

「コミカド様にマユズミ様、新しい案件ですよ。今回は工業地区のドワーフ達と最近オラリオに来了エルフ達とのトラブルですう！」

「ようし、行くぞマユズミい！」

「はい、先生」

この後、二つの世界を股に掛けた男の物語りはオラリオの伝説となる。

オラリオの安全（金儲け？）の為に今日もまた横分小僧は頑張るのであった。

【完結】その後の世界（キャラ設定）

○ケンスケ・コミカド

相棒のマユズミと共に突如として迷宮都市オラリオに飛ばされてしまった不幸（？）な弁護士。

何故か言葉は通じる為、紆余曲折の苦労を経てミアハ・ファミリアに入団するがこの世界の法律や裁判制度を知ると違法ギリギリの手段で裕福なファミリアから裁判で金を奪い続ける。

世界に一つのレアスキルを所持している事でLV9にまで到達したり、巧みな話術とトラップが神々のみならず一般人を惹き付けるのでオラリオの名物がコミカドの裁判となった。

その結果ミアハ・ファミリアはオラリオでもトップクラスの金持ちファミリアとして名を馳せる事になり、ギルドや歓楽街への寄付金なども多く渡していたので磐石の地位を築き上げる。

ちなみにコミカド自身はダンジョンにはあまり潜らず戦闘の経験は殆ど無い。

だがしかし、話術と策略にて大手ファミリアを壊滅状態にして頂点まで登り詰めたその姿は伝説となっており「冒険者こそが花形」というオラリオの住民の価値観を大いに変える事になった。

これにより弁護士を目指す者達が激増してしまい他の職種は人手が激減してしまうといった事も起こってしまう程に人々の心に変化を与えた。

グリモア魔道書にて世界扉を得てからは現代日本で安い日用品や嗜好品などを爆買いしてオラリオやラキア王国のような国々に売り捌く。

更に現代知識を用いた発明や商業システムの構築によって世界の文明レベルを大幅に向上させて莫大な財を得ながら贅沢三昧の生活を送り続ける事となった。

恐らく、下界に存在する神々をここまで楽しませた人間は存在しないだろう。

○マチコ・マユズミ

言わずとも知れたコミカドの相棒であり魔道具作成者としても才能を発揮する苦勞人。

毎回の様にリリルカ・アーデを利用した捏造や潜入操作を見せ付けられうんざりしているが、何だかんだで仕事をこなしていく弁護士のプロフェッショナル。

人間でありながらLV5という珍しい存在であり他の種族のように上がりやすいステータスがある訳でも無いのに不思議と第一級冒険者になってしまった。

余談だが、ヘルメス・ファミリアのアスフィ・アル・アンドロメダとは魔道具の話で盛り上がりすぎており仲が良かったりするのである。

コミカドが女神イシユタルや女神デメテルのような女神達と遊びまくったり娼婦の女とお楽しみを続けている事からもハニートラップの懸念が無いか毎回心配して胃を痛めている。

○リリルカ・アーデ

恐らく今作において最も運命が変わった人物。

冒険者達に虐げられている所をコミカドとマズミに救われたのが出会いだっただが、変身能力に目を付けたコミカドに気に入られることで第一級冒険者の生涯年収を遥かに超える裕福な冒険者となった。

コミカドがソーマの酒を気に入って資金を提供したせいもあり原作よりもソーマ・ファミリアの資金や財政事情にかなりの余裕が出来る。

それにより資金調達ノルマが軽くなった団員達がダンジョンに潜ったりトレーニングをする時間に余裕が出来たのでリリルカ自身も本来の歴史よりパワーアップしている。

正史では背丈の同じような者にしか変身出来なかったが、この世界ではある程度大きな存在や子猫のような小さな存在にさえ変身できるようにになっておりコミカドと本格的に手を組んでからは月に数万ヴァリスを稼ぐことさえ有った。

本人曰く「コミカド様はソーマ・ファミリアの団員よりも金に汚い」とのこと。

コミカドのツテで現代日本のRPGやオンラインゲームの存在を知ると「経験値をUPさせる」という画期的なアイデアを思いついてしまい、魔道書グリモアにて経験値UP魔法を習得する。

最終的に僅か7年でLV6まで登り詰めたリリルカは小人族バルウムの女性から畏敬の念を向けられる事となった。

LV4になり始めた頃から「とある小人」に交際を申し込まれるがアマゾネスの少女によって頓挫となる。

正史に比べて格段と待遇が良くなった珍しい人物でありコミカドに関わって幸せになった数少ない存在。

○ベル・クラネル

主人公なのに未登場。

○ヴェルフ・クロッゾ

同じく未登場

○ヘスティア

同じく未登場

○ヘファイストス

同じく未登場

○ミアハ

コミカドとマズミを拾った神格者の男神。

当初は異世界からやって来たという2人の存在に驚いていたが神は嘘を見抜けるのでアッサリ信じる事となる。

ナアーザ・エリスイスの義手によりディアンケヒト・ファミリアに莫大な借金を抱えていたがコミカドの紳士的な提案（違法スレスレの弁護活動）で膨大な利益を得てからは借金を返済する。

その後、コミカドにより標的にされたディアンケヒト・ファミリアは資産の殆どを裁判により敗訴して奪われてしまう壊滅状態になってしまったのだがナアーザは大いに喜んでいて。

僅か十数年で小国の国家予算並みの資産を手にしてしまった己の派閥に戸惑うものの難民状態となったエルフ達の為に資産を切り崩して生活援助をしている。

○ナアーザ・エリスイス

今作においてあまり登場しないがコミカドとマユズミのお陰で不遇な環境を抜け出す事に成功したので大満足の薬師。

宿敵であるディアンケヒト・ファミリアが壊滅状態に陥り破産した時はガッツポーズを取りながら大喜びして2人に感謝した。

また、アミッド・テアサナーレの移籍については過去の恨みからか大反対したので他派閥へ行かせる事となった。

ミアハのピンチにより他の団員達がアツサリ脱退した事もあり入団面接の難易度をかなり高く設定している。

ちなみにミアハ・ファミリアは世界最高峰の富豪ファミリアなので入団希望者が殺到中。

○シャルデア・エルロン&アリス・ブランドー

裁判にてミアハ・ファミリアへ移籍した2名。

元々仲の良い2人だったらしく傷ついたアリスを見捨てられない事がシャルデアの脱退理由。

何だかんだでロキ・ファミリアに居た頃より待遇が良くなっているので満更でも無い様子。

アリスの透明魔法とリルルカの変身魔法によるコンビネーションはまさしく悪魔のコンビでありコミカドの仕事における大きな手助けとなる。

○イシユタル

コミカドと手を組んでかなりの利益を得たある意味での成功者。

正史とは違いLV9のコミカドと友好関係にあったせいか金銭面や団員数などではフレイヤ・ファミリアを追い抜いており敵対心が多少薄れていた。

その為、正史のようにフレイヤ・ファミリアと全面衝突する事は無く若い娼婦を優先的にコミカドに提供して接待をしながら着々と己の派閥を強化していった。

ある意味で救われた存在だろう。

○娼婦達

イシユタルの眷属である戦闘娼婦の総称。

コミカドにより高品質な日本製品を腐る程プレゼントされたり金払いが良かった為、原作のように不遇な目に合う者は少なかった。

また、コミカドの女好きが幸いしたのか性病や大怪我を負ってもエリクサーや解毒剤、最高レベルの治癒魔法使いを用意して貰ったりもしている。なので割と本気で感謝している者も多い。

本来の運命とは異なり幸せなその後を送った者が多いというのも皮肉な話だった。

○フレイヤ

美の女神にして最大派閥の主神。

コミカドの魂の色を見抜き興味をそられたのが始まり。

それまでオラリオで最強と謳われていた己の眷属オツタルを超えた時点からは更に執着するようになる。

何度か食事やお楽しみも共にした仲であり良好な関係を築いている。

余談だが、コミカドから貰う高品質な日本製の美用品はかなり気に入っており美しさに磨きがかかったとか……

○オツタル

迷宮都市オラリオにて最強と恐れられた武人。

コミカドに関してはLVこそ高いものの戦闘経験の無さから戦えば自分が勝つと確信しているのでそこまで気にしてはおらず数年後にLV8にまで登り詰める。

○ロキ

本来は男神なのに女神という狂った存在。

貧乳をコンプレックスにしており豊満牛乳の件では100%中の100%になった筋肉妖怪のような姿になる。

数多の裁判で敵にも味方にもなるコミカドには苦勞させられているが娯楽そのもののコミカドの事は割と気に入っており数十億単位の金を裁判で奪われたのだが何とかやりくりしている。

日本の存在を知り豊胸手術が行われていると知ると金貨の山を積んで手術を頼み込んだ。

○ティオナ・ヒリユテ

主神と同じく貧乳がコンプレックスの少女。

暗黒武術会における闇ブローカーのような姿になった時は本気で自殺を考えた哀れな少女。

○アイズ・ヴァレンシユタイン

正史とあまり変わらない

○ガレス・ランドロツク

正史とあまり変わらない

○ティオネ・ヒリユテ

ティオナの姉だが正史とあまり変わらない。

○リヴェリア・リヨス・アールヴ

年齢不詳の美女ハイエルフ。

エルフの里開発計画にてコミカドと共闘した事が出会いの始まり。

そこそこ良い関係を築いており男女の仲に発展するのでは？と思われるがその後の詳細は不明。

○ベート・ローガ

強さとアイズを求める一途な青年。

召喚魔法で呼び出された怪物クラスの連中よりも強くなってやる、という目標を胸に修行中。

勝てるワケ無いのだが……………

○レフィーヤ・ウイリデイス

今作における最大の被害者。

コミカドのせいで千の妖精サウザンドエルフと呼ばれていた二つ名が千の淫乱妖精サウザンド・ピッチ・エルフとなつてしまいファミリア内ではアバズレ扱いされている。

街を歩けばやりたい盛りの男達に金を渡されナニをしてくれないかと頼まれる始末。

派閥内で誤解が解かれるまでの1年間、本物の地獄を味わい肩身の狭い思いをする事となった。

貞淑なエルフ族において尻軽な女は軽蔑の対象なのである。

○エルフの里の住人達

コミカドにより経済システムや商業用路の確立が達成されてしまったので森に近づく者達が居なくなってしまった事で過疎化が進む。

安くて安価な商品を大量に入手できるせいもあってか商人などは都会ばかりで仕事をするようになり田舎やエルフの里などは衰退が進んでいる。

その結果、若いエルフ達はどんどん都会へ憧れて出て行ってしまい遂には食料を自給出来なくなったり薬品を入手出来なくなるなどの危機に陥り多くのエルフが難民状態となってしまうた。

現代日本の高度経済成長のような者である。

里の中にて他種族を見下したり嫌悪したりする者が多かったせいもあり種族間のトラブルが多く、職に就けない者が続出している。

召喚者一覧

○鎧の老人

嘔吐きを石にする力を持っているようだが正体は不明。

他に9名の仲間がおり封印から解放されたばかりだそうだがその強さはオラリオを単独で壊滅できるほど。

「ブリタニア」という地名を話していた事からもソコに住んでいたのかもしれない。

《真実》を司る存在とははたして……………？

余談ではあるが世界扉によって移動させられた先はアメリカ合衆国であり数千万単位の死傷者が発生する大虐殺になったそうだが大型爆撃機やミサイルによって何とか退治されたらしい。

○傲慢そうな黄金の鎧の男

「雑種」という上から目線の言葉で相手を見下す存在。

かなりの実力者とも言えるだろうがその正体は謎に包まれている。

○サムライのような男

手に持った刀を「万夫不刀」と呼んでいた不死身（本人曰く？）の肉体を持つ男。

ちなみに万夫不当の当は刀ではない。

一体どこの剣士なのだろうか……………？

○死神のように凶悪なオーラを放つ男

鏡花水月とは一体何の事なのだろうか……………？

持っていた刀に秘密が有りそうだが真相は不明……………

○突如現れた同じ顔をした何百人もの男

どうやら分身を生み出しているようだが、はたして能力なのだろうか……………？

バナツハ・タルスキーとはもしかやバナツハ・タルスキーの矛盾の事

パラドックス

なのか……………？

ひよつとすると哲学者なのかも知れない……………？

○今にも死にそうな手足の千切れた老人

今まさに自爆しようとしているような圧倒的な悪意の実力者。

一体どこの誰なのだろうか……………？

○赤い目をした忍者のような男

ドス黒いオーラを放つこの男は誰なのだろうか……………？

○エルフのように耳が長い老人

メラゾーマ、メラとは何だろうか？

サッパリ分からない